法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

研究展望(平成18・19年)

橋本, 朝生 / 表, きよし / 小林, 健二 / 高橋, 悠介 / 宮本, 圭造 / 伊海, 孝充 / 江口, 文恵 / 山中, 玲子 / 玉村, 恭 / 竹内, 晶子

(出版者 / Publisher)
The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University / 法政大学能楽研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
能楽研究 : 能楽研究所紀要 / NOGAKU KENKYU : Journal of the Institute of Nogaku Studies
(巻 / Volume)
34
(開始ページ / Start Page)
53
(終了ページ / End Page)
120
(発行年 / Year)
2010-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007501

Hosei University Repository

研究展望（平成十八年）

前年分までに引き続き共同執筆により、平成十八年に発表された能・狂言関係の単行本、および雑誌等に掲載された論文を概観する。近年、作品研究や能楽史研究といった従来の枠組みには収まらない新たな研究が多く発表されている。そうした研究動向を踏まえ、本年分からは演出研究の項を復活させ、技法研究を加えて「演出研究・技法研究」とし、さらに「その他」の項目を新たに設けることにし、全体を単行本（表きよし）、資料研究・資料紹介（小林健二）、能楽論研究（高橋悠介）、能楽史研究（宮本圭造）、作品研究（山中玲子・伊海孝充・江口文恵）、演出研究・技法研究（山中玲子）、狂言研究（橋本朝生）、その他（玉村恭）、外国語による能楽研究（単行本・竹内晶子、論文・玉村恭）の九つに分けて、分担執筆した。なお、「その他」については、平成十九年分も併せてこちらに掲載している。パンフレットなどに発表された小論にもなるべく目を配り、本年の主要な論文を網羅するよう努めたが、重要な論考を見落とすなどの遺漏も少なからずあろうかと思う。ご寛恕を乞う。

単行本

『説話論集第十五集芸能と説話』（説話と説話文学の会編。A5判448頁。1月。清文堂出版。八五〇〇円）

書名どおり説話に関する論考を集めた本だが、第十五集は芸能と関わる説話についての論考が収められている。能・狂言関係では、田口和夫「田楽・猿楽と説話―能楽大成前夜の芸能再考―」、山本登朗「謡曲「井筒」の背景―樅本の業平伝説―」、天野文雄「《花筐》にみる「物語」の創造―作り能《花筐》の制作事情と義教初政期における世阿弥の環境―」、大谷節子「この世で一番長い橋―能「長柄の橋」考―」、小林健二「能《合甫》の説話的背景」、稲田秀雄「狂言嫁取り物の展開と説話世界―「二九十八」「吹取」、そして「因幡堂」―」、関屋俊彦「狂言《通円》をめぐって―付、翻刻「通円家文書」―」、中嶋謙昌「江戸初期における一門三賢説話の消長―能《正儀世守》と古浄瑠璃『小篠』を手掛かりに―」がある。個々については「論文」の項で取り上げているので、そちらを参照されたい。

Hosei University Repository

『琵琶法師の『平家物語』と能』（山下宏明著。A5判448頁。2月。塙書房。八八〇〇円）

長きにわたり『平家物語』研究に取り組んできた著者による書き下ろしの論集。『平家物語』の語り本と読み本との比較検討を通して琵琶法師の語りの特色を明らかにし、その平家語りと能の世界に通じているものを探ろうとする。「Ⅰ琵琶法師の『平家物語』」では、平家語りと能との関わりを考察する上で必要となる事柄をまず検討している。「Ⅱ平家琵琶と能の修羅を読む」では、〈俊寛・頼政・実盛・巴〉など十九曲を取り上げ、『平家物語』における話を分析するとともにそれが能ではどのように描かれるかを考察する。

『能の地拍子研究文献目録』（藤田隆則編著。A4判188頁。2月。京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター。非売品）

科学研究費補助金による研究成果の報告書。能の地拍子に関連する文献を蒐集・整理し、目録としたもの。単行本の部と雑誌記事の部に分けられ、それぞれを江戸中後期から明治三十五年の『能楽』創刊までの第一期、大正十二年の関東大震災までの第二期、昭和二十年の太平洋戦争終了までの第三期、現在までの第四期に分ける。単行本の部では慶安五年（一六五二）刊の『謡之秘書』を筆頭に一四七種の文献が取り上げられ、書誌事項や写真のほか著者によるコメントが記される。雑誌記事の部は『能楽』『謡曲界』などの雑誌に掲載された地拍子関係の記事を期ごとに一覧表にしている。十分に理解するには難解な地拍子だが、地拍子関連の文献が多く作られており、どの時期も地拍子に対する関心が高かったことが窺える。

『桂坂謡曲談義』（ジェイ・ルービン、田代慶一郎、西野春雄編。B5判149頁。3月。国際日本文化研究センター）

日文研叢書37。ハーバード大学教授のジェイ・ルービンが国際日本文化研究センター客員教授を務めた平成十二年から翌年にかけて、共同研究「生きている劇としての能―謡曲の多角的研究」で行った共同討議を収録したもの。討議された十九曲のうち〈高砂・定家・三井寺・弱法師・鞍馬天狗〉の五曲が取り上げられている。討議に参加したのは日本人・外国人の研究者や能役者、大学院生などで、各曲ともに様々な問題へと話が及んでおり、活発な議論が展開された様子が伝わってくる。「桂坂」は国際日本文化研究センターがある京都市西京区の地域名。

『伝統芸能の特殊な上演に関する調査研究』（東京文化財研究所芸能部編。A4判348頁。3月。東京文化財研究所芸能部）

東京文化財研究所芸能部が行ったプロジェクトの報告書。内容は四部に分かれ、第一部が「三番叟・三番三の調査報告」である。高桑いづみ「三番叟・三番三の技法」は現行の三番叟（三番三）の所作や笛の地を、和泉流の三宅派・野村派、大蔵流の茂山家・山本家それぞれについて報告する。小田幸子「「三番叟問答」の考察と翻刻」は、「揉の段」終了後の三

Hosei University Repository

番叟と応対役との問答について、様々な資料に見られるものを翻刻・紹介して考察を行っている。第二部にあたる高桑いづみ「能「卒都婆小町」の旋律復元」は、平成十四年十一月に横浜能楽堂で行われた企画「秀吉が見た『卒都婆小町』」の復元プロセスの報告で、全詞章について、節がある場合は復元された旋律の五線譜が、詞の章段の場合はアクセントの高低図が掲げられている。

『なんとのう　ええ―慶次郎雑談―』（片山慶次郎著。A5判336頁。5月。檜書店。二五〇〇円）

観世流シテ方として活躍する著者が、昭和三十四年から現在に至るまでに新聞・雑誌やパンフレットなどに掲載した文章を集成しているが、一部に書き下ろしのものもある。「第Ⅰ章　七十代半ばに近づく今思うこと」「第Ⅱ章　能の姿と心」「第Ⅲ章　能の魅力」「第Ⅳ章　能と生きて」「第Ⅴ章　縁ある人々」「第Ⅵ章　未来への継承」から成り、役者としての生き方、様々な作品への思い、周囲の人々との関わりなど、著者の能に対する考えが満ち溢れている。

『能の歳時記』（村瀬和子著。B5判155頁。5月。岐阜新聞社。一九〇五円）

平成十二年から十七年にかけて岐阜新聞に掲載された能の作品紹介から40曲を選んで一冊にまとめたもの。春九曲、夏十一曲、秋冬各十曲の四季ごとに分けた形になっている。それぞれの作品の内容や背景、関連する事柄がわかりやすく記されている。

『戦国武将と能』（曽我孝司著。四六判177頁。7月。雄山閣。二六〇〇円）

東海・北陸地方を中心に、戦国時代の文書資料や能面などを手掛かりとして戦国武将と能との関わりを考察する。第一章「戦国城下の能」では越前の朝倉氏、能登の畠山氏、甲斐の武田氏、相模の北条氏などが能を重視していた様子を紹介する。第二章「戦国武将と愛好曲」では演能記録を分析しながら武将たちが次第に教養を身につけて愛好曲を持つようになったと説く。第三章「武家能の大衆化」では武将の能楽愛好が庶民にも影響していく事を論じている。第四章「戦国時代の面打ち」では当時はまだ能面制作者に対する関心は薄かったとし、第五章「世襲面打ちの登場」では近江井関家や越前出目家の特色を紹介している。第六章「豊臣秀吉と能」では、秀吉の能楽愛好を契機に武将たちもさらに能楽に力を入れるようになり、それが能面制作を活気づかせるとともに能面所有欲をかきたてることとなったとする。

『大蔵虎明能狂言集　翻刻　註解』（大塚光信編。A5判。上巻636頁。下巻550頁。7月。清文堂出版。2冊揃二八〇〇〇円）

寛永十九年に大蔵虎明によって成った「狂言之本」を翻刻し、頭注を付したもの。上巻には「脇狂言之類」「大名狂言之類」「聟類山伏類」「鬼類小名類」の作品が収録されており、下巻には「女狂言之類」「出家座頭類」「集狂言之類」「萬集類」の作品が収められている。抄物などの用例を援用する語

Hosei University Repository

注に特色がある。

『花のほかには松ばかり　謡曲を読む愉しみ』（山村修著。A5判188頁。8月。檜書店。一九〇〇円）

能の舞台を観る楽しさだけでなく、謡曲を読むことの楽しさも知ってもらおうという書。「I謡曲を読むということ」では、夢野久作・野上豊一郎・宗左近といった人々の謡曲に対する考えを紹介しつつ、わずかな言葉からイメージが広がっていく謡曲のすばらしさを説く。「II」では〈阿漕〉から〈夜討曽我〉に至る二十五曲を取り上げ、それぞれの作品を読む上での注目点を説明する。一曲あたり六頁の説明なのでやや物足りない感じもするが、著者がどのような角度から謡曲を読むことを楽しんでいるかが伝わってくる。

『中世文学研究は日本文化を解明できるか』（中世文学会編。A5判408頁。10月。笠間書院。三二〇〇円）

中世文学会創設50周年を記念して平成十七年五月に青山学院大学で行われたシンポジウムをまとめたもの。このシンポジウムは第1分科会「資料学―学問注釈と文庫をめぐって」、第2分科会「メディア・媒体―絵画を中心に」、第3分科会「身体・芸能―世阿弥以前、それ以後」、第4分科会「人と現場―慈円とその周辺」から成るが、第3分科会（コーディネーターは小林健二）では松尾恒一「南都寺院の諸儀礼と芸能―世阿弥以前の身体を考える」、松岡心平「芸能の身体の改革者としての世阿弥」、宮本圭造「室町後期の芸能と稚児・若衆」の三つの発表があり、それを受けて五味文彦・竹本幹夫・兵藤裕己のコメンテーター三名が発言を行っている。シンポジウムの様子が記録としてまとめられたことにより、芸能における身体とその表現の問題を探ろうとする様子を詳しく知ることができる。

『ワキから見る能世界』（安田登著。新書判234頁。10月。日本放送出版協会。七四〇円）

ワキ方下掛り宝生流の役者である著者によるワキの役割を手掛かりとしながらの夢幻能論。まず、能とは異界と出会う物語であり、新たな生を生き直すために人々は異界と出会う物語を求めるとする。そして、異界と出会う役割を持つワキは旅をすることが重要であり、「ワキ的世界」に入るためには決断と隠喩化が必要だと説く。松尾芭蕉や夏目漱石を「ワキ的世界」を生きた代表者として取り上げ、非人情の旅を経験するよう勧める。キーワードを巧みに生かしながら論を進め、能の作品や様々な事柄にも話が及んでおり、著者の視野の広さがうかがえる。

『味方玄　能へのいざない　能役者が伝える能のみかた』（味方玄著。B5判128頁。10月。淡交社。二五〇〇円）

観世流シテ方で意欲的な活動を展開している味方玄による能の入門書。「能のしくみ　まずは一番見てみよう」では〈松風〉を取り上げて能一曲の進行の様子やそれに関わる役者について紹介する。「能の主役脇役」では面・装束・作り物・能舞台など能には欠かせない様々な物を説明する。「能役者が教える　ここが観どころ、オススメ能二十曲」では〈葵

Hosei University Repository

上・井筒・隅田川〉などの作品のあらすじとポイントを記している。能のあゆみや能の素材を紹介する「能の基礎知識」は味方健の執筆。親切でわかりやすく作られた入門書。「閑話休題」として書かれている著者の子供時代や内弟子時代の話も面白い。

『能楽と女性：一考察―能楽における女性の役割―』（宮西ナオ子著。A5判277頁。11月。檜書店。私家版）

ライターとして活動する著者が、大学院の博士論文を基にまとめた本。「第1章　歴史的考察」では古代から太平洋戦争に至るまでの能楽と女性との関わりを考察する。「第2章　現状と発展」では戦後の女性能楽師の活躍の様子を具体的に考察する。本書の後半では「聞き書き」として観世流シテ方足立禮子・宝生流シテ方影山三池子ほか七人の女性能楽師などへのインタビューが掲載されている。さまざまな資料を生かしながら、女性能楽師の今後の活動の可能性を探っている。

『週刊人間国宝24　芸能・能楽1』（週刊朝日百科。A4判変型32頁。11月。朝日新聞社。五三三円）

全七十冊で人間国宝を紹介していく週刊朝日百科のシリーズの一冊。喜多流の粟谷菊生・十四世喜多六平太・後藤得三、金春流の櫻間道雄、金剛流の豊嶋彌左衛門のシテ方五人を取り上げる。能楽研究者や能楽評論家による文章や対談などにより各人の魅力を紹介している。観世流や宝生流の紹介など能の基礎知識を紹介する頁もある。

『週刊人間国宝25　芸能・能楽2』（週刊朝日百科。A4判変型32頁。11月。朝日新聞社。五三三円）

全七十冊で人間国宝を紹介していく週刊朝日百科のシリーズの一冊。観世流の九世片山九郎右衛門と八世観世銕之丞、宝生流の三川泉・近藤乾三・高橋進・松本惠雄のシテ方六人を取り上げる。

論文

【資料研究・資料紹介】

この年の資料紹介と研究は、数は少ないものの時代やジャンルともにバラエティに富んだものであった。

まずは中世の資料紹介から。及川亘「薬師寺所蔵「休岡八幡宮遷宮記録」について（上）」（『東京大学史料編纂所研究紀要』16。3月）は、薬師寺の南に位置する休岡八幡宮の遷宮にともなう法会や芸能奉納に関する記録の翻刻紹介であるが、能楽研究の資料として有効なのは、演者不明ながら永正十二年の猿楽記事において、〈ヲヰ松・ス、カノ明□・シヤウ、、・アラシ山〉などの曲名が見え、天文十五年の記録に金春大夫や大蔵大夫の名があがり、〈舟弁慶・当麻・放下僧・竹生島・松風・矢立賀茂・エヒラ・紅葉狩・通盛〉の能が演じられ、源衛門という役者が「キヤウケンサル」を行った記事が見られることである。室町期の神事猿楽を研究するうえの一資料となろう。このような寺社史料に能楽関係記事があることは十分に考えられ、今後一層の注意が必要となろ

Hosei University Repository

う。

江戸時代の資料は二点。飯塚恵理人「豊嶋十郎筆『高安流仕舞附　地』(三)」(『名古屋芸能文化』16。12月)は、高安流の豊嶋十郎師が書き写したワキ方仕舞附として貴重なものである。「天・地・人」の三冊組で、今回は「地」冊の前半の翻刻。浅見恵・松田存「盛岡南部藩『御能日記』(一)～(七)」(『宝生』55―5～7・9～12。5月～7月・9月～12月)は、南部藩『御能日記』を翻刻したもので、盛岡南部藩の文化七・八年における盛岡城下の春日神社祭礼の能興行や城内の演能における番組などの記事が紹介される。江戸時代の地方大名家の能の実態を知るうえで好資料となるが、解題が付されず、しかも見開き2頁から4頁に細切れに掲載されるので、全貌を把握しづらいことが難点である。

珍しく近代の資料紹介があった。横道萬里雄「《資料紹介》昭和二年制定「観世制度」」(『楽劇学』13。3月)は、島崎稔『能楽社会の構造』(島崎稔・美代子著作集第十巻。礼文出版。平成十六年)に翻刻紹介された昭和二年に観世元滋により制定された『観世制度』の全文を、通行の字体に改め、濁点や句読点を施すなどの校訂を加えて翻刻したもの。「宗家」などキーワードの解説も加えられ、読みやすさがはかられている。近代における家元制度を研究するうえで基本資料となろう。

次に、文庫の総合調査研究の成果として、伊海孝充「河村隆司文庫蔵書目録」(『能楽研究』30。6月)をあげる。京都の観世流シテ方河村隆司氏が能楽研究所に寄贈された謡本・小謡・伝書・付など約六〇〇点を写本・版本に大別し、さらに詳細に分類整理して目録化したもの。蔵書の約四五〇点が版本の謡本であり、鴻山文庫にない書目が所蔵されることや、金剛流の謡本が十組あまり含まれているのは特筆すべきであり、また、明治以降に新作された特殊謡本を多く所蔵する点も特色をなしている。資料整理は地味だが大切な作業であり、本目録により今後の研究に活用されることが期待される。

装束に関する報告もあった。長崎巌「新発見資料・ボストン美術館所蔵『献英楼画叢』に関する調査報告」(同上)は、ボストン美術館に所蔵される能装束十六点を模写した画帖『献英楼画叢』の紹介。東京国立博物館本とクレットマン本の連れになる、江戸時代後期の将軍家や一橋家・田安家・清水家によって贔屓された宝生大夫所持の能装束を写したもので、能装束の「写し」を作るための下絵的な役割を担っていたと考察する。江戸時代の能装束の実態と、制作や使用、貸与などを窺い知るうえで好資料となろう。

最後に謡本の国語学的な考察を一つ。長谷川千秋「世阿弥自筆能本におけるマ・バ行音の表記」(『国語文字史の研究』9。和泉書院。4月)は、世阿弥自筆能本の用字における表記法の研究で、マ・バ行音の表音の表記は書かれたままに謡われたことを指摘され、さらに他の資料と比較して、バ行音からマ行音へと変化した新しい語形を表記する傾向にあることを明らかにされた。

Hosei University Repository

【能楽論研究】

世阿弥能楽論については、『能と狂言』4号（8月）の『拾玉得花』特集と、重田みちの一連の論考が注目される。

まず、『能と狂言』では、前年八月の世阿弥忌セミナーのシンポジウムをもとに、「『拾玉得花』発見五十年」というテーマの特集を組み、大谷節子が「『拾玉得花』発見の経緯」についてふれる他、五本の関連論文を載せる。『拾玉得花』は、禅竹筆の本を金春八左衛門安喜が転写した金春本が現存唯一の伝本であり、本文全体に朱筆で振仮名や注記等が施されている。こうした朱筆傍記については禅竹加筆説があったが、表章「『拾玉得花』金春本の朱筆傍記考」では、他の世阿弥伝書における振仮名・傍注の実態の復元的考察を通して世阿弥自身による傍記とし、『世阿弥十六部集』で底本の振仮名の多くが省略されたことなど研究史上の問題点も指摘する。

竹本幹夫「『拾玉得花』の再検討―序破急説その他について」は、『拾玉得花』の条ごとの内容を世阿弥伝書の展開の中に位置づけ、大半はそれ以前からの世阿弥理論の概説とみられる一方、成就説と結びつけて序破急説を説明する第五条は入門的解説の域を超えた特殊な一条と評価する。そして、第五条にみえる「序破急」概念は、『遊楽習道風見』にみえるような習道階梯論への序破急説の援用に近く、こうした「序破急」概念は『花鏡』「舞声為根」に「合掌の手より、五体を動かし、手を差し引き、舞一番を序破急へ舞おさむる曲道」とみえる、舞初めから舞納めまでの曲道を漠然とさす「序破急」に発しているとする。

天野文雄「世阿弥と月庵宗光―両者をつなぐもの」は、『拾玉得花』第三問答の末尾に月庵宗光のエピソード（月庵の語録や法語にみえない）が記される背景として、将軍義持から篤く敬慕されていた惟肖得厳が『月庵禅師語録』跋文で月庵を「吾師」としていること、有力守護大名の山名時熙が月庵の外護者であったことなど、将軍や幕府周辺での月庵の位置を重視する。また、月庵は臨済宗大応派の禅僧だが、曹洞の教説を取り入れようとした時期があること、世阿弥が帰依した曹洞宗の竹窓智厳が、月庵が参じようとした総持寺の峨山韶碩の法脈を引いていることなども、世阿弥に月庵への親近感をいだかせたと推測する。

落合博志「『拾玉得花』第五条の序破急成就説について―禅竹における受容を含めて」は、『拾玉得花』第五条の序破急説について、序・破・急それぞれの性質や具体的内容を説かず、その正しい展開と完結、「成就」を強調するという特徴から、これを序破急成就説と呼び、晩年の世阿弥が序破急成就説によって能の全体を統合しようとしていたことが、第五条に同書他条の説が引き寄せられていることからうかがえるとする。また、この第五条の序破急成就説は、禅竹が六輪一露説で住輪を「落居」「成就」の位とすることや、「一風・一音」などに上三輪が備わるとする禅竹の論にも影響を与え

Hosei University Repository

ており、「心性の序破急」など演技の基底にある役者の心を問題とする点も禅竹の「一露」に影響していると論じる。

三宅晶子「軍体と砕動風―『拾玉得花』我意分説をめぐって」は、三体論の軍体は当初、修羅というよりは「勢へる」事を演じる人体(『至花道』)で、その用風が「身動足踏の生曲」「砕動風」にあたるように鬼の演技と共通していたのに対し、『拾玉得花』の我意分説では、多くの秀曲が生まれた修羅能を念頭に軍体が修羅能の人体とされ、砕動風は鬼人体と物狂に応用可能な優れた用風であるという認識に立ってわかりやすく現実的な演技論を展開させているとする。以上が、『能と狂言』の『拾玉得花』特集。

さて、重田みちは、『花伝』の増補部分を推定しつつ、世阿弥の思想とその変遷を問題にする論文を相次いで出している。「『風姿花伝』の完成と世阿弥の思想―増阿弥の存在のかかわりの可能性」(『芸能史研究』172。1月)では、義持の周辺で増阿弥が活躍し田楽新座の地位が上がった時代に奥義篇が増補されたと想定、奥義篇の「十分に七八分極めたらん上手」は増阿弥を示唆し、増阿弥が必ずしも地方の観客や庶民に人気があったとはいえない状況が世阿弥の衆人愛敬論に反映していると推測。世阿弥は能の芸の道を存続させるための書として『風姿花伝』を完成させており、背景には田楽新座の下位に立たされた自座の存続への危機感があるものの、奥義篇には増阿弥へのライバル視を昇華した境涯もあらわれていると論じる。

また、「『花伝』「奥義」執筆の契機と意図―世阿弥能楽論における「風体」「十体」」(『日本文学』55。2月)は、増補部分を除いた当初の奥義篇で最も強調されているのは幽玄の風体の修得よりも十体修得論であり、座のリーダーとして、観世座の保守的な役者に対し、古来の大和猿楽の芸という既成概念に囚われず様々な風体を身につけることを主張しているとする。また、当初の奥義篇における十体修得論や「風体」の語については、『定家十体』『愚秘抄』などの歌論にみえる「十体」や「風体」の影響を想定する。

同「世阿弥能楽論の「人体」「老体」の概念形成」(『国語国文』。3月)において、「人体」概念についても歌論での「風体」の語がもとになって『花伝』「花修」草稿執筆段階で形成されたとし、それは「心身のエネルギー状態や基本的な姿勢及び挙措が周囲から視覚的に捉えられる、演ずる対象の身体」を指すという。また、「花修」での「幽玄」「強き」の二分類が二曲三体説の「女体」「軍体」にほぼ相当する一方、二曲三体説での「老体」概念は、〈弓八幡〉など世阿弥の作能の開拓に応じて智者としての肯定的老人像と結びつきつつ形成されたと論じる。同「世阿弥能楽論の将来文化的文体の特徴―『花鏡』『音曲口伝』の執筆時期」(『鎮仙』543。3月)は、世阿弥が禅や儒学の知識を積極的に受容する義持時代以降の能楽論に、対表現や、「一調二機三声」のような三種並列表現が多いことを大陸からの将来文化的文体と評価、『花鏡』や『音曲口伝』にもこうした特徴がみえることから、その執

Hosei University Repository

筆開始時期は義持時代以降、応永十五年以降である可能性が高いとする。執筆時期を推測する際の決定打になるような証拠ではないが、文体の問題が世阿弥の思想的変遷を考える上でも重要なのは間違いないだろう。

このほか、玉村恭「天・地・人をつなぐもの—世阿弥「一調二機三声」をめぐって」(『美学藝術学研究』25)は、「一調二機三声」の「機」概念について、気と同義であり「息に主体的意志の加わったもの」(日本思想大系『世阿弥　禅竹』の注)とされてきたのに対し、心を持つ存在と演者との感応という要素を重視し、発声者の主体性に還元されない、観客など他者性の契機が含まれることを論じる思想的考察。

沢野加奈「世阿弥伝書にみる「鬼」の習道—下三位の芸風解釈の視点から」(『演劇学論叢』8。8月)は、『六義』の頌曲に対する強細風の配当について、上三花から却来して上三花の定位のまま下三位へと下った芸風が示されていると解釈。この却来は『三道』で禁じられる力動風鬼とは異なる、修練の後に演じうるとされる鬼の位置づけに見合った習道体系で、その鬼の強き芸風には、『六義』頌曲にみる強細風の「和らぎて負けぬ」という解釈があてはめられるのではないかとの論である。

また、天野文雄「世阿弥の和歌的教養と『申楽談儀』の「す、め歌」」(『鎮仙』545。5月)は、応永二十九年霜月に世阿弥が天神の霊夢によって「す、め歌」の点者になったという『申楽談儀』にみえるエピソードを、応永期の歌壇の動向から読むもので、細川満元の被官、横越元久の名も散見される歌僧尭孝の歌日記『慕風愚吟集』には、神仏への結縁を促すための詠作を「す、め」ることを詞書にうたう「す、め歌」と同様な言い回しが多く見出せることが指摘され、頗る興味深い。世阿弥は「東風吹かば」の歌に基づく冠歌に点を取っているが、応永二十一年の義持の北野参籠を契機に詠作された『北野詠十五首和歌』でも、「南無天満大自在天神」の十五音を冒頭に置いた歌が北野に奉納されているという。

【能楽史研究】

この年の能楽史研究に関する論文は、内容が多岐にわたっており、対象とする時代も古代から近代までほぼ満遍なく見られた。まず時代の古いものから。山路興造「「楽戸」の伝流」(『芸能史研究』172)は、近年にはめずらしく、大和猿楽の座の起源に関する問題を取り上げた論考。古代の大和において、楽戸が杜屋郷に置かれていたこと、その地が現在の蔵堂・味間・笠形付近にあったことを確認した上で、中世、猿楽座が置かれていた竹田庄も、古代の杜屋郷内の一部であった可能性を示唆する。その所在地の一致から、中世の猿楽座を古代の楽戸の継承と見る点が新しいが、古代の杜屋郷と中世の竹田庄との場所の一致はさほど明確ではなく、なお補強史料が欲しいところ。

同じく、古代から中世にいたる能楽の前史を取り上げるのが、田口和夫「田楽・猿楽と説話—能楽大成前夜の芸能再

Hosei University Repository

考」(『説話論集』第十五集)である。『今昔物語集』『宇治拾遺物語』などの説話集に見える田楽・猿楽に関する記事の検討から、芸能を取り巻く寺社の場と注釈・談義の世界との関わりを明らかにし、論の後半では貞和五年の四条河原における勧進田楽、春日若宮臨時祭における猿楽・田楽の能の内容について検討を加える。特に後者の若宮臨時祭に関する詳細な考察が目を引き、巫女に猿楽を指導した「トウ大夫」について宇治猿楽の可能性を示唆するなど新見が多い。なお、田楽を勤めた禰宜について、「常住神殿守で若宮方の禰宜」とするが、若宮方の禰宜で常住神殿守を勤めたのは若宮・和上谷家の二家のみで、ここは単に「若宮方の禰宜」とあるべきところ。むしろ拝殿禰宜の神楽男との関連に注目する必要があろう。

続いて世阿弥関係。天野文雄「世阿弥という名前—能役者の阿弥号の意味と由来」(『能と狂言』4)は、世阿弥をはじめとする義満時代の能役者の阿弥号を問題とする論考で、能役者への阿弥号付与が義満によって始められ、田楽の喜阿弥や猿楽の観阿弥も義満の命名であること、その阿弥号は義満周辺に近侍した遁世者のそれに由来し、義満の御用役者たることを示すステータスシンボルのような「擬法名的」称号であったことを論じる。阿弥号の解釈にはじまって、義満周辺の御用役者による演能環境までも視野に入れた論考で、この年の能楽史研究の重要な成果の一つ。なお、能役者の阿弥号については、「擬法名的芸名」とするのが香西精以来の通説で、本稿でもそれに従って論が進められている。例えば、『申楽談儀』において、観阿弥と道阿弥にはそれが法名であるとの注記があるのに、田楽の喜阿弥にはその注記がないことに関し、喜阿弥だけは俗体のままで出家号を名乗っていた(すなわち喜阿弥の阿弥号は擬法名的芸名であった)とする香西説を支持している。しかし、田楽の正式な座衆は法体となるのが決まりであったから、喜阿弥を俗体とし、これを擬法名的芸名と見るのは無理があろう。むしろ、田楽役者による法体の阿弥号が先にあって、それが猿楽役者に及び、擬法名的芸名として用いられるようになったと考えるべきではなかろうか。

同「世阿弥配流の理由を再考する」(『おもて』88。3月)は、世阿弥の佐渡配流について、義勝誕生を祝して日野義資邸に参賀した僧俗が処罰された永享六年二月の事件が直接の契機となった可能性を論じる。その事件が世阿弥配流三ヶ月前の出来事であること、『五音』所収の「太子曲舞」に、義勝誕生の際に文句を改訂して謡ったとの注記が見えることを主要な根拠とする。「太子曲舞」の謡の注記がはたして日野義資邸参賀の折のものかどうか、また、そうだとすればなぜ世阿弥だけが配流という極めて重い処罰を受けたのか、など、問題点は多く残されているが、従来の通説に対する貴重な問題提起となっている。

室町後期の能楽史に関する論考は、田口和夫「寛正五年糺河原勧進猿楽追考(二)」(文教大学『文学部紀要』19—2。

Hosei University Repository

3月）の一本のみ。近年紹介された『大乗院寺社雑事記』紙背文書に見える、寛正五年の糺河原勧進猿楽に関する新出文書を取り上げ、従来知られていた『河原勧進猿楽記』の記述を補う好資料であるとする。桟敷を設営しながらも、結局、神木動座のために見物が叶わなかった大乗院門主尋尊の思いや、その上洛を押しとどめようとする周囲の反応を具体的に述べる。

続いて、戦国から安土桃山期。松岡心平「能における安土桃山―『也足詞書和歌』にみえる古津宗印」（『国文学解釈と教材の研究』。10月）は、観世長俊の子で、後に武士となり古津姓を名乗った能役者古津宗印の事跡についての論考。宗印が亡くなった時に追悼の文と和歌を記した中院通勝の『也足詞書和歌』（京都大学附属図書館蔵）全文を紹介し、通勝と宗印との交流、さらに彼らの交流の背景として、細川幽斎をめぐる文化圏の実態を明らかにする。宗印の古津姓について、若狭の武士古津氏との関係を想定するなど、傾聴すべき新見が多い。小林英一「本願寺遠忌能のはじまり」（京都観世会館『能』。5月）は、『私心記』に見える永禄四年閏三月の春日大夫による本願寺での演能が、親鸞の三百回忌に伴う催しであったことを、龍谷大学図書館蔵『御開山様三百御年忌御仏中御能』をもとに確認する。

他に、徳川家の謡初を取り上げた論考もあった。平野明夫「戦国・織豊期徳川氏の謡初」（『戦国織豊期の社会と儀礼』吉川弘文館。4月）がそれで、徳川家における謡初が年中行事化した時期と、催しとしての意味・性格について考察する。徳川家の謡初は、『朝野旧聞裒藁』に「永禄之御謡初之帳」が見えることから、永禄四・五年には開始されていたとの説が天野文雄によって提示されているが（「徳川家初期の謡初」『上田女子短期大学紀要』7。昭和五十九年）、平野稿では「永禄之御謡初之帳」の史料批判を行い、永禄期の史料としては疑問が多く、後世に作成された可能性が高いことを指摘。元亀二年の観世父子の浜松下向を契機として、謡初が年中行事化したかとする。また、戦国・織豊期の徳川家の謡初は、家臣団が一堂に会し、官途成や受領成が披露される場であったことを述べる。その続篇とも言うべき論が、同「江戸幕府の謡初」（『徳川権力の形成と発展』岩田書院。12月）で、『酒井家本江戸幕府日記』の慶安元年の記事を基に、謡初の式次第を詳細に記述し、列席者の概要とその席次、御銚子御酌や披露役などの役職者について、時代とともにどのような変遷があったのかを明らかにする。さらに、戦国・織豊期の徳川家の謡初に際して行われていた家臣の官途成・受領成の披露が、江戸期の謡初では行われなくなった理由として、徳川氏の権力が一大名から公的な統一権力へと変化したことが考えられるとする。

近世能楽史に関する論考は、次の六本が管見に入った。まず、中司由起子「勧進能小考―『わらんべ草』四十五段より」（『芸能の科学』33。3月）。大蔵虎明の『わらんべ草』に見える勧進能関係の記事を取り上げ、興行日数の変遷、見

Hosei University Repository

物席の区画割りへの狂言師の関与、楽屋の席次における争論などについて、他の関連資料と照らし合わせて考察する。多岐にわたる問題を取り上げるため、論がやや散漫になっているのが惜しい。

能役者の事跡研究には、宮本圭造「研究余滴　喜多古七大夫の父親」（『日本古典文学会々報　別冊』。12月）、中尾薫「田安宗武と観世元章―『甲子夜話』の記事を中心に」（『叙説』33。3月）があった。宮本稿は、松永貞徳と交流のあった内堀道益なる人物に着目して、従来素性が明確でなかった喜多古七大夫の父親「内堀」「道春」との関係を探った小論で、あわせて古七大夫が亡父五十回忌追善能を催した記録を紹介し、古七大夫の父親の没年についての新見を提示する。中尾稿は、『甲子夜話』に見える観世元章と田安宗武との交渉を示す記事を紹介・検討し、「白妙」の銘を持つ女面が田安宗武の好みによって作られたとの記事に着目、出目友水と観世元章との交流にも言及する。中尾薫には他に「明和改正謡本と加藤枝直―『謡曲改正草案幀』の再検討から」（『芸能史研究』172）もあり、謡本の詞章改訂案を記した加藤枝直の『謡曲改正草案幀』を取り上げ、同書に見える改訂案の個々の例を子細に検討して、枝直による詞章改訂が数次にわたるものであったこと、枝直の意見がかなり明和改正謡本に反映されており、詞章改訂に及ぼした枝直の役割が決して小さくなかったことを明らかにする。

その他、地方の能楽史を取り上げたものに、五島邦治「御戸代神事能と猿楽能」（『上賀茂のもり・やしろ・まつり』思文閣出版。6月）、飯塚恵理人「三須錦吾家・山本東次郎家の代々―岡藩の能楽関係資料」（『椙山国文学』30。3月）があった。五島稿は、上賀茂社で行われた御戸代会の神事能の中世から近世にいたる歴史を辿ったもので、数年間に及ぶ賀茂別雷神社文書の調査に基づき、室町後期から江戸初期の算用状、江戸前期の矢田大夫の書状、江戸中期の「御戸代会御神事御能禄米請取状」などの新資料を紹介。江戸前期にはすでに上賀茂社神事能における矢田大夫の地位は名目のみとなり、実際の演能は京都の町役者によって担われていたとする。なお、本稿では触れられていないが、上賀茂社の神事能については、早く『観世』昭和三十五年六月号に井上頼寿「京都上賀茂社の水無月能」と題する先行研究があり、江戸期の上賀茂社の日記に見える神事能の記事が紹介されている。一方、飯塚稿は、岡藩旧藩主の中川家に伝わった藩士の家譜から、小鼓三須家・狂言山本家の分を翻刻・紹介したもので、岡藩における能が坊主方によって行われていたことを具体的に明らかにする。三須・山本家以外にも、坊主方として演能活動に従事したものが少なくなかったと推察され、他家の分もあわせての紹介をお願いしたい。

その他、広く能楽史に関わる問題を取り上げたものに、天野文雄「能を「乱舞」と呼ぶこと」（『おもて』91。12月）、和田充弘「『謡曲画誌』詞書部分の考察」（『文化史学』62。11月）があった。前者は、江戸時代に能の呼称として用いら

Hosei University Repository

れていた「乱舞」という語についての考証。乱舞の用例を博捜して、天文年間にはすでにそう呼んだ例が見られるとし、明治初期までの用例を紹介する。後者は享保十七年に刊行された『謡曲画誌』に見える中村三近子による詞書の内容を検討したもので、近世の謡曲享受史に関わる論。曲の内容の解説よりも、むしろ故事や名所の考証、道徳規範や夫婦の情愛などを重視した解説がなされており、教養書としての側面が窺えるとする。

また、能楽のみを取り上げたものではないが、『芸能史研究』173号（4月）に掲載の茶湯研究会「近衛信尋消息並後水尾院天皇勘返状」も、近衛信尋と後水尾天皇との間に遣り取りされた芸能・文芸に関する書状の翻刻・紹介として注目される。その中には、渋谷対馬や狂言師の五郎左衛門（山脇和泉）などの名前が見え、御所での演能に関わる興味深い記事が少なくない。

近代能楽史を取り上げたものには、『梅若実日記』に関するものが一本あったほか、地方の能楽に関する論考がいくつか見られた。まずは前者から。別府真理子「『梅若実日記』に見る三井家と岩崎家」（武蔵野大学『能楽資料センター紀要』17。3月）は、三井・三菱財閥の一族が梅若実とどう関わっていたのかを、表題の日記をもとに論述したもの。三井一族については、北家・小石川家・伊皿子家の家ごとに、梅若実への入門の時期や具体的な演能の活動を整理し、各家によって梅若実との親密さや演能に対する熱意に大きな相違があり、三井得右衛門のように、観世清廉とより親密な関係を持つものもいたことを明らかにする。また、三菱財閥の岩崎家については、梅若実との家族ぐるみの親交が顕著に窺えることを指摘する。なお、この別府稿とも関わるのが、同誌連載の初代梅若実資料研究会「梅若六郎家蔵『門入性名年月扣』翻刻および人名解説」で、今号には明治十五年から二十年までの入門者を収める。

一方、地方の能楽に関しては、飯塚恵理人により、名古屋を中心とする近代能楽史の論が近年相次いで発表されている。「明治期の名古屋能楽界」（『演劇学論叢』8）は、維新後から明治四十年代までの名古屋の能界の様相を、興行のシステムという観点から考察したもので、明治十年代後半、大商家の経済力の衰退とともに、シテ方の東京・大阪への移住の動きが進み、明治三十年代になると、「九日会」「名古屋能楽会」といった組織が形成され、「東西知名ノ能楽家ヲ招聘シ」て能を催すという体制が出来上がっていったことを明らかにする。飯塚恵理人には他に、三味線入りの今様の能である吾妻能が、なぜ「能」を標榜したのかを、当時の人々の能や浄瑠璃・長唄に対する意識の相違から探ろうとした「「吾妻能」の周辺」（『椙山女学園大学研究論集（人文科学篇）』37。3月）もある。

その他には、槻宅聡「松江の進藤流について」（『観世』6・7月）が、松江における近代能楽史の一齣を取り上げる。維新後に廃絶した進藤流の謡が、昭和三十年代頃まで松江近

Hosei University Repository

辺において盛んに伝承されていたことを報告し、実地調査に基づいて、町人や村人の間に進藤流の謡が広まっていた様子を明らかにする。明治三十五年に松江の人形商長廻忠右衛門によって進藤流の稽古本が刊行されていたという事実も興味深い。

一方、文人と能との関わりから、近代能楽史の一面に光を当てるのが、乙幡英剛「『病牀六尺』第三十三回の構造―子規と雑誌『能楽』に関する一考察」（『二松学舎大学人文論叢』77。10月）である。新聞連載『病牀六尺』のうち、能に言及する記事―中でも雑誌『能楽』の発行に触れた第三十三回の記事―を取り上げて、子規が能楽に対してどのような問題意識をもっていたのかを考察する。

能面・舞台に関する論考も、便宜ここで取り上げる。乾武俊「享禄三年銘の若い女面」（『民俗芸能研究』41。9月）は、面裏に「日光神常住」と享禄三年の年記がある女面を紹介し、他の古作の女面との造形の比較を試みる。紀年銘のある古作の女面として注目すべき遺品であるが、能に用いられた面であったかは不明で、伝来なども定かでないという。保田紹雲「補遺2・因州侯（鳥取藩池田家）旧蔵能面に関する考察」（『名古屋芸能文化』16）は、表題にあるとおり、鳥取池田藩旧蔵面についての続考。焼き印や面の入手経路などについての見解が述べられるが、深読みに過ぎるところが多く見受けられる。保田氏には他に、諸家に伝わる「蛇口」面の型を比較した小論「能面「蛇口」追跡（その一）」（『東海能楽研究会年報』10。3月）もある。

続いて、能舞台関係の論考。まず、李珍鎬「能の橋掛りの向きについて、方位との関係を考察した論。橋掛りが西の方角に向かって延びているのは、その方角が西方浄土に通じるためであるとする。しかし、中世の能舞台は御殿の南庭に設けられた例が多く、そうであれば、橋掛りの方角は西方ではなく東方になる。論の前提そのものに無理があろう。他に丹波地方の能舞台に関する報告が二本。佐藤勝行・大岸文夫「園部町生身天満宮能舞台の建築構成に関する研究」（『日本建築学会大会学術講演梗概集』。9月）は、生身天満宮の能舞台についての調査報告。明治・大正期の建造で、明治三十五年の天満宮一千年祭に際して造られたものかとする。同誌掲載の佐藤・大岸「福知山市一宮神社能舞台の建築構成に関する研究」は、一宮神社能舞台の実測結果の報告。同舞台は、もと福知山城南側に鎮座した朝暉神社に安政四年に建てられたもので、維新後の明治八年に一宮神社に移転され、その際、橋掛りの角度も改められるなどしたという。地謡座をガッタリ式とするのも特徴で、若狭地方の能舞台に同様の例が多く見られ、嘉永年間に若狭小浜の能役者が来演していることから、その影響かとする。

【作品研究】

この年は源氏千年紀に近づいたため、論文も『源氏物語』

Hosei University Repository

関連が多かった。そこで、本年の作品研究は、主に出典となった作品ごとに追っていくことにする。あくまでも目安ということで、関連論文等は適宜まとめて言及している。まずは『源氏物語』関係の能から。

天野文雄「「主題」からみた源氏物の能概観」（講座源氏物語研究1『源氏物語研究の現在』10月）は、『源氏物語』を素材とした現行能六曲について主題を概観し、今後の研究のあり方として、素材となった『源氏物語』と能の「作品としての「質」のちがいこそが問われるべき」と結ぶ。なお翌19年の久富木原玲「『源氏物語』と新作能―「夢浮橋」「小野浮舟」「紫上」の世界」（同講座9。一〇八頁参照）は、まさにこの提言に応えるような論となっている。

『観世』も、特集曲の中に、〈葵上〉を入れている。松岡心平「世阿弥能の原点としての「葵上」」（2月）は、犬王の〈葵上〉が世阿弥の〈松風〉改作やその後の女体能、ひいては複式夢幻能創出の「隠された強力な起源」であったとする。同曲を「人間の深層心理劇」と捉える視点は従来もあったが、世阿弥に大きな衝撃を与えた〈葵上〉は、しかし「霊が直截に現れる奇蹟劇」である点で「夢の形式を発明した」後の世阿弥には不満となり、『三道』の推奨曲から外されたとの説明は、新鮮で興味深かった。伊井春樹「能楽〈葵上〉と『源氏物語』」（4月）は、源氏学者の視点で『源氏物語』と能〈葵上・野宮〉、さらに三島由紀夫の近代能楽集『葵上』における六条御息所の人物像を語る。また岡野守也「『葵上』への心理学的アプローチ」（5月）は唯識論や中世の宗教観から、同曲を宗教劇として読み解く。

同誌の特集以外では、井上愛「〈野宮〉の六条御息所像試論」（『国文目白』45。2月）は、御息所の人物像については特に新しい視点を提出していないが、むしろ〈野宮〉の作品論として面白かった。特に、「野宮の情景を野から森へ転換」させた作者の意図を探るのに、万葉以来の和歌を中心とした文学史の中で森のイメージを丁寧に捉えなおしている点に好感がもてた。一方、御息所の妄執について、「輪廻を断ち切れないのは逢瀬の思い出ではな」く、「車争いで傷つけられた自尊心と公衆の面前での屈辱を語ること」こそが妄執であると断言する根拠はよく分からない。後場の車争いの部分が内包する「自虐的な優艶さ」等、舌足らずな表現も多少気になった。

中尾薫「明和本における『源氏物語』享受―《住吉詣》の改訂をめぐって」（『演劇学論叢』8）は明和改正謡本研究に主眼をおく論。明和本において源氏物全般がほかの曲に比べて改訂が少ない点、観世元章による〈住吉詣〉詞章の改訂が『源氏物語』本文に拠るものである点、舞事の改訂で誕生したと思われる小書〈悦ノ舞〉や賀茂真淵の『源氏物語』研究や注釈書作成の姿勢との関連についてなど、丁寧な調査の結果がよくわかるが、欲を言えば、明和本と観世元章についてこれまで詳細な研究を行ってきた著者には元章が使用していた『源氏物語』のテキストについて、特定できなくても言及してほ

Hosei University Repository

しかった。『源氏物語』には直接関係ないが、徳川家が源氏出身であるという当時の理解から、「源氏」という言葉も明和本では改訂の対象となったことを指摘する同「明和本における「松」と「源氏」」(『東海能楽研究会年報』10)があることも付言しておく。

このほか、『人物で読む源氏物語』のシリーズには「文学史の中の『源氏物語』」というコーナーがあり、13巻『玉鬘』(5月)と20巻『浮舟』(11月)に、石黒吉次郎「玉鬘と謡曲」「浮舟と謡曲」が載る。

『伊勢物語』に関わるものは、〈井筒〉〈隅田川〉の論文がある。山本登朗「謡曲「井筒」の背景—楙本の業平伝説」(『説話論集』第十五集)は〈井筒〉に見られる「石上」の「在原寺」が伊勢物語古注に見出せないことに着目し、『在原寺縁起』など現地の伝承で石上の北の在原寺が楙本に位置する点、〈井筒〉の間狂言では「和州楙本」と語られる点、現存する在原神社が石上と楙本の境界に位置する点、第二十三段注に「大和国いちのもと」とある『伊勢物語宗印談』について、ほかの記述から同書が謡曲〈井筒〉の影響を受けている点などを紹介し、天野文雄「在原寺は「廃墟」にあらず」(『おもて』78。平成十五年)を参考に、同曲の「在原寺」は現在の楙本の在原神社(在原寺)であった可能性を指摘する。橋場夕佳「〈井筒〉に見る伊勢物語絵と能の関連」(『東海能楽研究会年報』10)は従来指摘されていた伊勢物語古注釈からの影響だけでなく、伊勢物語関連絵画との相関性を考察する。特に「白描伊勢物語絵巻」などの井戸を覗く構図とクセとの類似性に着目する。〈井筒〉の本説研究では、絵画資料に注意が払われることは少なかったので、貴重な指摘といえるだろう。

齋藤澄子「能楽「隅田川」における文学的構成と母親の子別れにみる心理描写の関係」(『茨城キリスト教大学紀要1・人文科学』40。12月)は、『伊勢物語』との関係や場面の展開に着目し、期待、焦燥、絶望など母親の「こころの推移」が観客に捉えられることが本曲の特長とする。梅若丸の両親が〈班女〉に登場する吉田少将と花子だとする後代の伝説をもとに元雅の作意を考えるのは無理があろう。

式町真紀子「能〈隅田川〉とオペラ〈カーリュー・リヴァー〉—死の構図について」(『日本文学誌要』73。3月)は〈隅田川〉を原案としたブリテン作のオペラと同曲を比較した論だが、ここで取り上げておく。あまり行われていない研究であるため斬新な結論を期待したが、両作品で死の表現が異なるのは宗教観に基づく死生観の違いからくるというように、結局文化の違いで片付けてしまうと、比較した意味がないのではないかと思われる。

和歌及び注釈書関連の論は三本。大谷節子「この世で一番長い橋—能「長柄の橋」考」(『説話論集』第十五集)は『古今和歌集』および古今注を中心に、「長柄の橋」の詠まれ方やイメージを様々な文献を網羅的に紹介しながら特定した上で、能〈長柄の橋〉と古今注及び付随する人柱説話を捉えなおす。不破童子の殺生引導により地獄に堕ちた無言太子前世譚

Hosei University Repository

と照らし合わせ、長柄の人柱説話では男が人柱を提案したために、自ら人柱となったにもかかわらず衆合地獄に堕ち、さらに親が人柱となった顛末を見た娘が三年間無言になったのは悲しみのあまり声を失ったのではなく、因果律を知った故に口を閉ざしているのであるとし、長柄の人柱説話は無言太子譚を親子二世の物語に仕立て直したものとする。最後は芭蕉の句と人柱説話の関連を指摘する。能の作品研究のみにとどまらない、和歌説話の成立と発展を解明する論。原田香織「恨みの真澄鏡―作品研究『松浦』」（『文学論藻』80。2月）は様々な佐用姫説話や読み込まれた和歌などを網羅しつつ、室町期以降の文献には見えるが能〈松浦〉には見えない「望夫石伝説」など説話の変容について言及するほか、能〈松浦〉は松浦佐用姫伝説の伝統的な表現方法を踏まえながらも、「受衣」を望む点は他に類例を見ず、独自の展開を遂げているとする。同稿は本曲が稀曲となった理由を作品内部に求めているようだが、世阿弥自筆能本のうち音阿弥に相伝されて観世大夫家に伝わったと考えられている〈阿古屋松〉〈布留・松浦〉（いずれも観世文庫蔵）の三曲に写本がほとんど残っていない普及状況から言って、稀曲となったのは作品内部でなく、外的理由によるものではないだろうか。山崎福之「住吉の松の木間」（京都観世会館『能』2月）は〈弱法師〉の「住吉の松のひまより眺むれば」の語句の検討。この箇所が世阿弥臨模本では「松のこま」となっており、この「木間」が用例の少ない歌語である上に、「無名抄」では難のある語とされていることを指摘し、その理解が謡の文句の変化に少なからず影響したことを示唆する。

『平家物語』（平家）関連の論文は多数ある。まず『能と狂言』4号には、能楽学会第四回大会企画「「平家」と能」の講演などが掲載されている。山下宏明「平家琵琶と能―頼政の〈鵺〉を読む」は〈頼政〉の扇の芝の伝承と〈鵺〉のクリ・サシ・クセの分析を通して、能における頼政と鵺の物語を読み解く。薦田治子「平家〈鵺〉―その伝承と音楽」は「平家」という名称、音楽作品としての特質、現在の伝承について言及し、能〈鵺〉のクリ・サシ・クセと平家の類似性を指摘する。また、この大会企画の総括として、三宅晶子「「平家」と能」のねらいと成果」も所収されている。『銕仙』にも平家と能に関わる論考が二本。薦田治子「能〈鷺〉と平家」（541。1月）は、習物〈朝敵揃〉・小秘事〈延喜聖代〉に含まれる〈鷺〉の音楽的特徴などを概説する。佐伯真一「七騎落伝承の展開」（544。4月）は『平家物語』諸本と能〈七騎落〉を比較考察し、七騎で落ちたという伝承は読み本系に見られるが、吉例にこだわり、人を舟から降ろすという点では能は四部合戦状本に近く、遠平の健気さを強調するところに能の独自性があるとする。また「七騎落」を吉例とするのは、『平家物語』以降に生成した伝承で、後代の文芸作品に受け継がれていくと指摘する。

犬井善壽「『忠度集』諸本の奥書識語に見える自筆本伝承と俊成対面伝承―『平家物語』・謡曲「忠度」「俊成忠度」と

Hosei University Repository

の関連において」（『中世軍記の展望台』和泉書院。6月）は『忠度集』の識語の内容と『平家物語』・謡曲を比較検討した論考。「きつね川より引き返し」などの一致から、多くの『忠度集』が早くは〈忠度〉、後代は『平家物語』・〈俊成忠度〉の忠度俊成対面の伝承を受けて書写されており、それだけではなく、これらの作品の和歌も歌集に取り入れられたことを明らかにした論考で、謡曲受容の歴史に関して興味深い事例を示している。米田真理「闘う女」（『東海能楽研究会年報』10）は、『平家物語』の巴像と能〈巴〉のシテ造型との相違を検討した論。戦国時代に家を守るために長刀を持ち闘う女性が現れ、その姿が〈巴〉のシテに投影されていると考える。史実だけでなく、長刀を持つ女性が室町後期の文芸作品に描かれるようになったことにも注意する必要があるだろう。玉村恭「修羅能における生と死」（『死生学研究』8。11月）は〈清経〉における死生観を考察する。妻と清経の霊との対立は、武士としての死を遂げなかったことへ不満をもつ妻と、名のある武士、平家一門といった「何者」として生きることを無意味と考える清経との認識の相違であると読み、和解の成立がない異質な死生観同士の衝突と解釈して、清経の死を「絶対的な死」と位置づける。解りにくさのある清経の霊の出現を面白く読み解いているが、同曲の読みの論として、西村聡「清経の成仏」（『能の主題と役造型』）がある。そこで論じられている、妻への釈明により清経が心の整理をし「清らか」になるといった成仏の過程への説についても言及してほしかった。

義経伝承関係は〈安宅〉を扱った論が多い。竹本幹夫「中世演劇における義経像」（『義経から一豊へ』勉誠出版。1月）は、まず『看聞日記』永享四年三月十四日条にみえる「九郎判官東下向」が、従来有力視されていた〈烏帽子折〉ではなく〈安宅〉であるとの説を提示する。加えて、比較的早く成立した義経伝承の能は、「牛若」ではなく成人した「義経」を描いたものが多いこと、〈安宅〉〈船弁慶〉の義経を子方が演じるようになったのは江戸中期であること、〈橋弁慶〉が牛若を描いた能で最初に成立した可能性があることなどを指摘する。短いコラムとして書かれたものだが、義経伝承の重要な問題への発言が中心で、示唆に富む。小林健二「義経、二度の奥州落ちの旅と芸能」（『国文学解釈と鑑賞』898。3月）も竹本稿と共通する問題を扱う。従来〈烏帽子折〉は前場と後場の断絶感が指摘されていたが、前場で元服をし、その初手柄として熊坂長範討伐が描かれることにより、門出の祝言の意味があると解釈する。また〈安宅〉の終曲部も、舞を見せるという能の決まり事として解釈するのではなく、義経の行く末への予祝の意味を推定する。さらに竹本稿と同じく、「九郎判官東下向」を「安宅」に関わる内容であるという推測も加える。一貫性のある〈烏帽子折〉の読み方を示しているが、この曲が能としてはかなり長大な構成を取っている点にまだ問題が残されていると思われる。西村聡「近代〈安宅〉論議と地域伝承史―「鳴るは滝」名所化への視線」（『金沢大学文学部論集

Hosei University Repository

（言語・文学篇）』26。3月）は、近代における〈安宅〉に見える地名の名所化の流れを整理した論。近代の雑誌記事などに「なるはの滝」という場所が存在するかのような説が論じられていたが、その説が江戸後期成立の『白石紳書』『北国奇談巡杖記』など北陸の伝承の中で生成されたことを明らかにする。このような附会説は研究の俎上に上ることは少ないが、その曲が当地でどのように扱われていたかという点も、見捨ててはいけない材料であることに気づかされた。他にも、義経伝承の能を義経の生涯の年代順に並べ、作品の紹介と特質について言及する西哲生「義経の能―その本説と主題―」（『能楽資料センター紀要』17）もある。

その他の軍記物語関係として、曽我物と『曽我物語』との関係を論じた佐藤和道「舞を舞う曽我兄弟―男舞の成立と〈元服曾我〉〈小袖曾我〉〈虎送〉」（『国文学研究』149。6月）がある。〈小袖曽我〉〈元服曽我〉は真名本に近い原話を想定しつつ、能の男舞を導入するかたちで成立したとし、曽我兄弟が舞を舞う発想は、仮名本の本文に影響を与えたと想定する。最後に〈虎送〉は、幸若舞曲〈伏見常磐〉との構成上の類似から、曲舞をもとにした能であると推測しているが、論じ方に無理があるだろう。また、能が『曽我物語』へ影響を与えた可能性もあるだろうが、「舞を舞う」ということだけでは有力な根拠とはならない。重要な問題だけに、さらなる内部考証が必要である。

次に、中国故事伝承を含む説話関係の論を一括する。小林健二「能《合浦》の説話的背景」（『説話論集』第十五集）は〈合浦〉の源流を蒙求古註の説話に求め、それが日本に享受される過程で和様化し物語化する諸相を、『三国伝記』『直談因縁集』など唱導や談義を通して確認する。また、これらの説話との比較から、シテが女体で、機織りをして報恩する段があったものが古態と推測する。先行研究を踏まえ、鮫人報恩説話の展開がわかりやすくまとめてあり、他曲の本説研究をおこなう上でも参考となる。同書に所収されている中嶋謙昌「江戸時代における一門三賢説話の消長―能《正儀世守》と古浄瑠璃『小篠』を手掛かりに―」は〈正儀世守〉の受容と広がり、また本曲と影響作品が持つ意義を考察する。前者については「編集的方法」で謡曲詞章を利用している点から、草子屋が所持していた写本が媒介となったと推測する。後者については類話である『烈女伝』〈斎義継母〉が流布する中、『小篠』が〈正儀世守〉の影響下にあることは「『孝子伝』以来の説話が近世芸能に流れ込む」貴重な例とする。謡曲との影響関係を指摘するだけでなく、同時代の関係作品との比較から、享受の諸相が浮き彫りにされている。石井倫子「〈草薙〉おぼえがき」（『説話の界域』笠間書院。7月）は、これまで研究であまり取り上げられておらず、評価もさして高くなかった〈草薙〉について、近年進展しつつある中世日本紀や宝剣説話の研究をもとに、関連する説話や注釈書の記事を挙げながら同曲を読み直し、再評価を試みる論考。同曲を将軍家と熱田社との深いつながりを背景に作られたものであるとする。金

Hosei University Repository

関猛「能に現れる芸能民表象―「鵺」と「松山天狗」を中心に」（岡山大学文学部プロジェクト報告書『日本における美的概念の変遷』3月）は鳥の妖怪が後シテである〈鵺〉と〈松山天狗〉を取り上げる。異形の者がうつお舟に入れられて流されるヒルコ伝説と重ね、神祇篇の記事を参照しながら天狗も鵺も秦河勝の後裔であると同時に、ヒルコの化身であると定義する。「芸能民表象」の定義やどうして神祇篇とかかわるのかなどわかりにくい点があった。三多田文恵「謡曲『芭蕉』の成立とその背景」（『中國學論集』43。9月）は〈芭蕉〉が『続夷堅志』から前半の芭蕉の精の物語をそのまま取り入れる一方、恋愛的要素を廃し、『法華経』を摂取することで仏教的無常観を表現していると考える。同「『白楽天』の成立とその背景」「『唐船』の成立とその背景」（共に『中國學論集』42。3月）は歴史的背景と素材を検討する。〈白楽天〉は『蒙古襲来絵詞』『増鏡』の武力抗争を典拠とし、白楽天と老漁夫の知力の文学的抗争に置き換えることにより、風雅的な物語に脚色したとする。〈唐船〉は大陸の歴史資料との比較を通して、室町時代に活動した倭寇に関わる世相を踏まえる一方、〈桜川〉などの親子再会譚の要素を取り入れ、親子の絆を描く物語へと転化したと考える。いずれの曲も関係作品との比較考察となっているが、表面的な比較に終始してしまっている。松沢佳菜「謡曲〈邯鄲〉小考―遊仙枕説話との関わりを中心に」（『同志社国文学』65。12月）は謡曲以外の邯鄲譚に見えない夢中描写の由来について、玄宗皇帝の「遊仙枕」説話が存在するのではないかと指摘し、「遊仙枕」の日本での受容状況を押さえつつ、盧生に玄宗皇帝が重ねられていると考え、さまざまな説話を織り込みながら先行の邯鄲譚とは違う新たな展開を見せていると位置づける。また、その神仙世界の描写が後続の御伽草子や能〈鶴亀〉に取り込まれていると指摘する。

以上の出典別では触れられなかった、世阿弥の能に関する論考を、ここでまとめて扱う。まず天野文雄の一連の研究。「〈花筐〉にみる「物語」の創造―作り能〈花筐〉の製作事情と義教初政期における世阿弥の環境」（『説話論集』第十五集）は「安閑留」を創造した意図として、大迹部皇子と照日の前の離別と再会の物語を、僧籍にあった義教が還俗、家督相続をし、日野宗子を御台所として迎えるあたりの状況の寓意と読む。「〈金札〉の作意と成立の背景―原形の復元と作意の把握を通じて永徳元年の「花の御所」落成との関連におよぶ」（『演劇学論叢』8）は〈金札〉を観阿弥原作とした上で、永徳元年の花の御所落成と義満への称賛をあわせて描こうとした作品であるとする。「〈高砂〉の時代設定を再考する」（『おもて』89。6月）は醍醐天皇の延喜の時代とする定説を否定し、応永末年の阿蘇大宮司雑掌の上洛の時事が取り込まれている世阿弥時代の設定であるとする。これまでの作品研究では十分吟味されてこなかった視点からの考察であり、能の作品研究全体にとっても大きな問題提起となっているが、特定の事件と結びつけ個々の能の成立年代を特定する方法には今後多

Hosei University Repository

くの議論があるべきだろう。また、〈花筐〉に関しては、史実とは別に天照大神に通じる照日前を創出したと読む西村聡「〈花筐〉達成論の更新」（『金沢大学文学部論集』23）などがある。そうした先行研究への言及をしてほしかった。重田みち「世阿弥の能の作品の〈基調象徴〉と〈基調観念〉―時間の〈場（フィールド）〉化」（『アート・リサーチ』6。3月）は世阿弥作品の〈忠度・檜垣・江口〉を取り上げ、それぞれ時間構成を分析し、ある象徴や観念を反復することによる強調があると指摘し、世阿弥能楽論にみられる「一」への志向と結びつける。「統一イメイジ」など既出の論のための論という感をぬぐいがたく、作品個々の問題や世阿弥作品全体への理解にはあまりつながっていないように感じられた。

『観世』の特集も、前述の〈葵上〉の他、世阿弥作の〈檜垣〉を取り上げ、西村聡「『檜垣』における奇跡の老い」（6月）と細川涼一「〈檜垣〉白拍子の実相」（8月）の二本を掲載。西村稿は檜垣のシテが執着するのは若き日の華やかな生活ではなく、みつはぐむ百歳の老女となった後、興範のために水を汲み再び白拍子を舞ったときの思い出であり、「舞女の誉れ」はこの女性の「盛時から老後、死後へと貫き通され」ていることを指摘。「死後を体験して生死の理や因果や輪廻をわが身に確かめ」た女は、百歳の姥となった小町の悟道の、さらに先まで到達しており、そうしたシテとの出逢いはワキ僧にとって「霊験」と受け止めうるものであったろうと考える。小田幸子「檜垣―演出とその歴史」（七十四頁）とも響き合う内容。細川稿は中世の白拍子の実像を明らかにしつつ、男装がゆえ、女人禁制を突破することができたという論理が存在したことを説明する。

『観世』の特集の残る一曲は〈放下僧〉。伊海孝充「敵討物としての〈放下僧〉」（10月）と徳江元正「「放家僧」の一考察」（11月）の二本が載る。伊海稿は、中世の敵討は「敵を殺す」という行為を未熟な仏教的論理で肯定すると指摘する佐伯真一の説を継承・発展させ、〈放下僧〉をはじめとする能の敵討ち物は、孝行深きゆえ、神仏の加護を受けるという論理のもとに成り立っていることを指摘する。徳江稿は〈放下僧〉の「ほうか」の表記の問題についての考察。「放家」ではなく「放下」と表記するのは、このキャラクターが芸能者であることが影響しているという推測のもと、中世辞書の用例や放下歌を紹介し、中世芸能者の実態に迫ろうとする。もう一つ、放下の能を扱った論文として、伊海孝充「〈花月〉の「春の遊び」―花月の弓と「小弓」をめぐって」（『日本文学誌要』73。3月）がある。〈花月〉における弓に着目し、弓の段の詞章からシテの弓と「小弓」と関係づける文句を取り上げ、さらに「小弓」が春の遊びであることを物語や弓の技術書から導き出し、従来漠然と捉えられていた同曲の季節が春である必然性を指摘する。

雑誌『紫明』では、本年より飯塚恵理人の新連載「幽玄へのいざない」が始まる。毎回一作品を取り上げ、詞章中の言葉に着目して解釈を試みる。第一回「《姨捨》試解」（18。3

Hosei University Repository

月）は能の鑑賞会での解説を改稿したもので、老女の「執心」とワキの関わりから同曲の狙いを考える論。同曲のシテを幸福に執着して成仏できない霊とし、〈井筒〉〈錦木〉と同じタイプと位置づける。第二回は「《八島》試解」（19。9月）は義経の「瞋恚」の原因を探る論。

最後に日本語雑誌掲載の外国人による論考を取り上げたい。国際日本文化研究センターが共同研究「生きている劇としての能—謡曲の多角的研究」の報告として、外国人の論文二本を掲載する（『日本研究』32。3月）。J・ルービン「舞台の彼方—共同研究「生きている劇としての能—謡曲の多角的研究」への導入」は十九曲の謡曲作品の魅力や執筆者自身の疑問点を指摘する。R・タイラー「能の機織り—「呉服」と「錦木」を中心に」は、世阿弥作品および世阿弥時代に見られる機織り・布・衣などの表現に着目し、作品世界を捉える。謡曲の翻訳を多数世に送り出した著者ならではの丁寧に語彙をとらえた論考。なお、本誌には〈弱法師〉の演出・復曲などの歴史的展開・内容全般について総合的に論じる田代慶一郎「観世元雅の『弱法師』について」も掲載される。

張哲俊「謡曲『猩猩』における菊花酒と竹の葉の酒」（アジア遊学別冊3『日本・中国交流の諸相』、3月）は、〈猩々〉終曲部に見える「竹の葉の酒」について、諸注釈書が「竹葉」を酒の異称とするのに異を唱え、竹の葉を用いた特別な酒を指すとし、さらに中国で竹葉酒が菊花酒とともに用いられる習慣、文学作品でも同時に用いられること、その効能や意義にも及び、両者を〈猩々〉で対応させるのは中国古典詩歌の技巧の影響とする論。日本人ではなかなか考察の及ばない面にまでも言及している。

【演出研究・技法研究】

前号までは演出に関する論考も作品研究の一部として扱ってきたが、今回から演出研究と技法研究を同じ項で扱うことにしてみる。

小田幸子「檜垣—演出とその歴史」（『観世』7月）は、型付や装束付等の記事を紹介しつつ、シテの面にバリエーションが多いことの意味や水を汲む演技に重ねられた意味を考察。本曲は、「現在能的な老女小町の系列」にありながら、あえてシテを亡霊として夢幻能に仕立てることで、「地獄に堕ちた老女」の像を産み出したとする。演出史を追うというより作品の本質を考える論で、これを「作品研究」と呼んでも問題はないだろうが、演出研究が作品の理解を深めるうえで有効な方法の一つであることを示す例として、ここで紹介したいと思う。

同じく作品論に直結する演出研究として、天野文雄「《卒都婆小町》《柏崎》《松風》の物着演出を疑う」（『おもて』90。9月）がある。パンフレット掲載の短いものなので、問題提起が主眼と思われるが、それぞれの作品に本来は物着が無かったであろうと推測する理由（主として詞章との齟齬）は明確に示されている。ただし、〈卒都婆小町〉に物着がなかった

Hosei University Repository

という可能性は首肯できるが、〈柏崎〉と〈松風〉の場合、世阿弥による改作以前に物着はなかったと想定しても、その世阿弥改作以前の形が判らないのだから、その先に進むのは難しい。そうではなく、〈柏崎〉や〈松風〉が世阿弥によって現在見られる形に作られた後世阿弥の晩年に物着が加えられたとするのなら、やはりそれなりの論証が必要になろう。

橋場夕佳「観世大夫元章の小書―《杜若》「恋之舞」の演出意図とその影響」（『演劇学論叢』8）は、現行観世流の小書「恋之舞」とは異なる元章の「恋之舞」の演出意図を探るとともに、同趣向の宝生流の小書「沢辺之舞」がこの「恋之舞」の影響下に成立したとする。明和改正謡本の詞章改訂や田安宗武の服飾・有職故実に対する強い関心と関わらせて「組掛ハ不用」「菖蒲の鬘をかく」という元章の演出意図を探る論には説得力があり教えられる点も多いが、笛の「恋之手」の有無については、出典の示されていない芸談での説明を鵜呑みにしてよいのか、「恋之手」という名称は無くても舞の二段ヲロシで特殊な手を吹いていた可能性はないのか、など、疑問は多々ある。「沢辺之舞」との前後関係も、小書名称の初出年次を比べてみる程度ならおおかたの予想通りということではないだろうか。指摘されている嘉永四年より前、弘化勧進能でも「沢辺之舞」は演じられている。むしろ、舞事の途中で橋掛りを利用して様々の所作を見せる小書演出全体の問題として考えてみたい問題である。

藤田隆則の「能の地拍子「工学」―その系譜と思想」（『日本伝統音楽研究』3。3月）・「小歌がかりの拍節法―能の小歌から考える」（『能と狂言』4）は、ともに能謡の拍節に関する論。「能の地拍子「工学」」は、能謡の地拍子についての理解と実践トレーニングのために、江戸時代後期から現在にいたるまで様々に重ねられた工夫を分析し紹介する。当然のように受け入れてきた拍子謡の記譜法にも紆余曲折があり、多くの先人の叡智が注ぎ込まれていることを知ることができ、非常に面白かった。関連文献として、単行本の項で取り上げた『能の地拍子研究文献目録』がある。「小歌がかりの拍節法」は、曲舞導入以前の「小歌がかり」と呼ばれた謡にも拍節が存在し、その特徴は現在の能の「小歌」に見いだせるのではないかとの予測のうえで、〈花月〉の小歌を詳細に分析し、これが本来は拍子合であり〈放下僧〉の小歌と多くの共通点を持っていたとする。「二拍二文字」、「第一拍歌いだし」「八拍と六拍が適宜交代する」等、八つの特徴を「小歌の拍節法」として提示し、こうした「歌詞の構成に忠実に添った」拍節法に、八拍を繰り返していく現在の能の拍節法よりも古い形を見る。確実な資料が残るわけではなく推測を重ねていくしかないが、〈花月〉の分析には説得力があり、「現段階においては、大和猿楽の謡の中には、「拍子不合」も「拍子合」も両様あったと考えたい」という同稿の結論は、大和猿楽の謡はすべて拍子不合の謡だったと考えるよりも、妥当性があるものと思われる。

この年は技法研究の数は少なかった。楽器の研究としては、

Hosei University Repository

高桑いづみ「能の鼓が誕生するまで」(『国立能楽堂』9・10月)が、滋賀県のMIHO MUSEUM所蔵の鼓胴や各地に残る線刻鼓胴を紹介しつつ、雅楽の鼓から能の鼓への変遷過程を説く。渡辺康・飯塚恵理人「能楽囃子「隅田川」カケリの楽譜化とその特徴について」(『椙山女学園大学文化情報学部紀要』3月)は、音楽学との融合研究。演奏時間も大小鼓の手組も異なる4種の演奏がなぜ同じカケリと認識されるのか、という問題設定は面白いが、笛の音を採譜して比べるだけで解答が見つかるとは思えなかった。

このほか、研究論文ではないが、貴重な資料として、『観世』9月号から連載が始まった「横道萬里雄の能楽講義ノート」(文責:高桑いづみ、三浦裕子、小野里法子、羽田昶)を挙げたい。昭和五十八年度の講義「邦楽概論B〈能の音楽について〉」の録音テープに基づき「ご本人の承諾を得て編集作成したもの」で、第一回は、氏の学恩を受けこの仕事に関わった多くの人たち(「講義録起こし隊」と命名)の名前や編集方針が冒頭に述べられた後、「謡の楽型」についての講義。この後、18年分は「ヨワ吟その1〜3」と続き、19年12月まで全16回。同じく高桑いづみ「能「卒塔婆小町」の旋律復元」(『伝統芸能の特殊な上演に関する調査研究』)も、貴重な資料。「単行本」の項で触れた。

【狂言研究】

資料紹介・資料研究から。小谷成子・野崎典子「『和泉流秘書』(愛知県立大学附属図書館蔵)翻刻・解題六」(『愛知県立大学文学部論集国文学科編』54。3月)は表題の台本の翻刻の六回目で、巻三の後半部七曲を収める。「解題」が付され、〈首引〉について和泉流の諸本と比較し、雲形本より以前の山脇家の台本であることを確認する。田崎未知「《翻刻》『波形本』巻一 十壱〈毘沙門連歌〉・十弐〈大黒連歌〉」(『愛知淑徳大学国語国文』29。3月)は、表題の二曲の翻刻。野崎典子・佐藤友彦・小谷成子・安田徳子・林和利「狂言共同社蔵『秘傳聞書』翻刻(三)」(『名古屋芸能文化』16)は、山脇和泉元業による表題の伝書の翻刻で、平成十一・十二年に続く三回目。かなり膨大なもののようで、五冊中の「貳」に入る。雑多な記事が並ぶが、作品の詞章・演出にかかわるものが多い。

小林賢次「和泉流狂言台本雲形本と古典文庫本の本文比較—ト書き・注記に関して—」(『近代語研究』13。武蔵野書院。12月)は、前々年の副題「せりふに関して」に続くもの。雲形本を親本とする古典文庫本には誤写があるものの、ト書きや注記に関しては適宜整理するなどの手を加えていることを明らかにする。

原田香織「世阿弥伝書の受容—『わらんべ草』における「道」の意識—」(『東洋学研究』43。3月)は珍しく『わらんべ草』を論じたもので、ここであげる。大蔵虎明は伝統保守の立場に立って能の狂言としての「道」のあり方を論じたとし、稽古論や「初心」論について世阿弥の論と比較し、狂言

Hosei University Repository

の質について論ずる。

史的研究では、【能楽史研究】であげる飯塚恵理人「三須錦吾家・山本東次郎家の代々―岡藩の能楽関係資料―」をここでも取り上げねばならない。山本東次郎家の初代則正（東）が豊後岡藩の江戸詰め藩士であったことは知られていたが、岡藩藩主中川家に伝えられた『諸士系譜』に、その先祖の系譜、則正の履歴が詳細に記載されていたのである。これを発見し、翻刻する。貴重な報告である。

作品研究では複数曲にわたるものから。稲田秀雄「狂言嫁取り物の展開と説話世界―「二九十八」「吹取」、そして「因幡堂」―」（『説話論集』第十五集）は、〈二九十八〉を嫁取り物の基本形、〈吹取〉〈因幡堂〉をその変形とし、様々な説話のモティーフとの類似・関連を指摘し、それらとの比較によって狂言の独自性を見る。従来から言われる狂言による説話の摂取を、よりダイナミックに捉えようとするものである。山下宏明「平家物狂言を読む」（『愛知淑徳大学論集―文学部・文学研究科篇―』31。3月）は、琵琶法師を登場させる座頭狂言や「平家節」を語る〈柑子〉などを平家物狂言とし、その構造を考えようとする。狂言の平家語りが早物語であるのを平家を「虚仮」にするものとする。浅田ひろみ「狂言と菓子」（『和菓子』13。3月）は、「笑いの世界と和菓子」の特集の一編で、狂言に見える菓子として餅・砂糖・点心・飴粽をあげ、詞章に現れる菓子の一々について注を加える。佐谷眞木人「『物くさ太郎』と和歌・狂言」（『恵泉女学園大学紀要』18。3月）は、お伽草子「物くさ太郎」の作品論だが、その笑いの仕掛けに狂言と共通するものがあることを指摘し、〈茫々頭〉や〈二九十八〉に和歌の陳腐化を見る。橋本朝生「聟入り物狂言の諸相」（『文学』7―6。11月）は、「ステレオタイプ」の特集の一編で、狂言に類型の増幅という形成過程があったことを聟入り物によって示すもので、定型通りの〈猿聟〉が様々なタイプの聟入り物を前提に作られたものとし、それらの聟入り物が中世の現実をいかに反映するかを見て、増幅は室町後期までになされたとする。

珍しくヨーロッパの古い喜劇と狂言を対比させるものが二編。小澤祥子「中世古典ファルスと狂言の比較―形成の歴史と演劇としての特質―」（関西大学『仏語仏文学』32。2月）は、ヨーロッパ中世末期の世俗劇であるファルス（「笑劇」と訳される）と狂言の成立の歴史からそれぞれの特質を探ろうというものだが、狂言の歴史を散楽から始め、室町時代以降はごく簡単に触れられるのみで、作品についても大雑把な把握に留まる。狂言は「古典を知る学識者、恐らくは僧侶が書き」と言うが、何に拠ったものか。マルティン・チエシュコ「ギリシア喜劇のいたずら者と狂言のすっぱ」（『西洋古典学研究』54。3月）は、日本西洋古典学会の前年の大会のシンポジウム「喜劇の世界ギリシアと日本の伝統」で発表されたもので、紀元前5世紀のギリシア喜劇と狂言を比較する。いたずら者など市場に現れる人物の共通を取り上げるが、むしろ狂言を参照してギリシア喜劇を読み解こうとするもの

Hosei University Repository

で、狂言の理解は『狂言辞典事項編』の範囲。ヨーロッパ喜劇との対比によって狂言の特質を探るのはなされるべきことではある。

以下、個別のもの。関屋俊彦「狂言〈通円〉をめぐって—付、翻刻「通円家文書」—」(『説話論集』第十五集)は、〈通円〉と宇治橋のたもとにある通円茶屋の伝承との関わりを説こうとするもの。資料編として「通円家文書」の翻刻を付し、これは資料として貴重だが、この文書の伝承と〈通円〉とは無縁だということにしかならないようで、宇治弥太郎の作である蓋然性が高いとするのも証されているとは言い難い。稲田秀雄「狂言「縄綯」考」(『山口県立大学国際文化学部紀要』11。3月)は、〈縄綯〉が筋立てや縄を綯う所作、縄綯いに伴う話の長大化などの点において他曲と関わることを指摘し、それらを踏まえて新たな太郎冠者像を獲得したのだとする。田口和夫「狂言〈附子〉の形成」(『文教大学国文』35。3月)は、まず天正狂言本〈附子砂糖〉の「ゑさん天目」を「建盞天目」とし、「ぶす」「るす」の言葉遊びに発し、『沙石集』の「飴は毒」説話を結びつけることで原形が成立したのだとする。林和利「狂言「千鳥」演出の変遷と尾張津島天王祭り」(『名古屋女子大学紀要(人文・社会)』52。3月)は、尾張津島天王祭との関わりから〈千鳥〉を見る。山車や流鏑馬の話をするのは実際の祭によるものかとし、また雲形本によって山脇派における流動を追う。津島祭が狂言に取り上げられたのはこの祭礼用に独自に造る「一夜酒」と関係するかとするが、それほど知られていたのかどうか。網本尚子「狂言「文蔵」における二つの趣向—食べ物名列挙と軍語り」(『富士論叢』50—2。3月)は、〈文蔵〉の食べ物名列挙と往来物や連歌との関わりを説き、石橋山合戦の語りを『太平記』に近い時代の物語を基にしたものかとして、連歌師の関与を示唆する。田崎未知「狂言〈連歌の十とく〉考」(『愛知淑徳大学論集—文学部・文学研究科篇—』31)は、天正狂言本〈連歌の十徳〉を扱い、後世の展開を追う。連歌の付句「た本にこめよ梅のにほひを」の「た本」が袂と東北方言で田んぼの意の「たもと」の掛詞とするのは新見。

京都観世会館の『能』に掲載された小論が三編。網本尚子「「悪太郎」の伯父」(580。9月)は、「悪太郎」の伯父と甥の造型について大蔵流と和泉流との相違を説く。川島朋子「閼伽井の坊の穂風を—大蔵虎明の解釈—」(581。10月)は、〈茶壷〉の謡の「ほかぜ」について大蔵虎明本の頭注に「ふかぜ」とあるのを茶の栽培地「深瀬」と理解していたものとする。稲田秀雄「狂言「笋」と『御成敗式目』」(582。11月)は、蘆雪本『御成敗式目抄』にある竹の主が竹の子を取った者の牛を奪ったという話と〈笋〉の類似を指摘する。

絵画資料を扱うもの。藤岡道子「狂言絵馬を読む」(『聖母女学院短期大学研究紀要』35。3月)は、狂言の舞台図を描く絵馬を「狂言絵馬」とし、これまでに知られた六点を紹介し、それぞれの制作事情や絵師について考察する。演出資料にはなるまいが、森川杜園の描いた〈福の神〉図は、狂言役者

Hosei University Repository

でもあるだけに注目される。狂言絵馬はこれからも見つかるだろうが、同「佐渡金山の三番叟絵馬」（『東海能楽研究会年報』10）はその一つを紹介する。相川の大山祇神社に奉納された〈三番叟〉図で、諸役を七福神の姿で描くというものである。

間狂言研究。飯塚恵理人「資料紹介「山脇得平稽古本　間之本」」（『東海能楽研究会年報』10）は、和泉流山脇藤左衛門家九世の山脇得平による間狂言本を紹介する。九冊に一三三曲を収めるとのこと。恵阪悟「《経正》の演出―アイの変遷をめぐって―」（関西大学『国文学』90。1月）は、〈経正〉のアイの変遷を追うもので、元来なかったものが上掛りで室町期に詞章の改訂が行われた際に創案され、江戸期には演じられなくなったものが明治期に金剛流の特殊演出〈古式〉として復活したとする。奥山けい子「間狂言の自由性―黒川能における展開」（『東京成徳大学研究紀要』13。3月）は、黒川能の上座の狂言役者、五十嵐喜市蔵の間狂言台本による考察で、大蔵流系統の曲が多いが、古版本に取材するものもあること、在地性・祝祭性を増したり、冒頭のセリフや留メに新たな型を作って独自性を築いてきたとする。版本として古版本のみと比較するのは不十分であろう。

角田達朗「能『鵜飼』替間」（『愛知淑徳大学論集―文化創造学部―』6。3月）は、新たに作成した〈鵜飼〉の間狂言台本を提示するもので、ここであげるのは不適当かも知れないが、作成に研究的要素が含まれるのはもちろんである。アイの里人の心理を解釈しつつ、既存の詞章を取捨選択して台本を作成し、細かく説明を付すが、解釈はよくも悪くも現代人のものである。既存の詞章が活字化されたものだけなのは安易であろう。

国語学的研究では語彙分野から。坂詰力治「『狂言記』（正編）に見える漢語」（『文学論藻』80）は、『狂言記』に見える漢語をすべてあげ、『日葡辞書』やお伽草子に見える漢語と比較し、生活語としての名詞が多数使われ、漢語と和語の融合が見られるとする。『狂言記』が「口頭語で演じられたものの台本を基にした」とあるのはその通りで、一般の読者に読まれるために版行された」ことを重く見る必要はなかろう。大塚光信「狂言のことば三題」（『国文学解釈と教材の研究』3月）は、『大蔵虎明能狂言集　翻刻　註解』の副産物と言うべきもので、同書の頭注に収まらなかった語注。〈富士松〉の「恩ない主のこれはめぎらら」、〈文蔵〉の「くらはじない」、〈鍋八撥〉の「勝負どく」を取り上げ、古辞書や抄物の例をあげて語義を解明する。

文法分野では、小林正行「狂言台本における助詞バシ」（『日本語の研究』2―4。10月）は、狂言台本を時代順に追って「ばし」の用法を見るもので、本来「強調」の働きをもっていたのが、「例示」の働きと解釈されるようになり、「品位」を持って疑問を表す用法が近世中期以降見られるようになったとする。

待遇表現の分野では、米田達郎「対称代名詞から見た狂言

Hosei University Repository

詞章の変遷—鷺傳右衛門派の場合—」(『近代語研究』13)は、享保保教本と常磐松文庫本(野中本)によって鷺伝右衛門派における対称代名詞の待遇価値の変遷を跡付け、他流派と同様の傾向を示すとするが、せめて宝暦名女川本を加えるべきであろう。余計なことながら、鷺流詞章の変遷についての拙稿を引いて批判するが、読みの浅さによるものと言わせていただこう。

【その他】

「その他」のものについて一言触れておく。このような項目を立てたのには、従来の分類にはうまくおさまらないような、新しい角度の問題意識や方法に則った研究が、多くみられるようになってきたことがある。それらをこういう形で一括してしまうことの無理は承知しているが、研究動向の変化について記録しておくという意味もこめて、あえてまとめを試みた次第である。もとより、すべての論を網羅するのは至難のわざであるし、個々の成果に対する評価も一概にはなし得ない。それゆえここでは、目についたものの中から、新しい傾向と呼べそうな研究の視点について、その概略を、数点箇条書きの形でまとめておくことにする。必然的に、「その他」とは言ってもある程度の流れを形成しているものに限られるし、また、既に他の項目で触れられている論にも言及することがあるかと思うが、項目立ての特殊さゆえ諒とされたい。

まず挙げられるのは、能・狂言の作品に思想的・思想史的観点からアプローチする研究である。このアプローチについては、天野文雄「思想という点からみた能楽研究」(『中世文学』52。19年6月)がその必要性を再説し、ジェイ・ルービン「舞台の彼方へ—共同研究「生きている劇としての能—謡曲の多角的研究」への導入」(『日本研究』32。18年3月)の呼びかけに応える形で、〈弱法師〉を一種の「サプライズ・ドラマ」として捉える試み(田代慶一郎「観世元雅『弱法師』について」。同上)などが出ている。ただ、思想といっても様々であり、切り口は多様であり得る一方、言葉は悪いが何とでも言えてしまうところがある。各論者には、それぞれの枠組みの中で議論を緻密に展開することはもちろん、議論の枠組み設定自体を慎重に行うことが、今後いっそう求められるであろう。例えば、古典文学や芸術を素材に日本人の死生観を問題にするものがここのところ増えており、能楽研究に関わるものもいくつかあった(玉村恭「修羅能における生と死—『清経』の死の意味をめぐって」18年。原田香織「死を観想する—能楽の中の死生観」19年)。そうしたアプローチの出現は、能の成り立ちからしても自然なことであり、展開の可能性もあると思われるが、そのような視点をとる場合、「死生観」ないし「死生学」が「よりよく生きるための手段」や「よい死に方に関する教え」のような意味に誤解されることがままある。そうならないよう、論者は「死生学」という枠組み自体の成り立ちを踏まえ、論じる際にも立論の視点を明

Hosei University Repository

確化する必要があるだろう。

第二に、第一の点とも関係するが、思想史的・哲学史的観点から能楽論を読む流れがある。能楽論は哲学的にも読めるということは、従来言われていたことでありつつ、なかなか目に見えた成果が出ない。18・19年に書かれたいくつかの論文を俯瞰しながら、そうした状況の背景にある問題点を考えたい。

坂部恵「異界の視線―世阿弥あるいは異境としての中世」（山口和子他編『日本文化の諸相』。18年3月）は、能の様々なレベルに見られる二重化・多重化の構造を手掛かりに、能の音楽構造と、それを言葉で捉える世阿弥の議論の特性を、「脱中心化」「主客の交錯」等の言葉で捉え返す。思想史的に、また文化史的に興味深い論点が多く提出されているが、論全体がアフォリズムの形で、概念規定や説明が尽くされてはおらず、にわかには咀嚼しきれない。例えば、声は如来蔵から発するとする世阿弥の発想が「現前の形而上学」や「ロゴス中心主義」とどのように違うのか、世阿弥の用語法が近代の西洋語よりも古典ラテン語に近いというのは具体的にどのような点においてか、夢幻能に典型的な「異界」との交接と、謡や舞を通じて実現するコスモロジカルな照応・共感とはどのような関係にあるのか、といった点について、もう少し言葉を継いで欲しかった。パノフスキーがスコラ的時間体系とゴシック的空間構成との間に見出したような関係が、日本においてはどこに、どのような形で潜んでいるのかといったことも、（そうした問題を「実証」できるのか、どのように扱うのが最適なのかという問題も含めて）今後の研究に投げかけられた問いである。

西平直「世阿弥『伝書』における「いまここ」―時に用ゆるをもて、花と知るべし」（『人間性心理学研究』25―2。19年）は、世阿弥において「いまここ」が「厚みと膨らみ」を持つものであること、すなわち、演者の意識に閉じ込められない身体的かつ間身体的な出来事であり、持続を伴うものであることを指摘し、その上で、そのような「いまここ」への「参入」がいかにして可能になるかという観点から、「無心」への到達を説く世阿弥の稽古論を再構成する。また、同「子どもと無心―世阿弥における稽古の逆説」（『哲学雑誌』122。19年）は、世阿弥の稽古論には、子どもの身体を理想としつつ、大人の身体の形成（型や二曲三体）を訴えているところに逆説があると指摘し、その逆説の意義を問う。先の坂部稿もそうだが、重要な論点が切り出され、魅力的な解釈が提出されているのだが、それが十分には「実証」されていない感がある。世阿弥の稽古論が逆説をはらんでいるのは確かであり、西平稿の言うように、世阿弥はいちいち「説明などしない」で「矛盾したまま語る」。だが、「型」を習うことが逆に「型」から離れることを可能にするのだと世阿弥が考えていたこと、「無心」こそが「いまここ」への「参入」を可能にするのだと世阿弥が言ったことと、なぜそうでなければならないのか、そのように言える（言わざるを得ない）論理とは何

Hosei University Repository

かということとは別の問題であり、かつ、後者についてもある程度テクストから「論証」することができるし、そうする必要があるのではないか。

岩倉さやか「離見と感―世阿弥能楽論における「妙所」への眼差し」(『文学』7―2。18年3月)の、世阿弥が上演の成功に際して「無限なるもの」の関与を考えていたという指摘は興味深いものだが、そこでいう「無限なるもの」とはいかなるものか、その「働きかけ」を「受容」するとは、どのような作用とどういう関わりを持つことなのかが不明瞭で、いまひとつ論旨が辿りづらい。「無限なるもの」と「無限」、あるいは、絶対的なものと絶対者は別ものであり、実際世阿弥がどちらを考えていたのかは大きな問題であるから、(はじめに、あるいは最終的に)テクストの範囲で確定ないし規定する必要があるし、それはある程度可能であると思う。用語の語義に関する新見もいくつか提示されているのだが(例えば「瑞風」は「人智を超えたものの働き」である、とする)、意図として、「そのように解すれば世阿弥の議論全体がこのように読めてくる」ということなのか、あるいは「世阿弥の議論全体をこのように読むとそのように解さざるを得ない」ということなのかがはっきりしない。新しいタイプの研究は評価も難しいが、方法論まで含めた形で議論を吟味し、洗練させていくことで、能楽論の読み込みの可能性はさらに広がっていくだろう。

第三に、能・狂言の美的な側面に関する研究がある。この分野の研究は盛んではなく、正面から取り組まれることがあまりないのが現状だが、一つの傾向を示すものとして、岩井茂樹「能はいつから「幽玄」になったのか?」(鈴木貞美他編『わび・さび・幽玄―「日本的なるもの」への道程』。18年9月)がある。能は幽玄であるのではなく、幽玄になったのであり、ある時点でそうなったいきさつには、社会や国家(とりわけ近代の)の思惑と位置取りが関与していたのだ、と捉えるものであり、すなわち、美的な側面に歴史的な視点でアプローチする試みである。こうしたいわゆる構築主義的な視点は、文化研究において最近ますます有効性が認められ、取り組まれているアプローチであり、そうした動向を能楽研究にも取り入れたものと位置づけられよう。近代国家におけるカノン形成の一過程として近代能楽史を捉える研究は、ほかに【能楽史研究】でも取り上げるマートライ・ティタニラ「戦後の能楽に対する検閲資料―「能」もしくは伝統演劇」、田村景子「近代における能楽表象―国民国家、大東亜、文化国家日本における「古典(カノン)」として」があるが(一〇二頁参照)、その種の研究に通有の問題点として、総論的な部分ばかりが強調されがちなところがある(「能楽は近代に作られた伝統である」というような)。その指摘自体は確かに重要なものであるが、今後は、誰のどのような活動、どの雑誌のいつのどの記事が、誰に対してどのような影響をどのくらい与えたのかという、個別的・具体的な事例とその分析に向かうことが必要なのではないか。その意味で、今後の展開

Hosei University Repository

が強く求められる分野であると言えよう。

第四に、外国人の能楽研究に関する研究がある。山本百合子「H・ボーナーの能楽研究――外国人の能楽研究における位置づけと概容」（『福岡教育大学紀要芸術・保健体育・家政科編』56。19年2月）は、ドイツ人で長らく神戸に滞在し、世阿弥能楽論のドイツ語訳を多く残したボーナーの生涯と業績、研究対象の変化などについて、手際良くまとめている。この分野の研究は、平成十五年に法政大学能楽研究所のセミナー「能に注がれた外国人のまなざし」が開催されたあたりから盛り上がりを見せ、こちらも、これまでどのような外国人の能楽研究があったかという概観・総論は、一段落した感がある。今後は、誰のどの研究のどのポイントを問題にするのか、より焦点を絞った検討を行う必要があるだろう。

その他、教育の観点から能の技能の習得過程や教授の様態に着目するもの（城間祥子・茂呂雄二「学生能楽サークルにおける仕舞の学習過程―初心者の技能の社会的構成」『筑波大学心理学研究』33。19年2月。山本宏子・根岸啓子「伝統楽器能管によるワークショップの方法論」『岡山大学教育実践総合センター紀要』7―1。19年3月。中西紗織「能の「型」における「流れ」について―能の実践において「流れ」が生じるとはどういうことか」『音楽教育研究ジャーナル』27。19年4月）、能・狂言とその他の演劇を比較するもの（小澤祥子「中世古典ファルスと狂言の比較―形成の歴史と演劇としての特質」。Ciesko Martin「ギリシア喜劇のいたずら者と狂言のすっぱ」『西洋古典学研究』54。18年3月。式町真紀子「和解の過程―〈弱法師〉と『リア王』二組の父子を中心に」）、伝統芸能を素材に遠隔教育システムの構築を模索するもの（森幸男他「狂言を事例とした所作を伴う芸術分野の実時間遠隔教育システムの構想」『電子情報通信学会総合大会講演論文集』２００７年情報・システム1。19年3月）などがあった。

【外国語による能楽研究】

単行本

Atkins, Paul S. *Revealed Identity: The Noh Plays of Komparu Zenchiku*. Ann Arbor: Center for Japanese Studies, University of Michigan, 2006. xiii＋292 pp.（ポール・S・アトキンス著『露された同一性／正体：金春禅竹の能作品』）

英語圏における金春禅竹の初の本格的な作品論。禅竹の生きた文化的・史的状況の中に彼の作品を位置づけることにより、世阿弥作品とは対照的な特徴を明らかにする。各々の作品の緻密な分析に基づいて導かれた結論は、世阿弥の「変身劇」に対して禅竹の作品は「啓示劇」であるとするものであった。すなわち、シテ内面のダイナミックな変化ではなく、物語としては静止した状況でシテの感情や情景を表現することが、禅竹作品の主眼なのだと論じる。さらにこうした作品の特徴が、「六輪一露」説にも共通する「非二元論」という

Hosei University Repository

根本原理に基づいていると説く。

本書の章立ては以下の通りである。

序

第一章：脳裏に描く風景：〈芭蕉〉と〈杜若〉

第二章：逸脱と悪魔的なる物：〈定家〉と〈鍾馗〉

第三章：神、風景、零落：〈賀茂〉〈龍田〉〈小塩〉〈雨月〉

第四章：理想の女性像の表象：〈楊貴妃〉〈小督〉〈千手〉〈大原御幸〉

第五章：「ヴェールを通して見るような」：〈玉鬘〉と〈野宮〉における錯覚と曖昧さ

結論

以下の書評は、英語圏初のまとまった禅竹作品論としての本書の意義を称揚しつつも、「非二元論」対「二元論」、「変身劇の世阿弥」対「啓示劇の禅竹」といった二項対立に議論が単純化されることへの危惧を表してもいる。禅竹作品を「語る」ことの困難さを、これらの書評が図らずも示していると言えよう。

書評　Looser, Thomas D. *Journal of Japanese Studies* 34, no. 1(2008): 176–180. Gardner, Richard A. *Monumenta Nipponica* 63, no. 2(2008): 411–413°

Pinnington,Noel J. *Traces in the Way: Michi and the Writings of Komparu Zenchiku.* Ithaca: Cornell East Asia Series, 2006. 278 pp.（ノエル・J・ピニントン著『道にのこる跡：「道」と金春禅竹の著述』）

小西甚一が中世の「道」に見取った五つの要素（専門性、継承性、軌範性、普遍性、正当性）をとりあげ、そのそれぞれを切り口として禅竹の人生と思索を論じる。著者の関心は、禅竹がおかれていた（世阿弥のそれとは異なる）特定の社会的・文化的状況を考慮にいれて彼の著作を分析することにあるが、それはまた、世阿弥から禅竹への連続性を再検討することでもある。著者はこの作業を通じて、従来「曖昧さ」「世阿弥の理論の誤読」などとされていた禅竹の著述の特徴（欠点）が、実は特定の社会的状況下において禅竹が自らの流派の存続とアイデンティティを維持するために故意に選びとったものであったと論証する。

先に紹介したアトキンスの著書が禅竹の作品論を中心としていたのと対照的に、本書は禅竹の能芸論の分析に焦点をおく。いずれも（近年再評価を受けているとは言え）従来世阿弥の亜流といった見方をされがちであった禅竹の業績の、その独自性を積極的に評価するという点では態度を同じくしている。近年顕著であったアメリカにおける禅竹研究の高まりが、同年にこの二冊の書籍として形を結んだことを喜ばしく思うと共に、この成果が日本における禅竹研究への刺激となることを期待したい。

なお、本書の章立ては以下の通りである。

第一章：序：道にのこる跡

第二章：専門性：猿楽、庇護者、金春の系列

Hosei University Repository

第三章：継承性：世阿弥から禅竹へ
第四章：軌範性：世阿弥の誤読
第五章：普遍性：六輪一露理論
第六章：正当性：『明宿集』と翁イデオロギー
第七章：結論：実践者、道、そして秘伝

書評　Klein, Susan Blakeley. *Monumenta Nipponica* 64, no. 1 (2009):167–170°

Jortner, David, Keiko McDonald, and Kevin J. Wetmore Jr. ed. *Modern Japanese Theatre and Performance*. New York: Lexington Books, 2006. xix+289 pp.(ディヴィッド・ジョートナー、ケイコ・マクドナルド、ケヴィン・J・ウェトモア編『日本現代演劇とパフォーマンス』)

二〇〇三年ピッツバーグ大学で開催された日本現代演劇に関するシンポジウムの論文集。戦後の実験演劇についての論文を集めた第二部に、能・狂言を扱った以下の三点の論文が所収されている。

・Salz, Jonah. "Super kyōgen: Radically Traditional Utopian Comedies." pp. 123–148.(ジョナ・ザルツ著「スーパー狂言：革新的に伝統的なユートピア的喜劇」)

梅原猛によって書かれ、二〇〇一年から二〇〇三年にかけて国立能楽堂で上演された三点の新作狂言(「ムツゴロウ」「クローン人間ナマシマ」「王様と恐竜」)をとりあげる。それぞれの作品の制作にいたる過程や社会的背景、あらすじを豊富な図版と共に紹介し、これらの作品の主旨は単なる反アメリカ・反近代ではなく、自然や生命を否定・破壊する無反省かつ利己的な我々自身の営みなのだと結論する。本書の第四部には、Jonah Salz と Tomoko Onabe Salz による「ムツゴロウ」の英訳も所収されている。

・Serper, Zvika. "Classical Japanese Performance in a Contemporary Context: A Traditional Strategy of Juxtaposition." pp. 149–167.(ツヴィカ・サーパー著「現代における日本古典演劇：並置という伝統的手法」)

前半では、シテとワキ、荒事と和事といった対照的な役や要素を並置することが、能、狂言、歌舞伎など日本の伝統演劇にみられる演劇手法であることを説く。そして論文後半において、この技法が現代演劇においていかに応用できるかを、二つの上演例をひいて具体的に論じる。一つ目の例は太田省吾作『水の駅』(転形劇場、一九八一年)であり、二つ目の例は最も有名なユダヤ演劇作品である *The Dybbuk* / *Between Two Worlds*(ディバック：二つの世界の狭間で)を、著者自身が翻案・演出・振り付けをしてテル・アビブ大学の演劇学科が二〇〇二年に上演した作品である。日本の古典演劇を現代演劇に応用する新しい手法として、興味深い。

・Kominz, Laurence. "Steeplechase: Mishima Yukio's Only Original Modern Nō Play." pp. 205–213.(ローレンス・コーミンツ著「『大障碍』：三島由紀夫の唯一のオリジナル現代能」)

一九五六年に書かれた三島由紀夫の戯曲『大障碍』が、

Hosei University Repository

『近代能楽集』に所収されていないとはいえ、「憑依」という側面においていかに能の構造を踏まえているかを論じる。さらに、この作品が一度きりの上演しかなされなかった理由を、三島と杉村春子の関係の中に考察する。

Parker, Helen, S. E. *Progressive Traditions: An Illustrated Study of Plot Repetition in Traditional Japanese Theatre.* Leiden: Brill, 2006. xi＋189 pp., CD-ROM.（ヘレン・S・E・パーカー著『進歩する伝統：日本伝統演劇におけるプロットの反復についての図版付き研究』）

能・狂言・歌舞伎・人形浄瑠璃といった諸ジャンルが互いに影響を及ぼしあうことで発展した日本の伝統演劇を、ジャンルごと別個に扱うのではなく、総体として扱うことを目指す。具体的には、義経失意時代の二つのエピソード（「船弁慶」プロットと「安宅／勧進帳」プロット）をとりあげ、それぞれに基づく能・人形浄瑠璃・歌舞伎作品を分析・比較するというのが本書の主要な構成である。

本書の大きな特徴は、台本のみならず今日の舞台における実際の上演もとりあげ、そこでの演出をも分析の対象としている点である。そのために付属のCD－ROMには能〈安宅〉のビデオクリップを含むさまざまなヴィジュアル資料が収録され、巻末には購買可能な関連作品の視聴覚資料一覧が付されている。また本文上でも、該当するシーンを読者が容易にヴィジュアル資料内で見つけられるような工夫が凝らされている。

実際の作品比較は詳細ではあるが、単なる差異の指摘に終わってしまったきらいがのこる。しかし、同じプロットをさまざまなジャンルがそれぞれの手法で発展させて作品にするという日本伝統演劇のあり方を、現実の舞台を見る機会がほとんどない英語圏の読者に視聴覚素材を駆使して具体的に紹介する、という最大の目的は十分に果たしているといえよう。演劇を扱う書籍の今後のあり方を考える上でも、非常に示唆にとんだ出版物である。

書評　Iezzi, Julie A. *Asian Theatre Journal* 25, no. 1(2008): 157–160.

Leiter, Samuel L. *Historical Dictionary of Japanese Traditional Theatre.* Hitsotircal Dictionaries of Literature and the Arts, No. 4. Oxford: Scarecrow Press, 2006. xlvii＋558 pp.（サミュエル・L・ライター著『日本古典演劇史事典』）

能、狂言、文楽、歌舞伎などの日本古典演劇に関する、非常にきめ細かな配慮の行き届いた事典である。さまざまな役名や道具・装束の諸要素、個々の小段名までもが項目として立てられているのみならず、〝actor〟（役者）、“costumes”（装束）、“dramatic structure”（劇的構造）、“humor”（ユーモア）など英語で項目が立てられている場合も多く、そのそれぞれで能・狂言・文楽・歌舞伎というジャンルごとの説明がなされている。さらに解説文内では立項されているすべての単語を

Hosei University Repository

太字で記しているため、一つの項目からさらに別の項目へと参照していくことも容易い。

また事典本体のほかに、日本史年表、三十ページ弱の日本演劇史概説（そこでも立項項目は全て太字で記されている）、年号西暦対応表、事典内で挙げられた作品名の英語訳一覧、解説文中に含まれるが立項されてはいない日本語単語の索引（それぞれが収録されている項目名を載せる）、ジャンルごとの英語文献および関連ウェブサイトの詳細な目録を所収する。各ジャンルの専門家にとって有用であるのはもちろん、日本語能力や専門的知識の多少にかかわらず読者の誰もが求める知識を得ることができるよう、懇切丁寧な便宜が図られているといえよう。今後長きに渡って、日本古典演劇に少しでも関心を持つ全ての者にとっての必携の書になるものと思われる。

書評　Blumner, Holly A. *Asian Theatre Journal* 24, no. 2 (2007): 531–533.

Momose, Izumi. *Japanese Studies in Shakespeare: Interpreting English Drama Through the Noh and Theatrum Mundi*. Lewiston: Edwin Mellen Press, 2006. ix + 173 pp.（百瀬泉著『シェークスピアの日本研究：能と世界劇場を通じてみたイギリス演劇解釈』）

シェークスピア研究者による本書は、能との比較を通じたシェークスピア分析を試みる。しかし、巻末の文献表に能に関する文献がほとんどないことからも分るとおり、比較の対象たる能についての考察は浅く、しかもしばしば誤った情報に基づいている。そもそもシェークスピア戯曲と能の最大の共通点を、両者が宗教儀礼から派生しつつもそこから脱却した演劇である点に見ているようであるが、同様の特徴は他の多くの演劇ジャンルに見ることができるものである。一冊を通じて、シェークスピア戯曲と能と比較する意義が明らかでなく、比較によってシェークスピア分析、能分析が深まったとも言いがたい。能を持ち出さずにシェークスピアを論じたほうが本書の主旨が明確になったのではと思われる。

また、研究書ではないが一般読者を対象とする能に関する英語書籍が二点、この年には刊行された。残念ながら、どちらも目を覆うばかりに不適切・不正確な記述に満ちているという点を共通点としてもつ。英語圏における能の紹介を考える上で大いに憂慮を呼ぶ書籍であるため、ここに紹介しておく。

Wilson, William Scott. *The Flowering Spirit: Classic Teachings on the Art of Nō*. Tokyo: Kodansha International, 2006. 183 pp.（ウィリアム・スコット・ウィルソン著『花開く精神：能に関する伝統的教義』）

これまでに「五輪書」などを翻訳してきた著者による「風姿花伝」の英語訳であり、巻末には〈敦盛〉の訳も含む。巻末

Hosei University Repository

の参考文献にThomas Hareの*Zeami's Style*が入っていない点からも明らかなように、学術的なアプローチは全く欠けている。そのため、冒頭五十ページ余りをかけて能の歴史と構造について説明しているが、過度の単純化(さまざまな能の特質を安易に禅の影響に還元するなど)や信じがたい誤り(「横道萬里雄(オウドウバンリユウ)」とは、「英雄が誤った方向に何千里も行く」という「現在能の典型的なあらすじの要約」だとするなど、26頁)が頻出している。

二十ドル弱という価格は、山崎正和とJ. Thomas Rimerによる世阿弥伝書訳*On the Art of Nō Drama*(一九八四年)や、Thomas Hareによる訳*Zseami: Performance Notes*(二〇〇八年)の半額以下であり、それゆえに本書は世阿弥の伝書に興味のある一般読者にとって手に取りやすい書となるだろう。しかし、いくら一般向けであるとはいえ、書物としてのレベルの低さにも限度があるはずだ。この本を世に出した講談社インターナショナルの、出版社としての良心を問いたい。

Harris, John Wesley. *The Traditional Theatre of Japan: Kyogen, Noh, Kabuki, and Puppetry.* Lewiston: Edwin Mellen Press, 2006. iv+253 pp.(ジョン・ウェズリー・ハリス著『日本の伝統演劇:狂言、能、歌舞伎、人形劇』)

大学で長らく演劇学を教えてきた著者による本書は、全十二章で能、狂言、歌舞伎、人形浄瑠璃の簡単な歴史と特徴を紹介する。各章がさらに短い細項目(「能劇の構造」「観阿弥と世阿弥」など)に分かれているため、学生にとっては読みやすいだろう。

しかし日本演劇の専門家ではない著者は、日本語は言うに及ばず英語で書かれた専門書すら読んでいない(巻末に上げられたたった二十二の参考文献はすべて英語であり、その大部分が一九八〇年以前に出版された一般向けの概説書である)。その結果、不正確な情報と著者自身の無根拠な思い込みに基づく誤った記述が一冊を通じて絶え間なく見られる。一例を挙げれば、〈錦木〉において地謡が「雄鶏の鳴き声を模倣する」としているが(76頁)、これは誤訳で名高いパウンド=フェノロサ訳が原文の一部を"ariakel/the dawn"と訳したのを見て、その"ariake"を雄鶏の声の擬音語だと勝手に解釈した為らしい。百ドル強という値段ゆえに、この誤りに満ちた本が英語圏で教科書として用いられることがないよう、願うばかりである。

書評 Leiter, Samuel L. *Asian Theatre Journal* 25, no. 2 (2008): 398–400.

論文

Furukawa, K., et al. "CG restoration of a historical Noh stage and its use for edutainment." *Interactive Technologies and Sociotechnical Systems* 4270 (2006): 358–367.

立命館大学を中心に進められている、モーション・キャプチャーやCGの技術を用いて伝統芸能にアプローチするプ

Hosei University Repository

ロジェクトの一環で、損傷が激しい本願寺能舞台をデジタル復元する試みのレポートと、復元画像を活用したedutainment contents制作の提案を行う。舞台で舞う姿を観客席からの視線で見るだけでなく、舞う時に周囲がどのように見えるか、舞い手の視線を体感できるというのがこのコンテンツの最大の特長である(現時点では公開していない模様)。能楽師に眉間に小型カメラを付けて舞ってもらって取ったデータを使っているにもかかわらず、「こういうふうには見えない」というコメントが能楽師から出たことが興味を引く。「舞うとはどのような経験か」についての、さらに踏み込んだ解釈が求められるだろう。

Pinnington,Noel J. "Models of the Way in the Theory of Noh." *Japan Review* 18(2006): 29–55.

著書 *Traces on the Way* での議論を圧縮したもの(出版は本論が先)。内容については、「単行本」の項を参照。

Klein, Susan B. "Esotericism in Noh commentaries and plays: Konparu Zenchiku's meishuku shu and Kakitsubata". Bernhard Scheid et al. eds., *The Culture of Secrecy in Japanese Religion* (Oxon: Routledge, 2006): 229–254.

中世に多く書かれた注釈書の思考法・発想法が、いかに禅竹の能楽論と能作品にも作用しているかを、『明宿集』と〈杜若〉を題材に論じる。注釈 commentary ないし注釈的な発想が大きなウェイトを占めていた中世日本の言説空間を総体として視野に入れ、能をそうしたコンテクストの中に位置づけていこうとするのが著者の基本的なスタンスである(またそれは最近の学界の動向でもある)。禅竹の能楽論をNoh theory ではなくNoh commentary と捉えるあたりにも、著者の視点がうかがわれる。ただ、本論では、能楽論と能作品の双方に目配りがなされていることで、逆に議論の密度がやや薄まっている印象があった。能楽論と能作品との関係を考えたいという筆者の狙いもあったであろうし、また論集全体が能に特化した性格のものではないということもあっただろう。個別事例についての知見を深めていくことと、より大きなコンテクストとの関わりを見極めていくこととのバランスをどのようにとっていくかも、今後の課題の一つであると言えよう。

Ryu, Catherine. "Power Play: Re-Envisioning Muromachi Politics through the Nō Play *Sōshi arai Komachi*." *Japanese Language and Literature* 40, no. 2(2006): 137–175.

能〈草紙洗小町〉を読み込み、そこに籠められている政治的な含意をあぶり出そうとする試み。所謂シテ一人主義の枠組みにはおさまらない本曲の造形を説明するには、それとは別の劇的趣向を考えねばならないという指摘がなされたあと、本曲でなされている人物造形や配役にはある種のステレオタイプ化が見られ、そこに広い意味での権力構造の投影があること、そのため、ジェンダー的な視点を介入させ、美的な感興とは異なる本曲の趣向を読み取る余地があることなどが言われる。刺激的な指摘であるが、そこにさ

Hosei University Repository

らに当時の現実の政治関係を読み取ろうとするなど、相当に踏み込んだ解釈がなされており、本当にそのように読めるのか、戸惑いと抵抗を感じさせるものであることも否定できない。能の演劇的本質という根本的な問題にも関わってくることであるので、慎重かつ丁寧な検討が必要であろう。

その他、狭い意味での能楽研究に含まれるものではないが、関連するものとして以下のようなものがあった。

Catarina, Saviour. "Wailing woodwind wild: The Noh transcription of Shakespeare's silent sounds in Kurosawa's 'Ran'." *Literature-Film Quarterly* 34, no. 2 (2006): 85–92.

シェークスピアの悲劇をもとに作られたとされる黒澤明の映画『乱』を、作品内で繰り返し用いられる能管の音に着目して分析する。

Martin, Catherine. "Double play of double meaning': dreams, repetition and the importance of the Noh in Susan Howe's The 'Midnight'." *Textual Practice* 20, no. 4 (2006): 759–775.

アメリカの詩人 Susan Howe の二〇〇三年の作品 *The Midnight* に能が与えた影響、Howe の作風における能的な要素について論ずる。

Hosei University Repository

研究展望（平成十九年）

前年分に引き続き、平成十九年に発表された能・狂言関係の単行本、および雑誌等に掲載された論文を概観する。全体を、単行本（表きよし）、資料研究・資料紹介（小林健二）、能楽論研究（高橋悠介）、能楽史研究（宮本圭造）、作品研究（伊海孝充・江口文恵・山中玲子）、演出研究・技法研究（山中玲子）、狂言研究（橋本朝生）、外国語による能楽研究（玉村恭）の八つに分け、分担執筆している。右記の分類には収まらない、新しい視点からの能楽研究については、「その他」として、平成十八年の項目にまとめて載せているので、あわせてご参照いただきたい。なお、今回の分で、研究展望の遅れはかなり取り戻すことができたが、年度の近い論考についてはいまだ論文データベース類に掲載されていないものが多く、どういった論文がこの年に発表されたのか、情報を収集するのに予想外に難航した。そのため、重要な論考を見落とすなどの遺漏が少なからずあろうかと思う。ご寛恕を乞うとともに、論文発表の折には、抜刷などを本研究所にご寄贈いただくよう、あらためてお願いしたい。

単行本

『能にも演出がある　小書演出・新演出など』（横道萬里雄著。A5判292頁。1月。檜書店。二八〇〇円）

平成十五年から十七年にかけて『観世』に連載された記事に加筆訂正して一書にまとめたもの。「第Ⅰ章　能の演出〈隅田川〉を例として」では、作り物や扮装・演技などにどのような選択が行われるかを説明し、どのような能をめざすかという演出者としての自覚が能役者にも重要であることを説く。「第Ⅱ章　キマリと替エ」では、能にも演者の意図によって動かし得る範囲があることを説明している。「第Ⅲ章　主要小書・その他の演出」では、〈高砂・弓八幡・養老〉など三十三曲の能の小書が具体的に紹介されている。小書が付くと演出がどう変わるかを詳細に把握するのは困難なだけに、曲数は限られているものの、大変役に立つ書である。

『世阿弥がいた場所　能大成期の能と能役者をめぐる環境』（天野文雄著。A5判654頁。2月。ぺりかん社。八六〇〇円）

Hosei University Repository

世阿弥が生きた時代の能と能役者を室町将軍との関係から捉えようとする論考の集成。「序章　世阿弥がいた場所概観」では将軍義持時代以前の御用役者の置かれた環境や能役者の阿弥号について考察する。「第一章　義満時代の脇能と世阿弥」では、当時の能の作品には「君臣一体」という対権力者意識があることを取り上げ、〈金札・弓八幡・養老〉の成立が当時の政治状況と深くかかわることを明らかにする。「第二章　義満時代の能と能役者」では義満の禅的環境と観阿弥作〈自然居士・卒都婆小町〉との関わりや井阿弥をめぐる諸問題、〈小林・合浦・笠間の能〉を考察し、「第三章　義持義教時代の能と世阿弥」では〈難波・白楽天・老松・高砂・花筐〉について主題や成立を論じている。「終章　世阿弥がいた場所拾遺」では鎌倉末期の田楽界と今熊野猿楽についての考察がある。

『岡家本江戸初期能型付』（藤岡道子編。A5判341頁。2月。和泉書院。一二〇〇〇円）

ワキ方高安流の岡次郎右衛門家に伝来した能の型付を翻刻した書。この型付はもとは六冊だったが、現在岡家本は巻三～六の四冊、岡家本の転写本である宮内庁書陵部本は巻二～六の五冊が存在しており、巻二は書陵部本、巻三～六は岡家本をもとに翻刻されている。表紙に「観世流仕舞付」とあるが、どの流派とも特定しがたい内容である。一四三曲の型付が収められており、江戸初期の能の演技・演出などを考える上で重要な資料である。昭和五十四年に本書編者によって紹介された資料だが、難読で活用しにくかった。尾本頼彦・長田あかねが編集協力者であり、困難な作業の継続のおかげで、貴重な資料が活用しやすい形になったのは大変に有り難い。

『世阿弥の中世』（大谷節子著。A5判368頁。3月。岩波書店。八〇〇〇円）

世阿弥の作品を分析することにより、世阿弥が作品に凝縮した時代精神や世阿弥の意志を明らかにしようとする論考の集成。「第一章　逆転の構図―「心」と「理り」」では、〈阿古屋松〉や〈江口〉などを取り上げ、山賤や遊女といった心なき賤の存在によって心や理りが説かれるという構図が世阿弥作品に見られることを指摘する。「第二章　本説と方法」では古注釈・和歌・連歌・説話といった本説と能の作品との関わりを考察している。「第三章　物狂能」では世阿弥の物狂能の特色を分析するとともに、金春禅竹作〈敷地物狂〉を検討することで禅竹が世阿弥から摂取したものと新たに生み出したものを明らかにする。「第四章　脇の能」では〈難波・高砂・弓八幡〉を取り上げ、金春禅鳳作〈東方朔〉などと比較しながら世阿弥の脇能の特異性を論じている。

『能楽史年表　古代・中世編』（鈴木正人編。A5判416頁。3月。東京堂出版。一五〇〇〇円）

西暦一六〇〇年までの能楽関係の事項を年表としてまとめたもの。曲舞や風流など能楽と関係の深い芸能も取り上げられている。出典の明らかな項目だけに限定し、出典が明記されているため、大変利用しやすい形になっている。幅広い資

Hosei University Repository

料から膨大な事柄が取り上げられており、これらの情報を整理・編集していくのはさぞかし困難だったことと推察される。今後の能楽研究にとってきわめて有用な年表である。

『中世の演劇と文芸』(石黒吉次郎著。A5判320頁。4月。新典社。九〇〇〇円)

著者が昭和六十三年から平成十八年にかけて発表した論考を集めたもの。「第一章　中世の芸能」では田楽・今様・白拍子・曲舞などの芸能が取り上げられている。「第二章　能の文学」には「武家の物語と能」「能「須磨源氏」における兜率天」「能「砧」と世阿弥」「世阿弥の樹木思想」「能「鞍馬天狗」と稚児物語」の五編が収められている。「第三章　中世の伝承」では安倍晴明などの英雄像の形成などについて論じている。著者が様々な角度から中世芸能の研究に取り組んできた様子がうかがえる書である。

『日本の仮面―能と狂言』(フリードリヒ・ペルツィンスキー著。吉田次郎訳。野上記念法政大学能楽研究所監修。A5判627頁。5月。法政大学出版局。一〇〇〇〇円)

ドイツの東洋美術史家であるペルツィンスキーが一九二五年に出版した能・狂言面研究書の翻訳。ドイツ文学者の吉田次郎が約三十年前に翻訳した原稿に大幅に手を入れ、最新の能面研究の成果に基づいて注を加えるなど、読みやすくするための工夫を施している。第Ⅰ部は赤鶴・竜右衛門・日氷など著名な面打師についての考察が中心で、第Ⅱ部はさらに多くの面打ちを取り上げた「面打師目録」、「面の製法」や「面の分類」、様々な種類の面を紹介する「面の類型の目録」などから成っている。一九〇五年から翌年にかけて来日した際に調査を行った成果などが生かされた書であり、これだけまとまった内容の書が海外で早くに出版されていたことに驚かされる。

『能の翻訳―文化の翻訳はいかにして可能か―』(21世紀COE国際日本学研究叢書8。野上記念法政大学能楽研究所編。A5判341頁。5月)

平成十八年十二月十五日から十七日に法政大学能楽研究所・国際日本学研究センター・国際日本学研究所によって開催された国際研究集会の報告集。この研究集会では、国内外の研究者による研究報告や大学院生による研究発表のほか講演・シンポジウムなどが行われ、活発な議論が展開された。本書にはロイヤル・タイラーの講演、モニカ・ベーテ、ポール・S・アトキンス、マイケル・エメリック、表章、トム・ヘヤー、シェリー・フェノ・クインによるシンポジウムでの発表、マイケル・ワトソン、竹内晶子、スタンカ・ショルツ＝チョンカ、スティーブン・G・ネルソン、ジョン・M・ブロウカリング、伊海孝充による研究報告、小川健一、柳瀬千穂、式町眞紀子による大学院生研究発表、山中玲子「大学院ゼミ「謡曲の英訳を読む」の報告」が収められている。

『週刊人間国宝56　芸能・能楽3』(週刊朝日百科。A4判変型32頁。7月。朝日新聞社。五三三円)

全七十冊で人間国宝を紹介していく週刊朝日百科のシリー

Hosei University Repository

ズの一冊。ワキ方の宝生閑・松本謙三・宝生弥一・森茂好、小鼓方の幸祥光・幸宣佳・鵜澤寿、大鼓方の川崎九淵・亀井俊雄・安福春雄・瀬尾乃武、太鼓方の柿本豊次の十二人を取り上げ、能楽研究者や能楽評論家による文章や対談などにより各人の魅力を紹介している。ワキ方についてや能舞台など能の基礎知識を紹介する頁もある。

『週刊人間国宝57　芸能・能楽4』（週刊朝日百科。A4判変型32頁。7月。朝日新聞社。五三三円）

全七十冊で人間国宝を紹介していく週刊朝日百科のシリーズの一冊。笛方の藤田大五郎、小鼓方の曽和博朗と北村治、大鼓方の安福建雄と亀井忠雄、太鼓方の金春惣右衛門の六人を取り上げる。

『週刊人間国宝65　芸能・能楽5』（週刊朝日百科。A4判変型32頁。9月。朝日新聞社。五三三円）

全七十冊で人間国宝を紹介していく週刊朝日百科のシリーズの一冊。狂言方大蔵流の四世茂山千作・三世茂山千作・善竹弥五郎、和泉流の野村萬・六世野村万蔵・九世三宅藤九郎の六人を取り上げる。

『華麗なる能装束　高島屋コレクション展』（国立能楽堂事業推進課編。A4判84頁。9月。日本芸術文化振興会）

九月から十二月にかけて国立能楽堂で行われた展示の図録。能装束六十点余の写真とその解説が掲載されている。また長崎巌「高島屋史料館所蔵能装束について」では、高島屋コレクションの中に井伊家・前田家・毛利家旧蔵の能装束が含まれていることなど、その特色が詳しく記されている。

『すぐわかる能の見どころ―物語と鑑賞139曲』（村上湛著。A5判168頁。10月。東京美術。二二〇〇円）

各曲四頁で説明される初心者おすすめ名曲十選、各曲一頁で説明される九十七曲、各曲半頁で説明される三十二曲の、合わせて一三九曲が取り上げられている。物語・鑑賞・余説といった形で作品のあらすじや見どころを紹介しているが、演出の特色などの指摘には専門的なものもあり、初心者に限らず教えられることの多い内容となっている。

論文

【資料研究・資料紹介】

この年は近世の資料紹介や研究に収穫があったが、まずは中世資料の研究から。

佐藤和道「【資料】『観智院過去帳』記載の能役者」（『能と狂言』5。5月）は、東寺観智院院主であった真海が関わった明応五年から大永七年にかけての『東寺観智院過去帳』に記載された能役者四人、観世之重・矢田十郎・春童（藤）大夫・金春大夫（禅鳳）について考証したもの。とくに禅鳳の没年を永正十年とすることから、その時期に中央から離れ大内氏のところで没していたことの可能性を論じる。

神田裕子「金春宗家蔵『宴曲集巻第一』影印・翻刻・解題―能と宴曲―」（『演劇研究センター紀要』Ⅸ。1月）は、金

Hosei University Repository

春宗家に所蔵される室町中期の宴曲集に解題を付して翻刻したもので、一部影印も掲載される。奥書に見える「今春太夫／秦鎮喜」の解明などの問題は残るが、譜本として音楽表記を完備した本であり、能楽との関連のみならず宴曲研究のうえからも好資料となろう。

近世では、演能記録調査研究グループ（代表、表章）「『触流し御能組』演者名総覧と索引（一）」（『能楽研究』31。7月）を第一に取り上げたい。『触流し御能組』五巻は享保六年以後に江戸城内で行われた千四百回を越える催しの記録であり、江戸時代後期の演能の実態を知る上での基本資料である。演者名総覧はその曲名・人名索引のために作成されたものであるが、大部なので今回は前半にあたる巻一から巻三（享保六年から享和三年までの一八二年間）が掲載された。前半だけでも一五一頁に及ぶ力作で、全五巻が完備され索引編が完成した暁には、江戸時代における能役者や演能についての有力なデータベースとなることは疑いない。平成二年から十二年にかけて活動した演能記録調査研究グループの研究成果とは言え、代表者一人により作成されたものであり、今後多くの研究者が恩恵をこうむるであろう。

佐藤和道「松廼舎文庫旧蔵『金春系譜』所収史料考―吉田東伍博士自筆ノート続稿―」（『演劇研究センター紀要』Ⅸ）は、吉田東伍博士が『能楽古典　禅竹集』の編纂のため作成したノート二点「金春系譜考」「金春座旧案」に所収された史料を二十八項目にわたって紹介したもの。これらは金春家の分家であった八左衛門家の当主金春安住筆の『金春系譜』に拠ったものであり、般若窟文庫に現存しない資料などを含んでいる点で、ノートに記された二次資料とは言え貴重なものである。安住は大蔵庄左衛門や竹田権兵衛などの他家の資料も調査しており、資料に付される注は考証的な態度のもので信頼に足ると考察される。金春座やその周辺の研究材料として活用されるものとなろう。

京観世の活動と流布に関わる資料が大谷節子によって二点紹介された。一つは、「京観世　薗久右衛門家門人帳　解題と翻刻―附索引」（『神女大国文』18。3月）で、京観世五軒屋と呼ばれた素謡の家、薗久右衛門の門人帳を翻刻し、人名索引を付したもの。第一巻から五巻には宝暦二年から明治三年まで六七三人、別巻には天明三年から寛政元年まで二九人、計七〇三人の門人が記される。この資料により、薗家が土佐・讃岐・伊予・備中・備後・岐阜・美濃の各地に門人を持ち、各地で素謡の弟子を有していたことが知られる。もう一本は、「京観世　井上次郎右衛門家門人帳　解題と翻刻―附索引」（『山手日文論攷』26。3月）で、同じく京観世五軒屋と呼ばれた素謡の家、井上次郎右衛門家の門人帳に相当する神文帳一巻を翻刻したもので、人名索引が付される。列記された門人の数は七八四人にのぼり、井上次郎右衛門家の謡教授の活動範囲が、京・大坂・近江は言うに及ばず、越前・美濃・信濃・丹波・備前と広範囲にわたっていたことがわかる。

中尾薫「国会図書館蔵の明和本への書入」（京都観世会館

Hosei University Repository

『能』9月)は、国会図書館蔵の明和改正謡本内組十九冊の《車僧》の書き入れから、該本が甲・乙・丙本の甲本にあたり、旧蔵者が明和本刊行に関わった加藤枝直かその子息の千蔭であり、乙・丙への再改訂案を示したものと考察した。短文であるが明和改正謡本の制作に関して示唆的な論である。

その他、連載物が二点。浅見恵・松田存「盛岡南部藩『御能日記』(八)〜(十八)」(『宝生』56—1〜10・12。1月〜10月・12月)は、前年に引き続き盛岡南部藩『御能日記』の文化九・十年の記事を翻刻したもの。飯塚恵理人「豊島十郎筆『高安流仕舞附　地』(四)」(『名古屋芸能文化』17。12月)は、前号に引き続き高安流ワキ方の仕舞附を翻刻したもので、「地」冊の後半にあたる。

謡本に関する論文が三点。安岡充令・山本聡「形態と文字からみる室町期謡本—金春禅鳳自筆謡本の位置(上)—」(『専修国文』81。9月)は、世阿弥自筆能本や金春禅鳳自筆の謡本を取り上げて、その詞章を形態と文字から享受史を追ったもの。形態面を安岡が、文字面を山本が担当する。未完であるが、世阿弥本は座内に相伝された実用的な能本であり、禅鳳本は第三者の鑑賞に耐えうる謡本で身分や作成目的によって対応がなされているとされる。この報告自体は目新しいものではないが、袋綴じ冊子本《源大夫》の平面的で横長の文字形態が後の版本の謡本、さらに浄瑠璃や歌舞伎の台本につながる文字表記であるとの考察は、謡本の室町期から江戸期への変遷を考えるうえで興味深い指摘であり、続編が期待される。伊海孝充「光悦謡本袋綴本に関する一考察—光悦謡本袋綴別製普通本を通して—」(『国立能楽堂調査研究』1。3月)は、多岐多種に分かれる光悦謡本の中で、袋綴装の普通本と特殊本について具体的に比較考証を行ったもの。これまで類似性がないとされてきた両本が、同一の活字を用いているなど緊密な関係にあることを証され、普通本を元に活字を組んで刊行したのが特殊本であるとの方向性を示された。袋綴装の光悦謡本は、特製本に代表される華やかな列帖装本に比べてあまり脚光を浴びることはないが、江戸初期の謡本刊行史を明らかにしていくうえで大事な研究であろう。伊海孝充・西野春雄「車屋本系二番綴謡本　解題」(『国立音楽大学付属図書館所蔵貴重書解題目録』2月)は、従来報告されていなかった車屋本系謡本について、車屋謡本との類似点と個別性を整理する。車屋謡本研究をおこなう上で、有益な資料の一つとなるだろう。

画証資料で面白い論文があった。宮本圭造「国立能楽堂蔵「散楽并狂言之図」—紹介と考察—」(『国立能楽堂調査研究』1)がそれで、国立能楽堂蔵「散楽并狂言之図」三軸の概要を紹介し、そこに描かれた九十五にも及ぶ舞台図が文化年間に大坂で実際に行われた舞台を活写したものであることや、早稲田大学演劇博物館蔵「散楽之図」が同じ原本を模写した兄弟関係にあること、原本の画工が上方で活躍した絵師の多賀子健である可能性を論じられた。絵に添えられた役者名や注記を手がかりとして、関連資料を渉猟し、実際に行わ

Hosei University Repository

れた演能図であることを突き止める手法は鮮やかで、本資料が江戸期における能の画証として有効であることを示している。

【能楽論研究】

世阿弥能楽論については、以下六本が挙げられる。

岩崎雅彦「世阿弥・禅竹と墨跡」（『鍐仙』562。11月）は、世阿弥・禅竹の能楽論に無所住の思想がみえる背景として、『金剛経』の「応無所住而生其心」の句を書いた禅僧の墨跡が多数存在することが重要であるとする。前稿「無所住と寿福増長―『花伝』語彙考証、二題」（『鍐仙』534。平成17年5月）で指摘された春屋妙葩の一行書の他にも、無準師範・一山一寧・夢窓疎石・一休宗純など多くの禅僧がこの句を書いており、将軍とそれを取り巻く禅僧たちの文化からの影響を想定する。

重田みち「世阿弥の「風」と「一」と能」（『鍐仙』555。3月）は、世阿弥用語の「風」について、芸によって醸し出される雰囲気や曲の雰囲気という意味で使われる例に注目し、世阿弥は一曲を「風」という概念で一元的に捉えることで、散漫になるのを防いでおり、それは『花鏡』「万能を一身に綰ぐ事」の思想や、世阿弥の能に一曲を一つの色調に満たす特徴などとも通底すると論じる。また、同「世阿弥能楽論『風曲集』に見える一禅語の解釈と思想史的背景―「一に多種有り、二に両般無し」」（『立命館文学』601。8月）は、『風曲集』最終条に引かれる「一に多種有り、二に両般無し」という禅語についての再考。「二に両般無し」は、これまで「二は二以外のなにものでもない」のように理解されてきたが、「二つに見えても実は二種ではない」という意味で「一に多種有り」と同様の一元論的な事柄を示すと解釈でき、最上の無文音感の境地には有文も共に籠り、有文・無文が別々にあるのではないことを示すための引用であることを明らかにする。

松岡心平「世阿弥の身体論―漢文で書くこと」（『古典日本語の世界―漢字がつくる日本』東京大学出版会。4月）は、『二曲三体人形図』に顕著な独自の漢文体や、「風」などを基軸にした造語は、世阿弥が身体や舞台において目に見えない内的なレベルでおこっている事態を何とか表現するために編み出した新しい言語実験であると評価する。そして、世阿弥が謡の発声における演者内部の根底的な気合を「機」という概念の導入によって捉え、舞においても身体の内的強度を分析的に論じ、また演技を三体に集約して捉えるような様式化・抽象化への志向を持っていたことが、二曲三体という新演技体系を表明する際、特殊な漢文体や漢語の増殖につながっていったとする。

天野文雄「『遊楽習道風見』の執筆時期と世阿弥の環境」（『おもて』95。12月）は、『遊楽習道風見』の中でも、幼少時の芸は不完全なのが自然で、幼少時は舞歌二曲を主体とすべきことを説く第一条の分量の多さに注目し、『遊楽習道風

Hosei University Repository

見』は元雅に子が誕生したか、その子が稽古を始める年齢になった時期、応永末年頃に元雅に向けて執筆されたと推定し、第二条から第四条までは、当時の元雅の段階をふまえ、その将来における大成を願う言説であろうとする。

禅竹能楽論に関しては、六輪一露説に加注した車大寺戒壇院の志玉と禅竹の関係を再考するものが二本と、『明宿集』注釈の試みがある。

天野文雄「普一国師志玉と金春大夫氏信禅竹」(『おもて』92。3月)は、志玉と禅竹の接点として、将軍足利義教が永享元年(一四二八)に南都に下向し志玉から受戒した際、四座の能が行われており、禅竹の出演と志玉の見物が想定可能なことと、禅竹の「春日龍神」でワキに設定されている明恵が志玉と同じく華厳の学匠であることに注目する。以上は間接的な接点ということになろうが、本論文でより重要なのは、伝周文筆「普一国師像」などにうかがえる志玉と禅僧の交流や、華厳と禅との親近性をふまえ、禅竹と禅との関係についても再考する必要があるという重要な問題提起である。

高橋悠介「禅竹能楽論における「露」の一側面—『六輪一露之記注』付載の歌をめぐって」(『能と狂言』5)は、禅竹が「六輪ノ心ヲ」として引く歌が東大寺戒壇院志玉の講義録にもみえる白露の道歌の影響を受けていることを指摘し、「露」が自在な心のありようを示す意味を持っていたことを論じたもの。また、同「『明宿集』注釈稿(一)」(『ZEAMI』4。6月)は、『明宿集』の注釈で、まだ冒頭部だけに留まっているが、今後、継続して報告していきたい。

【能楽史研究】

まず、中世能楽史に関するものから。この年は『能と狂言』5号(5月)が「多武峰と猿楽」をテーマに掲げ、以下の五本の論文を載せた。長岡千尋「多武峰・談山神社の特殊神事と芸能—嘉吉祭と八講祭」、細川涼一「中世の多武峰—大織冠破裂・源義経・勧進活動」、阿部泰郎「多武峰の芸能と説話伝承—常行堂修正会と僧賀聖人伝承をめぐりて」、表章「多武峰と猿楽」寸感」、落合博志「多武峰八講猿楽の資料その他」。このうち、長岡稿・細川稿は多武峰をめぐる祭祀や歴史伝承を取り上げたもの、阿部稿は常行堂修正会の祭儀の背後に広がる説話世界を明らかにしたもので、能楽史と直接関わるのは、表稿・落合稿の二本。表稿は多武峰と能楽との関わりを詳細な年表によって示し、落合稿は談山神社文書『惣方銭仕日記』に見える猿楽下行の記事を紹介して、そこから波及するいくつかの問題を取り上げたもので、『申楽談儀』に見える「四カウサカナ」が「酒肴肴」であることを指摘するなど、新見が多い。従来宝生座のことと考えられている同書の「はうしやうのさ」について、「坊城の座」である可能性にも言及する。

南都の神事猿楽に関する論考には、他に高橋悠介「大谷大学図書館蔵『興福寺縁起』追記録の薪猿楽関係記事について」(『巡礼記研究』4。9月)、西瀬英紀「奈良薬師寺にお

Hosei University Repository

ける金春座関係演能史料の発見」（『金春月報』9月）、同「奈良薬師寺の新出演能史料」（京都観世会館『能』10月）もあった。高橋稿は、大谷大学図書館蔵『興福寺縁起』（『巡礼記研究』同号に大橋直義による全文の翻刻と解題が載る）に見える薪猿楽の由来に関する記事を紹介し、検討を加えたもの。記事自体は、従来知られていた菊岡家蔵『衆徒記鑑古今一濫』や片岡美智蔵『薪芸能旧記』と同文・同内容であるが、これらが近世の書写であるのに対し、新出本は室町後期に遡る古写本である点が貴重とする。さらに、『興福寺縁起』に御湯の呪願僧の記述が見えることについて、興福寺西金堂の修二会で重視されていた湯による潔斎との関連を示唆し、二月五日に行われた呪師走りと、修二会の本尊である観音出御との関係を探る。西金堂の修二会の実態はほとんど不明であり、これまで薪猿楽の初期形態については十分な考察が行われていないが、本資料の子細な検討は、今後の薪猿楽研究の一つの糸口となろう。一方、西瀬稿はいずれも小論ながら、前年に及川亘よって紹介された薬師寺の鎮守八幡宮の遷宮記録に見える金春大夫・大蔵大夫の演能記録を取り上げ、これらの神事能が寺辺の郷民によって支えられていた点に注目する。

この年には、早稲田大学演劇博物館のＣＯＥ事業で、南都の神事猿楽において上演された古形の〈翁〉の復元公演が行われた関係もあって、それに関する報告もいくつか見られた。竹本幹夫「「もう一つの翁」をめぐって」（『銕仙』557。5月）は、復元にいたる経緯を記すとともに、当日上演予定の〈翁〉の概要を記し、古形の〈翁〉から父尉・延命冠者が脱落した現行の〈翁〉の形態は、観阿弥・世阿弥時代に成立したとの見解を述べる。当日の公演では、「もう一つの「翁」」と題するＡ４判10ページのパンフレットが作成されたが、復元に関わった四人のメンバーの座談会という形で、復元までの試行錯誤の過程と、最終的に採用された演出の根拠が語られ、上演台本も掲載されるなど、有意義な内容になっている。〈翁〉に関する論には、他に小論ながら、宮本圭造「願掛けの翁舞」（一）（二）（『金春月報』3月・4月）もあり、民俗芸能での例を含め、願掛けに伴う〈翁〉の多様な演出について紹介し、雨乞いの祈願にまつわる〈翁〉の民間伝承を取り上げる。

その他、世阿弥に関する論文が三本。天野文雄「応永末年～永享初年の醍醐清滝宮祭礼能の「観世大夫」」（『おもて』94。9月）は、応永末年から永享初年に醍醐清滝宮の神事能に参勤した「観世大夫」を問題にする。従来、この「観世大夫」は観世元雅のこととする説が有力だが、当時の清滝宮の楽頭が世阿弥であったと考えられることから、神事能に出演した観世大夫は世阿弥本人である可能性が高いとする。同「五月十四日付世阿弥書状の「三村殿」について」（『銕仙』554。2月）は、世阿弥書状に見える「三村殿」についての論考で、備中の在地武士であった三村氏との関係を示唆する。当時の三村氏は備中守護細川氏の被官であった可能性が高く、従来明確でない三村氏と能との関わりについて、管領細川家

Hosei University Repository

における被官層による演能を傍証として挙げる。右二本がいずれも、資料中の人物考証を中心とする実証的な研究であるのに対し、松岡心平「花の時代の演出家たち」(『ZEAMI』4)は、「花」という概念をキーワードに義満時代の政治・文化の動向を大きく捉えた論。義満の「花の御所」のイメージ戦略から説き起こし、「花」のイメージの提供者としての二条良基に着目、さらに世阿弥が能楽論で頻繁に用いた「花」の理念へと継承・発展されていく様子を描出する。

近世能楽史に関する論考は、この年も多く、新資料の紹介や、地方の能楽史についての論考が多く見られた。まず、加賀藩の能楽に関する新資料を紹介したものから。棚町知弥・入口敦志・竹本幹夫・江口文恵・佐藤和道・青柳有利子「前田綱紀時代の加賀藩資料に見える能楽」(『演劇研究センター紀要』Ⅸ)は、加越能文庫蔵の『元禄五年同六年雑記』『日用雑記』などに見える能楽関連の記事を抄出・翻刻し、詳細な解説とともに紹介したもので、『政隣記』ほかの関連資料をも参照した緻密な考証によって、能楽史料としての意義付けが図られている。宝生大夫友春・政之丞父子が〈石橋〉において仏倒れを演じた記事など、演出資料としても興味深い記事が多い。ただ、日記の書誌や概要についての記述が何もなく、資料そのものについての説明がもう少し欲しいところ。中尾薫「田安宗武の能楽愛好—田藩文庫の能楽関係資料を手がかりとして」(『フィロカリア』24。3月)は、著者が近年精力的に取り組んでいる明和改正謡本研究の一環として、田安宗武の能楽愛好の実態を明らかにした論。『田藩事実』などの記録類や田藩文庫の能楽関係資料によって、田安宗武の演能活動を跡付けるほか、彼の故実研究の一端を明らかにし、明和改正謡本への宗武の積極的な関与も、その延長線上にあることを論じる。中尾薫には他に『幕府書物方日記』に見える享保十年代の紅葉山御文庫蔵謡本の貸し出しに関する記事を紹介した「江戸城における謡本吟味」(『東海能楽研究会年報』11。3月)もあり、二ページの小論ながら、西之丸の徳川家重の周辺で謡本の詞章改訂作業が行われていたことを示唆するなど、興味深い内容。紅葉山文庫からの謡本の貸し出しが、詞章改訂と直接結びつくかどうか明確でないなどの問題点はあるが、今後関連記事をさらに博捜した上での追考を期待したい。

続いて、能役者の事跡に関する研究が二本。米田真理「江戸時代前期における能の家元制度の展開—喜多七大夫宗能(中条祐山)の業績をめぐって—」(『朝日大学一般教育紀要』32。1月)は、喜多家三代の大夫で、後に幕府の廊下番に登用された喜多宗能(中条祐山)の活動を軸に、喜多流の芸の伝承を取り上げる。宗能が廊下番となって喜多家から離れた後も、喜多流の古い習い事を知る古老として権威を持ち、後代の喜多の大夫に芸を伝承する立場にあったことを、喜多流の様々な伝書の記事から明らかにするが、標題にある「家元制度の展開」についてはほとんど触れられず、副題に則した内容。飯塚恵理人「金春朋之助安治追跡—幕末・明治の金春八

Hosei University Repository

左衛門家」（『筑波大学平家部会論集』12。3月）は、金春八左衛門家の最後となる金春安治の墓が杉並区の日蓮宗修行寺にあることを紹介し、『触流し御能組』『南都両神事能留帳』や明治期の新聞から幕末・明治期の安治の活動記録を辿る。金春八左衛門家の歴代の墓所は奈良の浄土宗念仏寺であったが、日蓮宗を信仰した安治が浄土宗から改宗したために、一族の法号を日蓮宗にあらためて、修行寺を菩提寺としたのだという。

他に、地方の町方における演能を取り上げた論考が二本あった。一本は、池田英悟「大坂勧進能と能舞台」（武蔵野大学『能楽資料センター紀要』18。3月）、もう一本は米田真理「『久波奈名所図会』所収金剛寺番組の背景」（『桑名市博物館紀要』6。8月）。池田稿は、近世の大坂で行われた勧進能のうち、五座役者によって催された勧進能を取り上げて、その興行場所と舞台との関係を考察したもので、天明五年の勧進狂言の記録に「常舞台桟敷ニ而替々支度」とあることなどを根拠に、五座役者による勧進能は、常舞台以外の広大な場所で行われるのが慣例で、常舞台は興行に際しての稽古や着替えなどに利用されるに過ぎなかったと結論づける。しかし右の記事は、舞台の桟敷において支度が行われたことを伝えるもので、常舞台そのものが支度場所となっていたことを示す記事かどうかは疑問。難波新地に常舞台が認可された翌年に同所で勧進狂言が開催されていることからも、勧進能の開催場所はやはり常舞台と深い関係があったと見るべきではなかろうか。もっとも、そうした両者の関係が窺えるのは、明和以後のことであり、それ以前の大坂勧進能は、著者の言うように、常舞台以外の場所で開催された可能性が高い。米田稿は、享和二年刊行の『久波奈名所図会』に見える金剛寺での神事能についての考察。番組に見える役者名を検討し、京都の能役者のほか、桑名の町方の素人役者も多数出演していたことを明らかにする。挿絵には本格的な能舞台や桟敷の様子が描かれており、地方における町方の神事能興行の様子を伝える好資料である。

近代能楽史に関する論考も多かった。論文の数で言えば、すでに中世や近世を大きく上回っており、今や能楽史研究において最も盛んな分野といっても過言ではない。まずは、梅若実に関するものから。三浦裕子「明治期の能楽復興と坊城俊政」（『楽劇学』14。3月）は、坊城俊政と能との関わりを取り上げる。俊政が梅若実に師事していたこと、明治政府の式部頭として行幸啓の事務一切を管掌する立場にあった関係から、明治九年の岩倉邸行幸啓能に深く関与し、その行幸啓能への梅若実の出演についても大きく尽力したことなどを明らかにする。坊城俊政が明治の能楽復興に多大な貢献を果たしたこと、また、梅若実の後援者としての功績について論じ、これまであまり注目されてこなかった人物の事跡を掘り起こした貴重な研究成果である。一方、気多恵子「初代梅若実の余暇」（同上）は、梅若実の趣味生活に光を当てた論考。『梅若実日記』を基に、実が一陽軒如水の講釈を好んで聞いてい

Hosei University Repository

たこと、猿若町の芝居見物にしばしば出かけ、明治二十五年頃からはその芝居好きがさらに熱を帯び、日記にも芝居の感想などが頻繁に書き留められていることを紹介する。その二人もメンバーである初代梅若実資料研究会の「梅若六郎家蔵『門入性名年月扣』翻刻および人名解説(四)」(『能楽資料センター紀要』18)は前号からの続き。今号には、明治二十一年から三十一年までの入門者の分を収める。

近代能楽史に関する論考には、他に奥山けい子「近代における能の囃子方」(『東京成徳大学人文学部研究紀要』14。3月)、田村景子「近代における能楽表象—国民国家、大東亜、文化国家日本における「古典(カノン)」として」(『演劇研究センター紀要』Ⅸ)、マートライ・ティタニラ「戦後の能楽に対する検閲資料—「能」もしくは伝統演劇」(『演劇研究センター紀要』Ⅷ。1月)もあった。奥山稿は、明治期に活躍した二人の囃子方、川崎九淵と柿本豊次の前半生について取り上げる。川崎は松山、柿本は金沢、といずれも地方出身の囃子方であるが、彼らが地方においてどのような活動を行っていたのか、上京後の東京の能界がどういった様子であったのかを、それぞれ対比させながら叙述し、能楽囃子方の養成制度や地方出身の能役者が近代における能の継承に果たした役割について論じる。田村稿は、近代における国粋主義の展開の中で、能がどのように位置づけられていったのかを明らかにした論。明治二十年代後半から三十年代にかけて、能を「国楽」と呼んで称揚し、外国の楽よりもすぐれたものであるとの言説が見られるようになり、戦時下においては「大東亜の綜合芸術」として、植民地への文化的侵略の道具に用いられたことなどを述べる。これまであまり顧みられることのなかったテーマであるが、近代能楽史の知られざる一面を、新たなアプローチで描き出しており、興味深い。マートライ稿も、同じく国家と能楽との関わりに着目した論で、戦後のGHQによる謡曲の検閲に関する新資料を紹介し、検閲が具体的にどのように行われていたのかを明らかにする。

その他、新聞やラジオ放送、レコードなど、新時代のメディアが能に与えた影響についての論考もまとまって見られた。飯塚恵理人「メディアと能楽—SPレコードと朝日新聞社主催能を中心に」(『椙山国文学』31。3月)、同「ラジオ放送と謡曲—「謡い方」の全国的統一への道—」(『東海能楽研究会年報』11)、同「昭和初期の能楽」(『催花賞受賞記念論文集』。3月)、同「昭和初期の「伝統芸能」」(『椙山人間学研究』2。3月)がそれ。前二本は、大正期に始まったラジオによる謡曲の全国放送が謡の全国的統一の要因となったこと、大正十四年に発行された観世元滋の〈熊野〉のレコードが謡の稽古を意図した内容になっていること、それが謡の全国的統一に拍車をかけたことを指摘し、さらに「メディアと能楽」では、昭和二年に東京朝日新聞が主催者となって朝日講堂で催した能楽大会の歴史的意義にも言及する。「昭和初期の能楽」は、その昭和二年の朝日講堂での能楽大会と、そこで演じられた〈土蜘蛛〉のラジオ中継放送を取り上げ、メ

Hosei University Repository

ディアと能楽との関わりについて論じ、「昭和初期の「伝統芸能」」では、こうした新たな動きが、それまで特権階級の高尚な娯楽として考えられていた能楽の享受層拡大に、大きな役割を果たしたことを指摘する。いずれも能の興行形態の変化とその背景に着目した論考で、ラジオ中継放送や新聞社主催の能公演を通じて、多数の観客を対象とする形に能の興行形態が変化したと結論づける。概ね納得できる論ではあるが、やや一面的な把握に過ぎるのではないかと感じるところもある。依拠資料の多くが、新聞や雑誌記事などの二次資料であることも、そう感じさせる要因の一つで、一次資料に基づく、さらに踏み込んだ論の展開を期待したい。

他に、明治期の能舞台・能楽堂を取り上げた論考があった。奥冨利幸「明治天皇行幸における華族邸宅の能楽御覧所について」（『日本建築学会計画系論文集』620。10月）、同「宮中能楽場からみた能楽堂の近代化について」（『同』619。9月）がそれである。前者は明治期の行幸啓能の舞台空間について、江戸期の将軍御成能との比較を通じて、その特徴を明らかにした論。特に、明治四十三年の前田利為邸行幸啓能における能舞台を取り上げ、江戸期の将軍御成の舞台空間を基本的に継承している点を指摘する。その一方で、白洲には大勢の陪覧者が観覧できる場所が設けられ、仮設の屋根が掛けられるなどの新しい工夫が見られ、見物席の室内化の傾向が窺えるとする。後者は大正天皇の御大典のために皇居内に設けられた宮中能楽場について取り上げた論。外国貴賓の饗応を目的とした宮中能楽場では、座席を椅子式とし、トップライトやシャンデリアによる照明など、新しい試みが導入され、さらに、舞台を入れ子式にするという特徴的な舞台空間が形作られていたことに着目。能楽堂の近代化に大きな役割を果たしたとする。また、宮中能楽堂がその後まもなくして解体、華族会館に移築され、以後も行幸能の舞台としてしばしば用いられていたことにも言及する。ともに、能楽堂の歴史から近代能楽史を見るといった内容の論考で、能楽史研究としても有益。

面・装束に関する研究も便宜上、ここで取り上げる。まず、能面の様式に関する論から。西野春雄「能面「雪鬼」考」（『能楽研究』31）は、これまで「山姥」面として分類されてきた能面の中に、殿上眉を持つものや、白色に彩色されたものなど、いわゆる替わり型が存在することに着目し、これらがもともとは廃曲〈雪鬼〉のために作られた面であった可能性を示唆。〈雪鬼〉の上演が途絶えたために、類似面の「山姥」面として伝わったのではないかとする。十分に有りえる推測であろう。能〈雪鬼〉の上演状況との関わりや、「山姥」面の位相と「雪鬼」面の位相の相違をどこに見るのか、など、なお究明すべき問題は残されているが、能面の多様な様式の成立について、こうした廃曲をも含めた検討が不可欠であることを示しており、興味深い。同じく能面の様式と名称を問題にしたものに、保田紹雲「蛇口追跡（その二）」（『東海能楽研究会年報』11）がある。「蛇口」「大蛇」の面の名称が、能

Hosei University Repository

面・狂言面の双方で用いられており、能面の型がそのまま狂言面として流用された可能性を指摘する。しかし、狂言面「蛇口」は大蔵虎明の『わらんべ草』に名前が見えるのみで、実作例が知られていない。また、東雲神社蔵の「大蛇」も、近代の整理番号で狂言面に分類されているに過ぎず、本来狂言面であったと断定するのは難しい。この二例のみから、能面の狂言面への流用を主張するのは、いささか無理があろう。

他に能面の焼印に関する論が二本。見市泰男「「出目」焼印をめぐって」(京都観世会館『能』4月)は、「出目」の焼印のうち、枠があるものについては出目洞白の若年期の作である可能性を示唆。また枠がないものについては、出目満永の作とする通説に対し、児玉近江の作も一部に含む可能性を指摘する。一ページの小論であるため、具体的な作例への言及がないのが残念であるが、能面の作者と焼印との関係を考える上での重要な問題提起となっている。同じく能面の焼印について取り上げるのが、保田紹雲「能面の烙印について」(『催花賞受賞記念論文集』)である。井関河内や出目是閑など、世襲面打家の焼印について、数種類の異なった焼印が存在することに着目し、その一部は贋作である可能性を指摘。あわせて喜多古能の鑑定をめぐる問題や、観世元章が出目友水と不和になった背景にも言及する。多岐にわたる問題を取り上げるため、論旨が今ひとつ把握しづらい上、恣意的な見解が所々目に付く。保田紹雲には、他に「伊丹・小西家旧蔵の能面」(同上)もあり、昭和八年の『某家所蔵品入札目録』に見える能面について考察する。右の「某家」が伊丹の酒造家小西家であることを明らかにし、その小西家旧蔵面の一部が現在、彦根城博物館に所蔵されていることを指摘する。売立目録に基づいた能面研究は今後大いに取り組まれて然るべき分野であろう。

続いて、能装束に関する論文。長崎巌「新収蔵品・水浅葱地入子菱丸紋散模様厚板に関する調査報告」(『国立能楽堂調査研究』1)は、国立能楽堂に新たに入った厚板の製作年代についての報告。本厚板には、袖の両端を七cmほど縫い足した痕跡が認められ、林原美術館蔵唐織小袖、厳島神社蔵唐織など、桃山時代の作例にも同様の特徴が見られること、後身幅・袖幅・袖口アキなどの寸法も、これらの作例と非常に近いことなどから、慶長期の製作とする。菊池(小高)理予「能装束の形式成立に関する一考察　能楽古文献における名称表記の変遷を手掛りとして」(『国際服飾学会誌』31。5月)は、小袖ものの能装束を取り上げ、室町・戦国期に単に「小袖」と呼ばれていたのが、桃山・江戸初期になると、生地の名称や装束の用途に応じ、「唐織」「縫箔」などと呼び分けられるようになった経緯を明らかにする。

【作品研究】

本年も世阿弥周辺作品の研究が充実しているが、一方、諸文芸との比較、学際的視野をもった論考も多くなっており、研究の多様化が実感できる年であった。

Hosei University Repository

まず能の作品全体の問題を扱う論から。天野文雄「思想という点からみた能楽研究」（『中世文学』52。6月）は、平成十七年春の中世文学会におけるシンポジウムでの発言をまとめたもの。個々の能作品がもつ世界観や自然観、つまり一曲のテーマとしての思想を把握しようとする研究は、「戦前戦後を通じて一貫して他分野の研究者によってになわれてきた」こと、しかし「能という演劇の読みを深めるために」、能楽研究者もこうした研究を「避けては通れない」はずであることを言う。この天野稿に少し先立つ原田香織「死を観想する―能楽の中の死生観」（『東洋学研究』別冊『日本における死への準備教育』。3月）は、前々年におこなわれた公開講座での内容をまとめたもの。「地獄の曲舞」〈善知鳥・鵜飼・柏崎〉等が材料として簡単に取り上げられている。飯塚恵理人「夢幻能に描かれた来世―修羅道と地獄を中心に」（『日本文学』649。7月）は、修羅道・地獄の描写から能の特質を考える。修羅道は仏書において修羅王の眷属となり帝釈天と戦うところとして描かれるが、修羅能では帝釈天は登場せず、身体的苦痛の描写は僅少で、現世での敵と引き続き戦うかたちで描出されているとする。この傾向は地獄の描写も同じであり、生前の関係がそのまま来世につづく形で描くことによって、戦い・苦患を「幽玄」「花やか」に近づける工夫があると考える。仏教書との比較だけでなく、さらなる諸文芸作品との比較から、能の特質を考えてみたいところである。脇田晴子「能楽における女の語り」（『えくす・おりえんて』14。7月）は「語り」の機能を意識した作品論。女性をシテとする曲を、1一人称で語る女、2鬼になった女、3子を思う母、4才女にわけて、注目すべき「語り」を取り上げ、自らの作品観を述べていく。表題にある「語り」については詳しい分析はなく、作品解説が中心となっている。

次に古作能の研究から順に見ていく。平林一成「能、作品史上の原点―「憲清ガ鳥羽殿ニテ十首ノ歌詠ミテアル所」を中心に」（『演劇研究センター紀要』Ⅸ）は『貞和五年春日臨時祭記』に見える四つの演目について、特に巫女が演じた「憲清ガ鳥羽殿ニテ十首ノ歌詠ミテアル所」を『西行物語』にあてはめて劇進行を想定し、観阿弥時代の猿楽の姿を考察する。世阿弥以前の能の形を想定する興味深い論。資料も無く実態が残っていない部分を想像で埋めていく作業は、「どのようにでも言えてしまう」という危険も伴うが、資料が無いことは考えない、というのでは能楽研究自体が痩せていってしまう。今後も多くの立場から、できる限り説得力のある推定を積み重ねていくことが必要だろう。『文学』には世阿弥時代周辺の作品を取り上げた山中玲子「能〈求塚〉の虚構」（8―1。1月）「〈綾鼓〉の古風と新風―〈綾の大鼓〉の面影を探る」（8―5。9月）の二本が載る。前者は〈求塚〉の問題点を洗い出しながら、憑き物の能の影を見出そうとする論。同曲を観阿弥原作・世阿弥改作と考える立場には、異論も多くあろう。後者は、近年元雅所演記録が発見されたことで元雅関与の可能性が高まった〈綾鼓〉について、世阿弥作〈恋重

Hosei University Repository

荷〉へと改作された『申楽談儀』所引〈綾の大鼓〉との関係を論じ、現行〈綾鼓〉に見える古作〈綾の大鼓〉の面影や元雅による後補、改変箇所などを考察・分析して、〈綾の大鼓〉の段階ではシテは鼓が綾でできていると気づいたうえで難題に挑戦していたとの読みを示す。〈綾鼓〉に関しては、能会のパンフレットに寄せた小論ながら西村聡「「綾の鼓」の両義性—鳴らない鼓である前に—」（『廣田鑑賞会能』9。10月）も見逃せない。「木の丸殿」を皇居とした斉明天皇の葬送を鬼が見送った話や桂の木と叶わぬ恋の関連等、本曲の前提となる要素を手際よく押さえ、山中稿とは反対にシテは最後まで鼓が綾でできているとは知らなかったとの読みを示す。

原田香織「高野の女物狂—作品研究『多度津左衛門』」（『文学論藻』81。2月）は世阿弥自筆能本のみに伝わる同曲を、「狂」の語に着目して「狂気」の擬装性や泣き能の性質を指摘するほか、説経『かるかや』やほかの物狂能と比較し、同曲の女人禁制が破られることのないまま終結する特徴について考察する。同曲の［クリ・サシ・クセ］について、原田稿は「天地開闢」の物語から男女の平等観への展開に論理的飛躍があるとするが、飛躍があるとすればそれは前半を『五音』所引観阿弥作曲「淡路の曲舞」から借りたためであろう。当該箇所については既存の曲舞を転用した前半の国造りの話から後半の女人成仏論へと展開するだけでなく、［クリ］の前に［クセ］の末尾と同文の［次第］を付け、〈百万〉などと同型の女性芸能者が舞うにふさわしい舞グセに仕立てた世阿弥の手腕をむしろ評価してもいいのではないだろうか。もしくはなぜ『多度津左衛門』で「淡路の曲舞」を転用したのかに言及するべきであろう。原田寛子「謡曲〈井筒〉の表現世界—背景としての「石上」」（『国文論叢』37。3月）は「石上」という土地のイメージを和歌用法から「虚構の荒地」とし、それに基づき〈井筒〉の解釈を試みる論。なお、世阿弥が「石上」という地をどう捉えていたかを考えるのであれば、〈井筒〉のみにとどまらず〈布留〉などにも着目してほしかった。尾本頼彦「世阿弥およびその周辺の能の編年的位置づけ—「歌舞」「舞歌」の語をめぐって」（『演劇学論集』45。11月）は世阿弥能楽論に見える「歌舞」「舞歌」について、「歌舞」は応永二十五年～応永二十七年以前、「舞歌」はそれ以降に用いられた可能性が高いとし、この二語が見える世阿弥関連及び周辺の作品についてその成立年代の特定を試みる。この結果は先行研究の提示した作者や成立時期への補強にはなるかもしれないが、先行研究の否定や、意見の分かれる説に判断を下す根拠にまでは至らないであろう。また、別の語を切り口にした場合、全く異なる結果が出る可能性も考えられるため、危うさを残す。他に世阿弥時代の作品を扱う論文として、〈姨捨〉を倫理思想史の視点から読み解いた柏木寧子「石と化して在ること—謡曲「姨捨」の一読解—」（『山口大学哲学研究』14。3月）などがある。

井上愛「番外曲〈反魂香〉試論」（『国文目白』46。2月）は〈反魂香〉が〈花筐〉と同様観阿弥作曲「〈李夫人〉の曲舞」を取

Hosei University Repository

り入れる理由の考察に始まり、〈砧〉〈景清〉〈隅田川〉との比較、〈反魂香〉の劇構造に未整理な点があること、和歌に手を加えずそのまま取り入れる手法が金春禅竹作品に見られることなどを指摘した上で、同曲を禅竹若年期の作品と結論づける。欲を言えば、禅竹については『禅鳳雑談』に見える「若き時」が研究上で問題になることもあるので、若年期をいつの頃と設定するのか、具体的な時期を大まかにでも示してほしかった。

室町後期の作品を扱う論文は三本。原田香織「謡曲と禅的世界―『放下僧』における禅問答」（『東洋学研究』44。3月）は〈放下僧〉の禅問答の検討。〈放下僧〉を禅宗の入門的理論を披露する「真性」と、敵討の「俗性」の二面から捉え、前者の特徴を特に詞章と禅関連書との同質性から浮き彫りにしようとした論。全体的に、禅問答の注釈的内容となっており、その禅的特徴が作品においてどのような意味があるのかが分かりにくかった。佐藤和道「能〈調伏曽我〉考」（『演劇研究』30。3月）は『曽我物語』との関係から、〈調伏曽我〉の素材を考察する。『曽我物語』の真名本・仮名本双方との内容面、構成面の相違、また幸若舞曲と仮名本との調伏場面の類似などを根拠に、真名本をもとにし、調伏場面だけを描いた独立伝承が存在し、それに拠って〈調伏曽我〉が成立したと考える。「独立伝承」の存在を裏付けるものがない以上、その存在を仮定して典拠を論じてしまうと、どうしても漠然とした印象を受けてしまう。伊海孝充「能における長刀の「風流性」―長刀と多武峰様具足能との関係を基点に」（『能楽研究』31）は、番外曲〈小林〉の構想とシテの性格を、多武峰様で演じられた可能性も含めて詳細に検討したうえで、長刀の「能における本来の意義」を、「シテの動的な姿ではなく、扮装自体の風流性を強調する」ことにあったと考える。〈鉢木〉〈鞍馬天狗〉等、働事に直接結びつかない長刀をシテが持って出る作品にも、「多武峰様具足能の系譜に連なる」風流性を見る視点が新鮮。ただし、長刀を「その曲の演能形態・演能空間と密接な関係のある装置」と見るべきかどうかは、さらに検討が必要だろう。

作品の典拠に注目すると、昨年に続き『源氏物語』関連が目に付く。西村聡「〈葵上〉注釈余説」（『金沢大学文学部論集（言語・文学篇）』27。3月）は、最近〈葵上〉の注釈をおこなった著者がその過程で確認した異見や作品解釈上の問題点を整理しつつ、作品の読みをさらに深めている。青女房の若さが御息所の「衰へ」を照らし出すとの指摘、夕顔は御息所ではなく「物の怪」に取り殺されたという理解の確認、「その面影も恥づかしや」は執心で醜く変貌した御息所自身の面影とする見解等々、どれも説得力がある。なかでも、光源氏を登場させず巫女の呪力によって御息所の名乗りを引き出ししかも御息所が成仏する、という能〈葵上〉の意味や、そこで新しく描き出される御息所の人物像を、『源氏物語』本文との比較により考察した部分が興味深かった。同じく御息所の心理を分析した、齋藤澄子「能楽「葵上」と「野宮」におけ

Hosei University Repository

る主人公の表現構造とその特長—六条御息所の心の中の「葛藤と癒し」の心理分析(その1)」(『茨城キリスト教大学紀要。1・人文科学』41)は、特に目新しい指摘はなく、また最後に付されている能楽師のインタビューの内容も、同稿の内容とはほとんど関係ないように思われた。他に『源氏物語』関連として、新作能に注目した久富木原玲「『源氏物語』と新作能—「夢浮橋」「小野浮舟」「紫上」の世界」(講座源氏物語研究9『現代文化と源氏物語』10月)がある。『源氏物語』が新作能に作られることによってどのような新しい意味を持ち得ているか、三曲の新作能において、浮舟やその周りにいた人々、紫上、光源氏などの、『源氏物語』では十分に描かれなかったどのような姿が浮き彫りにされているか、という点に焦点を合わせ、それぞれの作品を分析する。能という表現形式の持つ可能性や新作能の意義について改めて教えられるところの多い論であった。能の催しでも『源氏物語』関係曲の上演が多かったように思われるが、喜多流の〈落葉〉復曲(塩津哲生主催「名曲を観る会」特別公演)のパンフレット『源氏物語の能』(7月)には、村上湛「能〈落葉〉解説」と石井倫子「〈陀羅尼落葉〉小考」が載る。前者は復曲に際しての本文補綴や演出の工夫を述べる中で一曲の主題の解釈にも触れる。後者は、中世の『源氏物語』享受との関わりや、詞章にちりばめられた様々な「音」の効果等について述べる。

岩城賢太郎「謡曲〈狭衣〉の構成—室町文芸における『狭衣物語』天稚御子降下場面の受容の様相」(『物語の生成と受容』2。国文学研究資料館。2月)は同じく平安文学を素材とした〈狭衣〉の作意について、作詞の中心人物三条西実隆周辺の学問と当時流布した諸文芸書との比較を通して考える。室町後期の連歌の言説や諸注釈書との対応関係を示し、従来不自然さが唱えられていた後シテの造型について、女二の宮が天稚御子の舞を再現する設定には、五節の舞姫を天人と重ねる当時の理解が投影されているとする。本文の注釈を示すような丁寧な考察で、学ぶことが多いが、祝言的な内容を後土御門帝の治世の賛嘆と推測する点は、根拠が不十分に思える。

『平家物語』関連の能については、岩城賢太郎の論文が三本。「謡曲〈兼平〉の「いくさ語り」—義仲を語る「いくさ語り」と兼平を語る「いくさ語り」と」(『軍記と語り物』43。3月)は、いくさ語りの特質から、〈兼平〉を修羅能の歴史に位置づける論考。『平家物語』の詳細な分析をもとに、視点(一人称・三人称)・語りの順序などから〈兼平〉詞章の独自性を推測し、鎮魂の枠組みから自由になっている本曲を、新しい「いくさ語り」を創出した作品と位置づける。〈兼平〉の分析は納得させられたが、この曲を能作史にどのように位置づけるかは、さらに検討を要するだろう。世阿弥時代にも〈伏木曽我〉や〈碇潜〉のような、修羅の弔いを明確にしない作品が存在した可能性もある。〈兼平〉を「新趣向」と捉えるか、「世阿弥と別系統」と捉えるかは、他曲の成立問題も含め、

Hosei University Repository

慎重に考える必要があろう。この論の続稿といえる「『平家物語』から謡曲、そして古浄瑠璃へ―「木曽最期」を語った古浄瑠璃の様相」(『筑波大学平家部会論集』12。3月)は兼平の物語の展開を、さらに古浄瑠璃までに広げ、検討した論。「きそ物がたり」を初めとする、一部に謡曲の影響を認められる作品群と、「東鑑後撰集」をはじめとする、謡曲と密接な関係が認められる作品群、それぞれについて、『平家物語』と謡曲との対応関係を丹念に確認する。「東鑑後撰集」の人物関係を観客が自然に受け止められる用意が、『平家物語』・謡曲の中にあるという指摘などが興味深かった。同様の手法を用いた「謡曲「忠度」と浄瑠璃「薩摩守忠度」―謡曲の伝えた『平家物語』」(『国語教室』85。5月)は浄瑠璃「薩摩守忠度」が謡曲に強い影響を受けていることを検証する。特に謡曲に引かれる「行き暮れて…」の歌に注目し、浄瑠璃が謡曲に倣った点を具体的に挙げる。

近年中国故事説話を素材とする能を精力的に研究している三多田文恵の論考も、二本出ている。「謡曲『河水』の成立とその背景」(『中國學論集』45。9月)は『大唐西域記』『西陽雑俎』などとの比較を通して、和漢古典との共通要素、非共通要素を整理し、長俊は異類婚姻譚など中国の「珍しい物語」をもとにしながら、華やかな見せ場となる要素を脚色したと考える。「謡曲「唐事」における劇化の手法―素材の扱い方」(『中國學論集』44。3月)は典拠との関係から作品を分類、考察し、和様に比べて唐事の素材の扱い方が複雑と考える。両稿とも、表面的な特徴を捉えた分析に終始しているという感が否めない。単なる分類・比較だけでなく、より包括的な考察が必要だろう。

これらの他にも、本年は能と諸文芸の関係に注目した論が多かった。宇津木言行「今様「黒鳥子」の継承と能楽「班女」の形成―多武峰常行堂修正会延年の場に注目して」(『梁塵―研究と資料』24。3月)は歌謡の世界で野上宿がどのように歌われていたかを確認しつつ、〈班女〉の場面設定に、今様の大曲で多武峰常行堂修正会に歌われていた「黒鳥子」が影響したと推測する。確かに世阿弥が、多武峰でこの今様を聞いた可能性はあるだろうが、両者の一致点は野上宿が詠み込まれているだけなので、直接的影響関係が想定できるかは異論の余地がある。落合博志「能と和歌―《姨捨》と姨捨山の和歌について」(『国文学解釈と鑑賞』912。5月)は〈姨捨〉の和歌に関する論考。姨捨山の和歌には、心がなぐさまないことを詠んだもの、月の美しさを称えたものというある種分裂した二つのイメージがあり、能〈姨捨〉はその二つを反映することによって成立したと考える。能と和歌世界との緊密な関係を再認識させられる論。

近世文芸との関係についての論考は四本。竹本幹夫「謡曲調の文体」(『江戸文学』37。10月)は「特集・江戸の文体」に寄せられた論文の一つで、謡曲調の文体の沿革と近世文芸の影響の源を示す論。田草川みずき「浄瑠璃太夫たちの〈ウタイ〉考―近松作品における謡曲関係文字譜と作者・作曲者

Hosei University Repository

の意図をめぐって」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』52（第3分冊）。2月）は現在の能楽研究ではあまり行われていない節付関連の研究で、近松作品に見える「ウタイ（謡）」など謡曲関係の文字譜が付く場合の浄瑠璃詞章を時代別に調査し、初期作品では謡曲の引用に謡曲関係の文字譜をつけ、言葉も節付も謡曲から借りることで謡風に謡う単純な節付法ばかりであったものが、段階を経て正徳・享保期の作品になるとそこから脱却し、謡曲関係の文字譜を付けても謡曲の引用ではなく、謡曲を真似た謡の詞章風の文章を作る例が散見するなど効果的な応用が見えると指摘する。浄瑠璃における謡曲摂取が定着、発展していく過程が紐解かれている。なお、同「土佐節譜本の研究　―周辺芸能との比較を通して―」（『演劇研究センター紀要』Ⅸ）も謡本の節付の浄瑠璃譜本への影響について論じている。小林健二「近世芸能における鈴木三郎異伝の展開―能・狂言、山伏神楽・番楽」（『大谷女子大国文』37。3月）は能〈鈴木〉に関わる諸文芸作品の紹介と分析。〈鈴木〉の間狂言のような位置にある〈追掛鈴木〉、〈鈴木〉の後半とほぼ同内容で独立した語り芸であったともされる狂言〈生捕鈴木〉、謡曲を元に作られたと考えられる番楽「鈴木」の特質について言及する。近代以降の文芸作品への影響を論じたものとしては、三島由紀夫『近代能楽集』の『班女』における能の継承と再生について論じた高橋和幸「『班女』論」（『樟蔭国文学』44。3月）がある。

他文芸との関係を論じたものではないが、近世謡曲研究が三本。川上真理「謡曲〈富士山〉の演能の場と言説―江戸幕府儀礼を中心に」（『富士山をめぐる日本人の心性』法政大学国際日本学研究所。3月）は、能〈富士山〉の江戸時代における受容状況から、本曲の時代性を考える。〈富士山〉の演能記録が江戸中期までなく、三百番本まで謡本の出版がなかったことを、本曲が江戸幕府に用いられる必然性がなかったためとする。その理由として、将軍家において有意義な作品でなかったことと、唐国の来訪者という「他者」がなければ、富士山の誉れが見出されないという内容であることを挙げる。江戸時代の〈富士山〉の受容は、綱吉時代前後の稀曲復活の影響が大きいはずなので、その点を踏まえた考察が必要だろう。若木太一「謡曲「諏訪」考」（『長崎大学綜合環境研究』創立10周年記念特別号。8月）は長崎市の諏訪神社に伝来する謡曲〈諏訪〉の考察。寛文十二年に長崎奉行牛込勝登の官命により、能役者早水治部が本曲を作ったとする説の妥当性を、当時の社会状況などから裏付ける。本文をすべて翻刻するなど、資料紹介に近い内容である。中尾薫「永正三年本〈玄上〉と明和改正謡本―加藤枝直説の投影を中心に―」（『催花賞受賞記念論文集』）は、金春安明の論考により永正期の成立でないと判明した観世文庫蔵永正三年本〈玄上〉について、加藤枝直の草稿を編集した『謡曲改正草案帙』の改訂詞章案との一致が見られる点に基づき、投影された箇所の検討や、当該謡本の朱筆の明和改正謡本への反映ぶりから、永正三年本の詞章が明和本の制作過程にかかわる詞章で稿本的存在と位置づける。

Hosei University Repository

法政大学21世紀ＣＯＥプログラムでは、国際日本学として外国での研究にも着目しつつ、学際的視野からの研究が試みられた。山中玲子「伝統と同時代性―能楽研究の国際化は可能か」（21世紀ＣＯＥ国際日本学研究叢書６『日本学とは何か』３月）は国際学会での発表の報告で、日本・海外における能楽研究の現状及びこれからのあるべき姿についての提言。能楽研究所が今後国際的な研究拠点を目指す上での指標が示されている。『国際日本学研究』３号（３月）には、若手研究者の論文が三本掲載されている。〈弱法師〉とシェイクスピアの『リア王』を比較した式町真紀子「和解の過程―〈弱法師〉と『リア王』二組の父子を中心に」は、和解する親子という切り口だけで比較するのは多少無理があるか。〈弱法師〉について「上演上の空白期間において登場人物の集約が行われた」とあるが、世阿弥自筆本にのみ見える妻が後世に伝わらなかったのは意図的な削除なのか、それとも断絶期間中に無章句本などから派生した偶発的な脱落なのかなど、考察すべき問題点が多く残されている。小川健一「〈班女〉訳におけるＲ・タイラー氏の翻訳方法とその意義」は一九七〇年と一九九二年に発表された、二種のＲ・タイラー訳〈班女〉の比較検討。海外における研究成果を日本でも検討する必要性や意義を感じさせる論。今泉隆裕「幽霊能の普遍性と個別性―日韓の民間巫俗を手がかりに」は、日韓のシャーマニズムの比較から、「幽霊能（夢幻能）」の特質を考える。祟る死者がイニシアチブをもつ韓国に対し、苦しむ死者が描かれる点に幽霊能の特徴をみる。その背景として、本地垂迹説により生まれた苦しむ神の姿や、夢幻説話の生成があり、祟りにおびえる武士たちの支持を受け、世阿弥によって苦しむ神が舞台化されたとする。夢幻能の発生（もしくは能の発生）という大問題を扱う論が僅少なので、能の本質を問う貴重な論と受け取った。ただし、今泉説の根幹にある能享受者たちの死穢観念が、どれほど能の成立に影響したかは疑問が残る。

以下、能楽関係誌掲載の論文を取り上げる。まず『観世』では〈絵馬〉〈東岸居士〉〈石橋〉の三曲を特集する。〈絵馬〉は樹下文隆「作品研究《絵馬》」（２月）及び中尾薫「明和本《絵馬》の特徴と改訂の意図」（３月）の二本。樹下稿は、米田真理「能〈絵馬〉の構想」（『名古屋大学国語国文学』84。平成11年７月）が近代以降の諸注釈書の誤りを正し、〈絵馬〉のワキを藤原公能であるとした、その説に基づき、諸書から藤原公能像を分析。彼がワキに設定された理由を考察するほか、同曲が天岩戸舞の再現を意図した曲であることや近世になって重視された点にも及ぶ。中尾稿は明和改正謡本で観世元章が同曲を大幅に改訂した詞章の紹介と考察。〈東岸居士〉は梅谷繁樹「〈東岸居士〉の背景―曲舞、勧進、漂泊芸能者など」（５月）、小田幸子「作品研究〈東岸居士〉」（６月）、佐藤保「「柳は緑花は紅」の出典について」（７月）の三本。梅谷稿は様々な絵画資料を用いて、時宗・律宗僧の芸能活動や、曲舞・暮露などの芸能者の特質を概説する。小田稿は成立年代・古態・シテの造型など種々の問題点を検証する。特に、

Hosei University Repository

本来〈西岸居士〉がツレとして登場していたという説を支持した上で、独立した謡物を取り込む形で東岸居士・西岸居士が登場する曲が『三道』以前に作られ、その改訂版が現行の形であると推測する。本曲の複雑な成立過程が明快に示されており、今後の研究の指針となる。佐藤稿は、「柳は緑…」が従来蘇東坡の詩句に基づくとされているものの、該当する詩句がないことを明らかにし、さらにこの句が中国・日本の禅僧に好まれたことを示したうえで、本曲の例は「皆そのままの姿」を意味する禅語として、日本での用法に近いと結論づける。従来の通説を改める貴重な指摘。〈石橋〉は柳瀬千穂「作品研究〈石橋〉試論—趣向と構成について」（12月）を掲載。同曲に引用される『和漢朗詠集』収録の漢詩についての古注釈の理解などから、能〈石橋〉の作者が石橋を天台山にあると解していたことや、幸若舞曲「笛の巻」の石橋説話と能の類似点、もとの演出が一場物であった可能性などを指摘する。それぞれ興味深い指摘ではあるが、独自の論を展開するなら趣向・演出論ともにもう数点別の資料の提示が必要か。

『鐵仙』には二本。石井倫子「〈江口〉の遊女—『撰集抄』の窓から」（561。10月）は、素材となった説話やシテの造型、世阿弥による改作などに触れ、シテが普賢菩薩となる結末に、それを見届けることでワキも観客も救済を約束される「宗教劇」としての完成を見る。金賢旭「修験の世界観と「葛城」の女神」（563。12月）は、〈葛城〉のシテが女神として登場することの背景に、山を母体、あるいは女性として見る修験の世界観を想定し、天照大神のイメージを重ねる旧来の説とは別の興味深い視点を示す。また、シテが語る「三熱の苦しみ」についても「龍と女を一体として山神としてみる白山修験のコスモロジー」と関係づけられるのではないかと説く。

京都観世会館『能』にも四本。藤井奈都子「よるべなき心の水に誘われて」（5月）は〈野宮〉の引き歌に関する考察。野宮の別れから伊勢へ下向する御息所の心情の描写に、小野小町「侘びぬれば…」の歌に拠る詞章があることを不自然とし、小町歌を業平への恋慕と考える中世理解を投影し、光源氏への御息所の思いを表現したと考える。短い論考に多くの情報が含まれている。小町歌・業平歌が能の詞章でどう使われているか、という大きな問題にもつながっていくのだろう。岡田三津子「謡曲の表現と宴曲」（6月）は〈放下僧〉に見える「言句」という語の用例の紹介。この詞は〈放下僧〉が最古の用例と理解されていたが、それを遡る例が宴曲〈早歌〉に見えることを紹介する。近年、能と早歌との関係に言及した論が少ないだけに、本稿の報告は貴重。小林健二「能〈融通鞍馬〉の制作動機」（7月）は『申楽談儀』にクセの一部が引用されている〈融通鞍馬〉の成立年代を探る論。清涼寺本「融通念仏縁起絵巻」が足利義満七回忌追善に作られたとする研究を受け、融通念仏宗を礼賛する本曲にも、同様の成立背景を想定する。宮本圭造「謡曲『布忍山』と寺内安林」（12月）は、従来能楽研究者に存在を知られていなかった番外曲の報告と、作者の寺内安林に関する論考。『松原市史資料集』十四号に

Hosei University Repository

紹介されている〈布忍山〉は元禄期に再建された河内国の布忍山永興寺の再興の願いが籠められているとし、これを作った寺内は河内で活動した俳人であることを紹介する。近世新作曲と俳諧との関係は、今後追究が望まれる研究課題であろう。

その他、謡曲・世阿弥伝書に見える「童男」という語の解釈を考察する天野文雄「「童男」という風体のこと」(『おもて』93。6月)がある。〈小鍛冶〉の「童男壇の上にあがり」や〈須磨源氏〉の「御影のうちにあらたなる、童男来たりたまふぞや」に加え、〈鵺〉や『二曲三体人形図』の用例から、世阿弥の周辺において、「少年」の意から「神霊的な若い男」という意味に転化し、さらに一つの「風体」として形成されたと考える。「童男」が風体を示す語としても使われたことは納得いくが、常に「神霊的」の意を含んでいたかは疑問の余地がある。昨年から始まった『紫明』での連載、飯塚恵理人「幽玄のいざない」は義経伝承の二作品の考察。「〈烏帽子折〉試解」(20。3月)は若干の断絶感がある前場・後場の関係とそれぞれの意義の考察。前場は、左折りの烏帽子の謂れを語り、鎌田の妹を登場させることにより、父義家にちなむ「嘉例」を表現していると考える。後場は『義経記』などの例を引き、「源氏」としての「門出」となっていると考える。前年の小林健二「義経、二度の奥州落ちの旅と芸能」の説と重なる見解。「〈船弁慶〉試解」(21。9月)は『義経記』『吾妻鏡』との比較から、〈船弁慶〉の義経像を考える。『吾妻鏡』『義経記』において義経は頼朝に敵意を表しているのに対して、〈船弁慶〉では頼朝との関係修復を祈念しており、腰越状で語られる義経の姿を反映しているとし、後代、多くの同情を呼び起こす義経像形成に大きく関わった作品と位置づける。芸能が「判官贔屓」形成に影響を与えたことには賛成だが、多くの見所を据え、起伏の富んだ劇構成をもつ〈船弁慶〉が、「悲劇の死を遂げたという義経像の形成に、大きく関わった作品」といえるかは疑問である。

【演出研究・技法研究】

まずは、作品研究の一部としての演出研究から。横山太郎「檜垣蘭拍子―その歴史と可能性」(『観世』9月)は、〈檜垣〉蘭拍子に関する諸説を整理した後、観世文庫所蔵の「享保頃檜垣型付」の記事により、観世宗節の晩年、徳川家康の「上意によって檜垣では蘭拍子ではなく序の舞」を舞うことになったという説を紹介する。〈檜垣〉の舞は本来白拍子の物真似の要素が強いものであったろうということ、家康の時代に能の舞に関する意識が変容したであろうこと、現代の能の演出として蘭拍子を蘇らせることに大きな意味があること、の三点はそれぞれ別の問題だが、同稿はそこを明確に分けて整理しており、研究と実演の場をつなぐ際の基本姿勢として共感のできる論だった。尾本頼彦「世阿弥の芸論・自筆能本からみた世阿弥の能の演出」(『催花賞受賞記念論文集』)は、経を持って登場すると考えられている〈箱崎〉〈鵜羽〉の後シテが、世阿弥時代にはそれぞれ、経箱、珠を持って出、その持

Hosei University Repository

ち物を用いる所作を見せたであろうと推定する。世阿弥の「文字に当たる風情」や「音曲・はたらき一心」の説を持ち物の問題と結びつけて考える前半部には首肯できないが、両曲の後場の詞章や『宗節仕舞付』『金春安照装束付』の記事を分析したうえでの右の推定には説得力があると思われた。

謡の旋律と記譜法に関する研究も一本。丹羽幸江「江戸期能楽観世流『明和改正謡本』の記譜法―〈梅〉のイロを中心に―」(昭和音楽大学『研究紀要』26。3月)は、明和改正謡本における「イロ」の直シは、単なる装飾ではなく「ヨワ吟らしい旋律を作り出す効果」を意図して用いられており、その記譜法は「明確な原則が確立した」合理的なものであることを指摘する。資料を丁寧に調査したうえで江戸時代における「イロ」の位置づけを考える論には教えられるところが多かったが、「記譜法を対象とする本稿では…具体的な謡い方については対象外」ということで、結局どのように謡うのかがはっきりしないのは残念。ツヨ吟とヨワ吟の区別など、より大きな面白い問題につながっていくはずのものだと思われるので、続稿を望みたい。

前年から『観世』に連載の「横道萬里雄の能楽講義ノート」(講義録起こし隊)は第5回から16回(最終回)まで。内容は、「ヨワ吟(その4～6)、ツヨ吟(その1～2)、能管のしくみ、大鼓と小鼓(その1～2)、太鼓、打楽器と笛の楽型、掛ケ声、小段の話」。ここで取り上げられているのはあくまで現代の能楽囃子の構造や楽器のしくみだが、その源流を探るような研究も目に付いた。高桑いづみ「「過渡期の鼓胴その後」再び」(『銕仙』560。9月)は、新出のやはり過渡期の鼓胴についての報告。既に報告済みの「能以前の鼓胴」や現在の大鼓よりやや小ぶりで、乳袋に線刻を持ちながら蒔絵が施されカンナ目を有する鼓胴を、能以前の鼓胴から能の鼓胴(現在より少しサイズが小さかった)へと移り変わる過渡期、室町初期のものと推定する。また、小島美子「能の四拍子の成り立ちについて」(『国立能楽堂調査研究』1)は、能の囃子を構成する四種の楽器がどのようにできてきたかを考察したもの。能管は龍笛から、太鼓は「揩鼓」と呼ばれる指で弾いたりこすったりしてならす太鼓から生まれ、大鼓は雅楽の二鼓が巫女を通して白拍子、曲舞、能と流れ込み、小鼓は雅楽の一鼓が田楽躍で用いられているうちに小型化した、という流れを想定する。日本の芸能に関わる多くの楽器について教えられることが多く、特に、龍笛に「喉」を入れたのは本来、折れてしまった笛を修繕するためだったという説の紹介は、透過X線での調査結果とも合わせて興味深かったが、世阿弥の時代の笛は龍笛だったとの説をはじめ、同稿に示された根拠だけではにわかに首肯しがたい部分も多い。同稿をきっかけにこの分野の研究が進むことを期待したい。

なお、『楽劇学』14号は、第一四回大会奏演とシンポジウム「舞う―舞楽と能」の報告を収めている。蒲生郷昭「技法用語から見た舞楽と能」は、「まう」「まい」の語意の説明、舞楽では360度回転する所作がなくまわる舞踊ではないとの指

Hosei University Repository

摘、舞楽と能における「序・羽・急」の考察など。高桑いづみ「奏演と話　舞楽と能の芸態比較」は当日の奏演の報告。

【狂言研究】

資料紹介・資料研究から。小谷成子・野崎典子「『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題七」（『愛知県立大学文学部論集（国文学科編）』55。3月）は表題の台本の翻刻の七回目で、巻五の前半十三曲を収める。狂言研究会「『文久写本狂言集』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻一」（『あいち国文』1。7月）は、表題の台本の翻刻を始める。天野文庫旧蔵の江戸末期の鷺仁右衛門派の台本で、十五冊八十四曲と小舞を収めるもの。一回目は八曲を翻刻し、担当は熊澤美弓・野崎典子・狩野一三・近藤愛・墨功恵・那須源枝・有馬園子。本文が安政賢通本に酷似し、日本古典全書『狂言集』に収められなかったものが四十曲あるので翻刻に価するというのだが、こちらを翻刻することに意味があるのかは疑問である。

林和利「【報告】豊橋・安海（やすみ）熊野神社蔵能楽資料の調査」（『催花賞受賞記念論文集』）は、明治から昭和初めまで能楽が盛んに行われていた豊橋魚町の文書資料が安海熊野神社に蔵されていたことを発見し、紹介するもので、米田真理作成の目録を付す。全一七二点。大半が狂言台本で、他に間狂言台本・三番叟関係書、若干の謡本・付がある。ただこの目録は撮影のためのメモ程度のもので、所収曲も全部は示されず、和泉流らしいが、それはどこにも書かれていない。解題を付して紹介されるべきものである。

史的研究では、橋本朝生「大蔵虎明上演年譜考」（『能楽研究』31）は、大蔵虎明の七六二回に及ぶ上演年譜を提示し、それを元にその生涯を追う。上演曲の傾向からやや線の細い役者と見られていたかとする。父虎清・弟清虎を合せて三人の上演記録のある狂言は一五五曲で、大蔵虎明本には非所演曲が多いのではないかとするのは、個々の曲の事情をあえて無視した乱暴な論だが、問題提起にはなろう。近年発見されたものを含めた著作・文書の一覧を付し、それらに見える花押六種を載せるのは今後文書類が発見された場合の年代判定に役立つかと考えたものである。

作品研究では、複数曲にわたるものから。林和利「狂言類型曲の成立順系譜論（一）―言語論争の狂言について―」（『名古屋女子大学紀要（人文・社会）』53。3月）は、古歌や謡を引用して言葉の論争をする類の狂言について成立順を考えようとして〈右流左止〉からの系譜を掲げるが、流儀間・台本間で曲名に異同のあるものや内容に異同の大きいものの方が成立から長い時間が経過していて古いという前提そのものが成り立つまい。それでは〈末広がり〉は新しいということになろう。資料の時点として、天正狂言本にあれば天正六年とするのも、年記が本文とは別筆であることを無視している。また天正狂言本の背後にたくさんの狂言があったことをも想定すべきであろう。山下宏明「平家物狂言を読む（二）」（『愛知淑

Hosei University Repository

徳大学論集―文学部・文学研究科篇―』32。3月）は、前年の続稿。座頭狂言の他、〈忠度〉など平家物語を出典とする能の間狂言をも取り上げて、狂言が能の世界を「虚仮」にするとする。川島朋子「狂言と鳥」（『紫明』20）は「鳥」の特集の一編で、〈鳴子〉など鳥が話題となる狂言を紹介し、中世、人と密接なつながりがあったとする。野崎典子「見所人の笑み」（『催花賞受賞記念論文集』）は、〈ぬらぬら〈竹生嶋参〉〉の終曲部のセリフ、〈鱸庖丁〉の「ほうじょう」の語について諸本を列挙し、狂言の笑いが観客一人一人に委ねられているとするのだが、〈ぬらぬら〉のセリフが卑猥なのはその通りで、「ほうじょう」に様々な漢字が宛てられるのは書き手の問題に過ぎないのではないか。田崎未知「座頭狂言考―式目の裏返しをする狂言―」（同上）は前掲の山下稿でも問題にされたことだが、〈清水座頭〉〈伯養〉を取り上げて、登場する盲人の身分を検討し、狂言は当道座の式目の禁制を破る行為を行っているのだとする。

小峯和明「説話と狂言の表現空間」（『能と狂言』5）は、説話と狂言の関わりについて、典拠論に留めず、言説論へ、説話の生きた「現場」としての狂言からとらえかえそうというもので、狂言の説話語りのパターンやセリフの繰り返し、もどき・パロディのありようを問題にする。また小峯が提唱する〈説話の本草学〉からも狂言は絶好の対象だとして、鬼の持ち物・柿に注目する。田口和夫「ヲカシのありか―天正狂言本を中心に」（同上）は、〈附子〉〈磁石〉を言語遊戯が成立の契機になった例とし、天正狂言本の福神物・百姓物の脇狂言においても導入部に言葉のヲカシがあるとし、軽い言葉のヲカシこそ狂言劇形成以前からの狂言役者得意の演技であったとする。だからこそ狂言は「狂言」なのであろう。網本尚子「伯父が登場する狂言」（『富士論叢』52―1。9月）は、伯父の登場する狂言にセリフの中でのみのものと出てくるものがあり、出てくるものではシテとなるもの、使い先として設定するもの等があると整理する。整理に終り、狂言で伯父を登場させる意義についてはこれからの課題である。

『国立能楽堂』掲載の小論が二編。大城学「沖縄の狂言」（283。3月）は、狂言を取り込んだ沖縄芝居チョーギンの上演に関連して、沖縄の狂言の種々について紹介する。羽田昶「めずらしい狂言について」（285。5月）は、稀曲〈鬼丸〉の上演に関連して稀曲を概観する。

以下、個別の作品研究。稲田秀雄「狂言「煎物」考」（『山口県立大学国際文化学部紀要』13。3月）は、〈煎物〉が中世京都の祇園会の芸能を核として構想されたこと、煎物売りの登場の仕方が狂言風流と関わること、煎物売りの鞨鼓打ちがモドキの芸であることを、他の狂言と関連づけつつ説き、闖入とモドキという演技術を生かして構想されたとする。山下宏明「狂言〈釣狐〉を読む」（『名古屋大学国語国文学』100。10月）は、〈釣狐〉を白蔵主の語リを中心に丁寧に読み解き、語リに能〈鵜〉との関わりを見て、狂言の「虚仮」を説く。なお「茂山本〈今悔〉」とあるのは安政賢通本の誤りとのこと。

Hosei University Repository

宗教学からの研究が二編。前川健一「対論から和解へ—狂言『宗論』を通じて—」（『東洋学術研究』46—1）は、「東洋文化と現代社会—儒教・仏教・道教による哲学対話—香港中文大学との共同シンポジウムより」の特集の一編で、「宗教間対話」の観点から〈宗論〉を見る。浄土僧と法華僧による滑稽な宗論の打ち切りについて「互いが言うべきことは言って、理解不能な点まで達した」のであり、そこで「初めて和解へのプロセスが開始される」とし、結末には「中世人なりの宗教的和解についてのヴィジョンがこめられている」とする。深く納得させられる論である。芳澤勝弘「白隠の蟹払子図—狂言『蟹山伏』のこと」（『禅文化』203）は、江戸中期の臨済僧、白隠の禅画「蟹払子図」（蟹と払子が対峙する絵）にある「小足八足大足二足我見て如何　拂子が云く蟹ではなひか」の賛について、〈蟹山伏〉の話を元にしたものとする。蟹化物の伝説と〈蟹山伏〉の先後については判断が難しいが、能登の禅寺に伝わる伝説では僧が蟹の化物を払子ではらったとするものがある。この伝説を伝える禅寺は多いが、この絵とともに伝えられたのかも知れない。いつ頃のものか、知りたいところである。

絵画資料を扱うもの。藤岡道子「玉手菊洲の能狂言絵」（『聖母女学院短期大学研究紀要』36。3月）は、平成十四年の同誌で紹介された玉手梅洲の弟菊洲の能狂言絵についての論。能の絵が多いが、ここであげる。菊洲の伝記を確認した上で作品八点をあげ、未紹介のものについては写真を載せ、明治期の能・狂言の実際を知る好資料とする。

間狂言研究では、田口和夫「〈奈須与市語〉演出の歴史」（『鍐仙』553。1月）は、〈八嶋〉の替間〈奈須与市〉が信長が将軍より腹巻を拝領した折の演出を発端とし、家康の時代に形をなした、とその定着の歴史を追う。山本東次郎「脇能『絵馬』の間狂言について」（『観世』4月）は、蓬莱の鬼たちが出る〈絵馬〉のアイに風流の面影が見えるとする。

国語学的研究では、研究とその成果を活かした実践として、『能と狂言』5号の特集「狂言による中世口語の復元」をまずあげたい。前年の能楽学会大会の大会企画「中世口語の復元」の報告で、橋本朝生「狂言による中世口語の復元」で企画の意図、制作の過程を説明した上で、小林千草「大蔵虎明本〈河原太郎〉復元考—室町の特徴的な音韻とことば」は、大蔵虎明本〈河原太郎〉の『日葡辞書』などによる音韻の復元と室町期に特徴的なことばについて論じ、坂本清恵「狂言の音声復元—十六世紀末・十七世紀初のアクセントを中心に」は、室町末・江戸初期の京阪の状況を各種資料によって推定し、和泉流天理本〈川原太郎〉の音韻・アクセントを復元し、復元台本を付す。大会ではこれらの成果によって実演が行われたのだが、それを聞いての考察が二編。稲田秀雄「「河原太郎」の演出のことなど」は、虎明本と天理本の記述態度が違うものの、ともに現行より荒っぽい演出であったとし、長谷川千秋「失われたことばに声を与えること—「中世口語の復元実演」を聴いて」は、復元作業の困難さはあるものの

Hosei University Repository

「声」のひとつの可能性を示したものとする。自分で関わりながら言うのもおかしいが、面白い企画で、再演の要望もあろうかと思ったものだが、そんなことはない。なお小林千草「大蔵虎明本〈河原太郎〉復元本文と国語史的考察」(『湘南文学』41。3月)は、前掲稿の補足的なもので、復元本文を載せ、表現のあり方について詳しく論ずる。

語彙の分野では、小林賢次「鷺流狂言享保保教本の用語」(『女子大国文』140。1月)は、まず国語辞書に用例として採録されている享保保教本の語彙について、かつての翻刻の誤刻による誤りがあることを指摘する。『日本国語大辞典』は『狂言辞典語彙編』に拠ることが多く、同書は活字本しかない時点のものなので、ありえることだが、現になかった言葉が辞典類に登載されているのは確かにまずかろう。さらに保教本にその語の初出例となるもの、用例が極めて稀なものがあるのをあげる。同「「物狂(ぶっきゃう)」と「軽忽(きゃうこつ)」—狂言台本における使用状況を中心に—」(『國學院雑誌』11月)は、表題の二語について諸流台本での使用状況を調査し、享保保教本に見える「ウツケウ」の語を「物狂」の衰退段階における一つの語形とする。

文法分野では、安志英「狂言における逆接条件表現に関する一考察—男女の位相を中心に—」(『立教大学日本文学』99。12月)は、逆接条件表現について、虎明本と虎寛本の女狂言によって男性語と女性語の位相について考察したもので、仮定条件表現の「テモ」「トモ」、確定条件表現の「ガ」「ドモ」に位相の違いが目立つとする。

待遇表現の分野では、林弘子による三編がある。「天理図書館蔵『狂言六義』の二人称代名詞「そのはう」について」(安田女子大学『国語国文論集』37。1月)は、天理本の「そのはう」について、従来言われているのとは違って敬意の高い語とする。また「其方」とあるのを「そのはう」と読むものとする。「天理図書館蔵『狂言六義』の二人称代名詞「こなた」について」(『安田女子大学大学院文学研究科紀要』12。3月)は、天理本の「こなた(様)」について敬意の高い語ではあるが、使用場面の状況に応じて用い方を工夫しているとする。「天理図書館蔵『狂言六義』の待遇表現—一人称代名詞を中心に—」(『国文学攷』196。12月)は、天理本の一人称代名詞を取り上げ、待遇価値の高い語から四群に整理し、序列を越えて入れ替わるものもあるとする。「そのはう」は虎明本にはないとのことだが、他については同時代の虎明本との比較、また後の和泉流台本との比較も望みたいところだが、天理本を丁寧に読み込んでいる。

【外国語による能楽研究】

平成一九年の英語論文に関する大きな話題としては、Asian Theatre Journal 誌が狂言の特集を組んだことが挙げられる(*Asian Theatre Journal* 24, no. 1, 2007)。これまでにも能・狂言に関する論考を多く載せ、外国語(英語)による日本研究の一つの受け皿の役割を担ってきた同誌であるが、そこ

Hosei University Repository

で狂言に特化した特集が組まれるというのは一つの画期であり、そのこと自体が、外国語圏における能楽研究の現況の一端を示すだろう。

内容的には、十八篇ほどの論稿から成るうちのほぼ半数が狂言作品の解説つき翻訳であり、残りは、狂言師へのインタビュー、これまでになされた狂言の翻訳の一覧、国内外での狂言に関する催しや企画、教育の取り組みなどの紹介である。狂言の歴史の概説として、戦後の狂言界の様子をまとめた小林責の文章(『日本古典芸能と現代能・狂言』〔岩波セミナーブックス、一九九六年〕所収)の翻訳が収められているが、その他に歴史研究や作品研究にあたるものはない。翻訳については、現行曲・人気曲ばかりでなく、新作やかなりの稀曲も取り上げられているのが本特集の特徴で、作品名を列挙すれば、〈末広〉〈清水〉〈左近三郎〉〈茶髭座頭〉〈箕被〉〈右近左近〉〈濯ぎ川〉〈穴〉〈Japannequines〉が取り上げられている。

結果として特集の過半が翻訳という形になったことについては、評価が分かれるところであろう。編者のコメントで、この特集が従来の狂言研究に欠けている部分を補うと述べられているのだが、具体的にどこが欠けている(と著者たちが考えている)のかは明示的な形では示されていない。翻訳曲の選定がどのようになされたのかも不明である。印象としては、解説にあたる部分(いわゆる前付け)にも、発展の可能性を持つ論点が含まれているように思う。多くは一言触れるだけにとどまっているので、それらの論点を今後いかに本格的な議論に展開していくかが、課題と言えよう。

また国内外での各種取り組みについても、うまく問題を切り出せれば、有益な知見を導くことができるように感じられた。特に、こちらでは問題が具体的な形で出てくるため、興味をひかれるポイントが随所にあった。一例を挙げれば、Laurence Kominz の "Authenticity and Accessibility: Two Decades of Translating and Adapting Kyogen Plays for English and Bilingual Student Performances" (235–246) は、大学で学生に狂言を教える著者の経験を語っている。外国語での翻訳上演の際、原曲への忠実さ(authenticity)とわかりやすさ・楽しませること(accessibility)とのバランスが難しいというのは、おそらく誰もが思い当たる、一般的な問題であろうが、著者は一般論ではなく、学生に狂言を教え、上演を企画する際、著者がどのような問題に突き当たったか、それに対してどのような解決策を講じたか、その解決策が妥当であったかどうか等を、具体的に提示しているのである。原曲への忠実さを、文章の字面ではなく別のレベル(観客の印象や経験の様態など)に移すことで、authenticity と accessibility とが対立しないポイントを見出す可能性があることなど、興味深い指摘がいくつかあった。取り組みは成功例ばかりではないし、講じられた解決策自体に対する賛否もあろう。しかしともあれ、今後こうした形で、問題点をその都度の解決策ないし解決案とあわせて具体的に提示していくことが、「狂言とは何か」という本質的な問題に関する議論を膨らま

Hosei University Repository

せることにつながるのではないだろうか。

その他、能楽関係の論文について、管見に入ったものは、以下の二点。

Cross, Tim. "Performing Hakata: Yamakasa and Sosaku Noh." 福岡大学人文論叢39, no. 2(2007): 367–407.

創作能〈博多山笠〉の概要を、能およびその他の芸能メディアが、国家ないし地域アイデンティティ創出と関わってきた歴史の延長上に置いて、レポートする。そのような芸能メディアの持つ「政治性」について、著者がどういう立場をとるのかは不明である。

Yip, Leo Shingchi. "No as Sociopolitical Commentary: Staging Chinese Literati in Medieval Japanese No Theatre." *Asian Theatre Journal* 24, no. 2(2007): 505–517.

能作品において中国的な題材がどのように扱われているかを、〈三笑〉と〈白楽天〉を題材に論ずる。能における中国表象の問題については既にいくつかの試みがあるが、本論とそれらの先行研究との視点の異同が説明されず、また分析にあたって詞章の引用がないため、未消化な印象を受ける。著者には他の作品の分析を含む博士論文があり、本論はその一部という位置づけのようであるが、より踏み込んだ議論の展開を望みたい。

狭い意味での能楽研究に含まれるものではないが、能が他の領域に与えた影響等、関連するものとして以下のようなものがあった。

Borgen, Robert. "A History of Domyoji to 1572 (or Maybe 1575): An Attempted Reconstruction." *Monumenta Nipponica* 62, no. 1(2007): 1–55.

道明寺の歴史を辿る中で、能『道明寺』についても触れる。

Tyler, Royall. "The True History of Shido Temple." *Asian Folklore Studies* 66, no. 1/2(2007): 55–82

〈海人〉や〈当願暮頭〉等と関係の深い『讃州志度道場縁起』を含む七つの志度寺縁起のうち、五つを英訳する。

Zarrilli, Phillip B. "An Enactive Approach to Understanding Acting." *Theatre Journal* 59, no. 4(2007): 635–647.

ベケットの作品を題材に、演劇を生理心理学(psychophysiology)の観点から見ていこうと提唱する論。著者はインド演劇の専門家で、非西洋の演劇や演劇論に、従来の演劇研究では捉えられなかった演劇の新たな側面と可能性を見出そうとしており、先行研究としてM. Nearmanや S. Quinnらの世阿弥研究を挙げている。いわゆるアフォーダンス論の文脈で様々な芸術現象を捉えようとする動きが近年ますます強まってきており、そうした流れの一環と見なせようが、能を含めた個々の演劇ジャンルがそのような観点からどのように見えてくるのか、今後の展開が期待される。